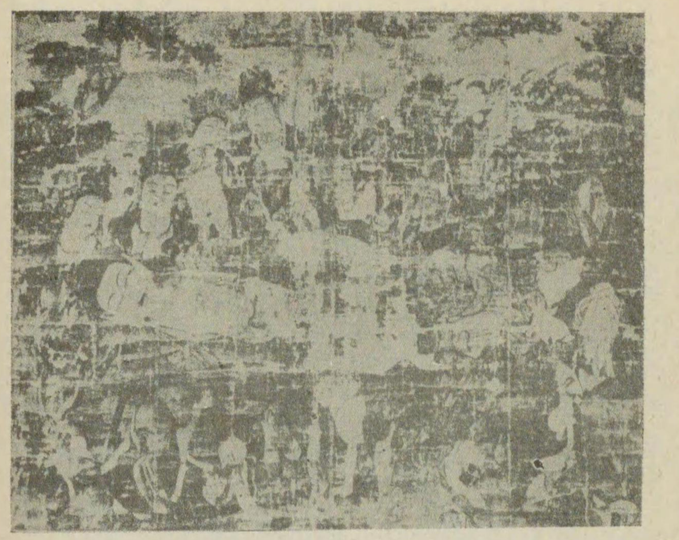


(第五十四圖)

毎年二月十五日には、各寺に此の種の繪像を懸けて法會を修するところから、新古善惡にかゝはらず、大抵の寺院には一幅づゝ襲藏してゐる譯である。

今一々それ等の圖像を解說する邊はないが、古來涅槃像は高野山の古圖を始め、多くは畫中の人物に一々是は誰、彼は誰と言ふ樣に名前が書きこんであるので、諸大弟子、諸菩薩、諸天、八部鬼神、乃至長者、居士、婆羅門、善男善女の中、その主なるものは、それが誰であると云ふことが解る樣になつてゐる。又殊に中古以後近世の畫像は、大乘の大般涅槃經等の經意に依り、佛

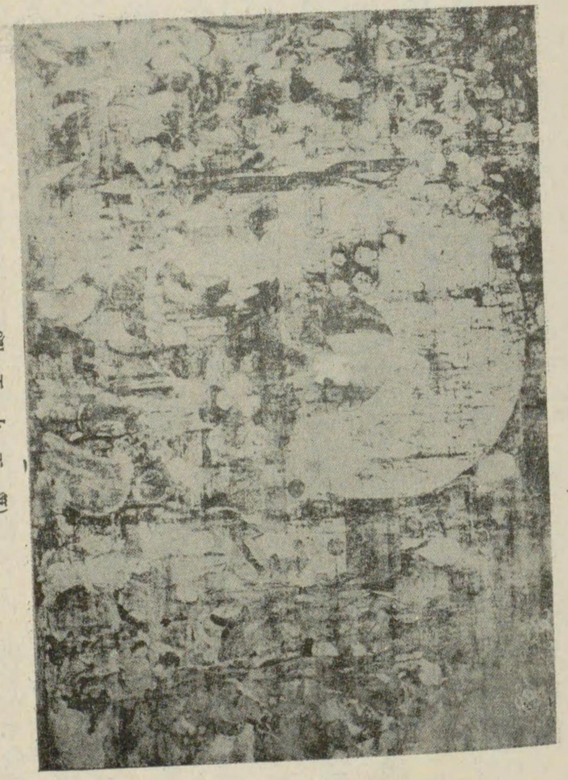
涅槃の時には、五十二類の衆生が、其の會座に侍して悲泣哀憐の情を表したと云ふことにして、それ等五十二類を顯はすために、具に鳥獸昆蟲の類に至るまで畫き出してあるのである。所謂五十二類とは比丘衆、比丘尼衆、比丘衆中の十地の菩薩、菩薩摩訶薩衆、諸優婆塞、諸優婆夷、毘舍離城の諸離車等、大臣長者、毘舍離王及び其の夫人後宮眷屬、閻浮提內所有諸王（阿闍世王を除く）並に人民、諸王夫人（阿闍世夫人を除く）、諸天女衆、諸龍王等、諸鬼神王、金翅鳥王、乾闥婆王、緊那羅王、摩睺羅伽王、阿修羅王、陀那婆王、羅刹王、樹林神王、持呪王、貪色鬼魅、天の諸采女、地の諸鬼王、諸天子等、四方風神、主雲雨神、大香象王、師子獸王、諸飛鳥王、水牛牛羊、四天下中の諸神仙人、閻浮提中の一切蜂王、閻浮提と無量世界との中間の人天衆、閻浮提の所有山神衆、四大海神及び諸河神衆、四天王衆、釋提桓因及び三十三天衆、夜摩天衆、覩率天衆、樂變化天衆、第六天衆、大梵天王及び梵王、阿修羅衆、欲界天波旬衆、大自在天衆、東方佛世界無邊身菩薩、南方佛世界無邊身菩薩、西方佛世界無邊身菩薩、北方佛世界無邊身菩薩等を云ふのである。此の名數は本と經文に明記されてある譯では無いが、支那の學徒の手に依て列擧され、爾來五十二衆又は涅槃衆などとも稱し、佛の涅槃の會座には此の如き衆多部類の衆生が來

集せりと傳へられ、後には畫像にもその意を受けて諸鳥獸をも畫き顯はすことになつたのである。但し斯く涅槃像に鳥獸等をも細かに畫くことは、印度や支那古代には殆ど其の作例を見ぬのである。

第三十八　如來母子相見

傳唐人筆釋尊金棺出現圖絹本着色畫像（國寶、山城長法寺藏）

〔解題〕釋尊既に涅槃に入り給ひしかば、弟子等、轉輪聖王の法に倣ひて之を金棺に收め奉つた。時に阿那律は忉利天に昇り摩訶摩耶佛母の所に往きて此事を告げた。摩耶涕泣懊惱に勝へず、空より來下して雙樹の所に赴き、佛棺を見て悶絶したが、やがて棺所に至り、頭頂にて禮を作し、昏迷して音を揚げて泣き悲しみ、又顧みて如來の僧伽梨衣、鉢、錫杖を見て、右手に之を執り、左手に頭を拍ち身を擧げて地に投じ悲號慟絶したのであつた。その時に釋尊は大神力を現じて金棺中より合掌して起ち出でられ、その身の毛孔の中よりは千光明を放ち、一一の光明の中に千の化佛があつて、亦皆悉く合掌して摩訶摩耶に向はれ、梵音を以て慰諭辭別せられたと



（圖五十五頁）

いふことである。

〔圖說〕 佛母摩耶夫人が佛の涅槃所に來下して悲泣悶絕せしに、釋尊卽ち金棺より出現して最後の辭別をなしたまへるところを畫いたもので、卽ち釋尊は金棺中より半身を現じて合掌して佛母摩耶に向つて坐し、身より千光明を放ち、而も光中に多數の化佛在して、亦合掌して摩耶に向つてゐる。佛母摩耶は棺前に跪坐し、今しも金棺より出現したまへる佛陀を仰ぎ觀て、慰諭と最後の別辭を受けて居られる。そして此の佛及び摩耶夫人を圍繞して高貴德王、師子吼等の諸大菩薩、阿難等の諸大弟子、海慧等の諸比丘尼、耆婆大臣、護世長者等の諸善男女、天龍夜叉健闥婆、阿修羅等の諸天鬼神、乃至象、師子等の禽獸の類に至るまで、此の會座に列なれる一切のものは、皆悉く此の未曾有なる難思奇特の光景に接し、哀愁の間に亦各々面を擧げて驚異の眼を以て佛陀並に佛母摩耶を凝視してゐるのである。

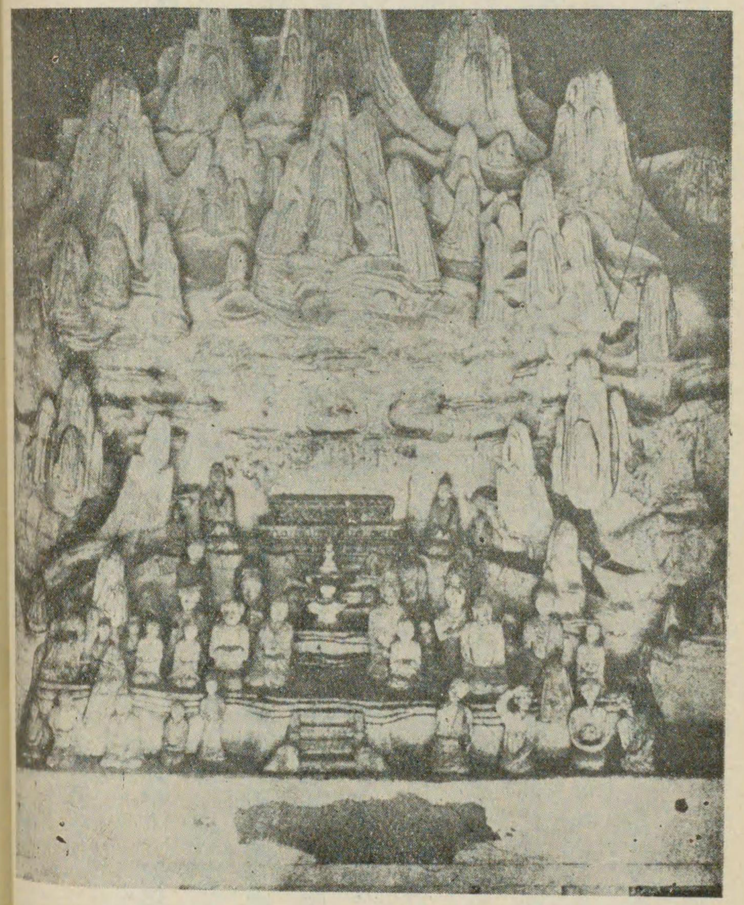
第三十九　舍利供養

分舍利變相塑像（國寶、大和法隆寺五重塔安置）

〔解題〕 涅槃に入り給へる釋尊の遺骸は轉輪聖王の法によりて金棺に收め奉り、然後に之を荼毘し、その舍利（Sarira 身骨）は、八國に之を分ち、八王各々塔を建てて之を供養したのである。

〔圖說〕 釋尊の遺骸荼毘後に於ける佛舍利護持の有樣を、泥塑の群像を以て顯はしたもので、中央には金棺が安置せられ、その前には舍利瓶を奉安し、其の前後左右には數多の人物が列座してゐる。それ等一々の人物の何者であるかは詳かでないが、既に大聖涅槃の後であり、最早釋尊の聲咳に接することが出來ぬによつて、遺弟道俗、諸天善神等相俱に佛舍利を護持してゐる所と見られるのである。蓋し我が國に於ける此の種の造像としては、奈良藥師寺の西塔には今圖と同じく泥塑の群像を以て分舍利の有樣が造顯せられてあつたと記錄には殘つてゐるが、既に夙に壞失されて世に傳はらぬのは甚だ遺憾である。

荼毘、分舍利、建塔等に關する圖像は、我が國に於てこそ甚だ稀なりとはいへ、印度などには數も非常に澤山にあり、圖相も亦種々趣を異にしたものがある。その中でラホール博物館所藏の



(第五十六圖)

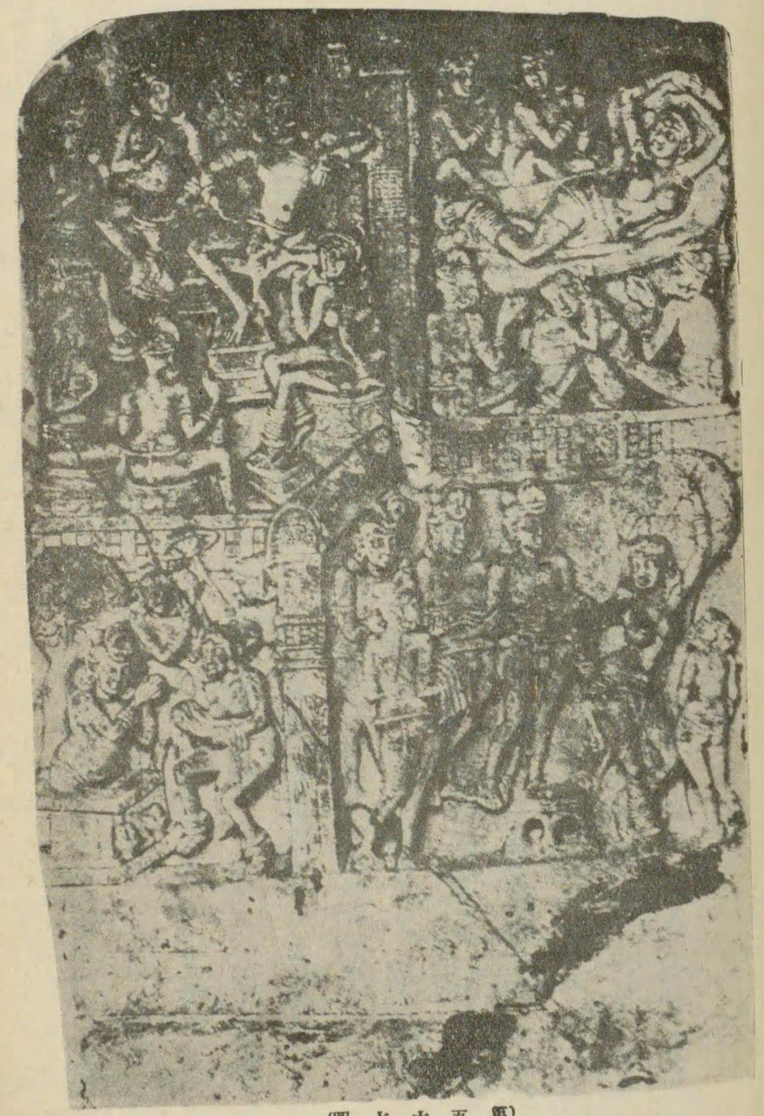
健駄邏地方サンガーオ發見の彫刻、カルカツタ博物館所藏の同ミヤーンカーン發見の彫刻等には納棺後荼毘の前に大迦葉の到著せる光景を顯はし、ラホール博物館所藏のシクリ發見の彫刻には、荼毘の光景を顯はし・又同ラホール博物館所藏のラーニーガー發見の彫刻等には、香姓婆羅門分骨の光景を顯はし、又サンチー塔門の彫刻、ラホール博物館所藏の健駄邏地方發見の彫刻には、八國王舍利を護持して本國に還歸するの光景を顯はし、又建塔供養の圖像に就きては、佛陀伽耶、バルフート、サンチー、アマラーヴチーを始め、到る處の遺品に存するのである。

第四十　託胎占夢誕生天廟參詣

南印度アマラーヴチー塔
欄楯彫刻
(J. Fergusson—The Tree and Serpent Worship, P. 250, Plate XCIII.)

〔解題〕釋尊一代の行狀を繪傳的に次を逐ふて畫かうと試み、先づ右脇託胎から、靈夢の占相、藍毘尼園の降誕、並に天廟に參詣したまふに至るまで、凡そ佛傳畫としては、その發端に屬する降誕前後の事蹟を擧げたものである。

〔圖說〕託胎と占夢と誕生と天廟に參詣の次第とを畫き顯はしたもので、卽ち圖の向つて右方の上段は託胎であつて、摩耶夫人が牀上に安臥して居らるゝと、釋尊は白象の形を現じて兜率天より來下し、右脇より母胎に入るといふのである。次に圖に向つて左方の上段は占夢であつて、卽ち摩耶夫人が白象右脇より入るとの瑞夢を感見した事を、淨飯王と俱に耆德の婆羅門を集めて占相せしめてゐる所、牀に倚り後に拂子等を持てる二人の侍者にかしづかれ居るのが淨飯王で、その前に同じく牀に腰を懸け、右手を擧げて何事か語りつゝある姿勢をなせるは摩耶夫人である。その傍方に四人の人物が、同じく圖逆に坐し、同じく右手を擧げて、何事か應答しつゝある



(圖五十七第)

如く見ゆるは、婆羅門が占夢の結果を報へつゝある所である。此の種の圖像の面白いものが瓜哇のボロブヅールの彫刻中にもある。又次に圖の向つて右方の下段は、釋尊降誕の次第を顯はしたもので左手を以て樹枝を把つてゐるのは摩耶夫人である。而して菩薩はその右脇より生れたまふ。其の脇に竝び立てる四人の人物は、四天王であつて、手に白氈を捧げて今や降生したまふ菩薩を接受し奉る所である。是れ亦古式の佛傳畫であるから、特に佛の形像は畫いてないが、後世の圖ならば、右脇から菩薩其の形を現はしたまひ、その下の臺上には菩薩右手を擧げて師子吼したまふ尊像が造顯せらるべきである。又次に圖の向つて左方下段は、菩薩既に降誕したまひて後幾もなく姨母大愛道に懷かれて天廟に入りしに、天像座より起つて菩薩を禮敬したと傳へらるゝその有樣を顯はしたもので、卽ち手に白氈を捧持して少しく腰を屈してゐるのは姨母大愛道であつて、氈上には別に菩薩の形像を顯はしてはないが、實は其の上には生れてまだ日數も經たぬ菩薩が在すのを、今玆には特に之を圖示することを省略したのである。大愛道の後にゐる侍者が蓋を指し懸けてゐるのは、是は菩薩を掩ふてゐるのであつて、其の左に半身を現じて合掌恭敬してゐるのは、天像が大愛道の氈上に抱き奉り居る菩薩に向つて禮拜してゐるのである。

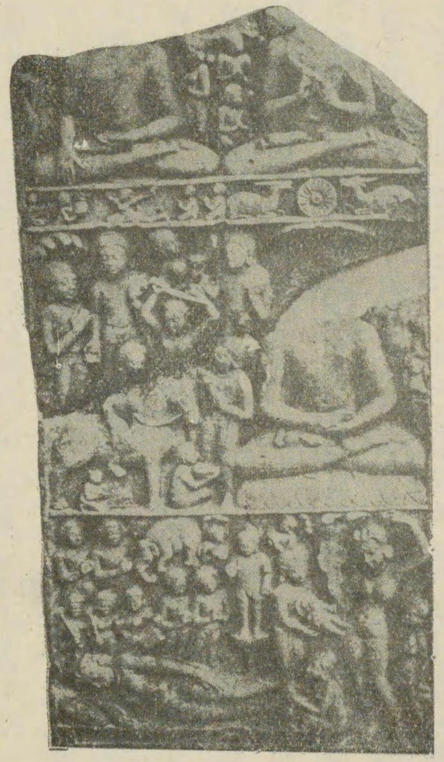
第四十一　託胎誕生出家成道轉法輪

中印度サールナート遺品彫刻
(Daya Ram Sahni.—Catalogue of the Museum of Archaeology at Sārnāth, P. 186, Plate XX.)

〔解題〕釋尊一代の行狀を簡單に圖し顯はしたもので、託胎の靈儀と、誕生の師子吼と、出家踰城と、剃髮と、龍王の歸仰と、降魔成道と、鹿苑初轉法輪との事蹟が畫き出されてある。上部が缺損してゐるので、その上に何が畫いてあつたか詳かでないが、恐らく涅槃等の圖像があつたことと思はれる。

〔圖說〕三段に分たれてゐる中、その下段には託胎と誕生の有樣が畫かれてある。卽ち圖の向つて左方には、摩耶夫人の安臥の際に、菩薩が白象の身を現じて天宮より來下し母后の右脇より入胎する有樣を顯はし、圖の向つて右方には、摩耶夫人が左手を擧げて樹枝を採る時、菩薩右脇より出胎するところを顯はし、その圖の中央には、菩薩が胎より出で現に七歩を行き右手を擧げて師子吼したまへる時に、難陀婆難陀二龍王が香水を灌いでゐるところを顯してある。中段には出

家、剃髪、並に龍王歸仰の有様が畫かれてある。即ち圖の向つて左方の下隅には、菩薩が犍陟に乘じて城を踰えて出家する所、そのやゝ上方に太子自ら刀を執つて除髪する所、更にその上部に六年の苦行を棄てて、將に菩提道場に赴かんとする前に牧牛女の供養を受くる所、その左方の隅には、菩薩、飲食を受けたる鉢を尼連禪河に投じた時、迦梨龍王出現して菩薩を讃歎する所、又圖の向つて右方には、菩薩文隣樹下に於て七日入定したまへる時、文隣龍王出現して、菩薩を覆護し奉り、雨露蚊蟲の難を除きたる光景を圖し顯はしてある。又圖の上段は、向つて左方に降魔成道、右方



(第五十八圖)

に鹿苑初轉法輪の光景が畫かれてある。而して其の成道圖に於ては、佛の右邊に魔王、左邊に魔女を畫いたばかりでなく、その下方には嬌態を示してゐる魔女、及び佛の指地に對して出現した瓶を捧げた地神がゐるのである。又初轉法輪圖にあつては、佛の周遍には五比丘の侍坐するところを畫き、下段には法輪と二鹿形とを圖出して、所謂鹿苑初轉法輪の相であることを明示してゐるのである。

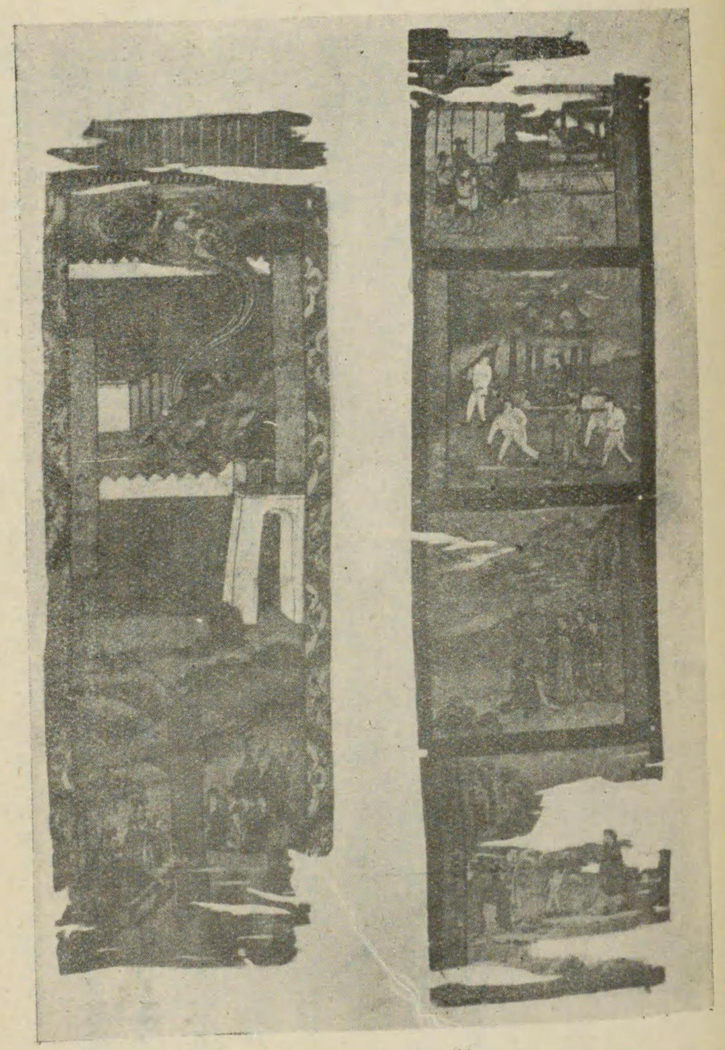
蓋し釋尊一代の行化を最も簡單に圖し顯はしたものとしては、降誕、成道、轉法輪、及び涅槃の四相を圖出したもの、又は之より更に昇天說法、龍宮教化などの數段の事蹟を加へて畫き顯はしたものが、サールナートの遺品中には比較的に數多くある。之より以前の作品としてはアマラーヴチーの遺品の中に、降魔、轉法輪等を畫いた古式にして而も簡單の佛傳畫があり、又同代或は稍々後の作品として、アジヤンターや、健駄邏地方の彫刻にも多數の佛傳畫があるのである。

第四十二　託胎歸鄉誕生師子吼

支那甘肅省燉煌千佛洞遺品
絹本一色繪畫
(A. Stein.—Ruins of Desert Cathay, II. P. 199, Plate VI.)

〔解題〕 佛の繪傳の一として、託胎と歸鄉と誕生と師子吼との有樣を圖し顯はしたもので、所謂佛傳畫として最も最初の一部である。

〔圖說〕 託胎の靈夢と、歸鄉と、無憂樹下の誕生と、降誕後の師子吼とを上から順次に四段に畫き顯はしたもので、卽ち圖の最上段は、摩耶夫人が宮殿中に寢てゐられると、菩薩が白象に乘じて天上より來下し、夫人の右脇より入胎するところで、印度の古圖では菩薩は象身そのものを現じて來下したことにして圖してあるが、此の圖には象そのもので無くて象に乘じて來下された相になつてゐる。是れは漢譯の或經典の說に本づいて畫いたからである。第二段は、摩耶夫人懷胎以後十月旣に滿じて產月になつた故に、輦輿に乘じて鄉家に赴かんとせらるゝ所、第三段は遙中藍毘尼園に至り、右手を擧げて無憂樹の枝をとりたる時、菩薩右脇より降誕しまふ處である。次に第四段は、降誕したまへる釋尊が、直に足に蓮華を踏みながら七步を行き、手を擧げて天上



(第五十九圖)

天下唯我獨尊の師子吼をしてゐらるゝところである。

此の圖は、我が國天平時代の遺品、過去現在因果經繪などと略々同性質のもので、印度の作物などは尠しも參考せずに、直接漢譯の經典に依つて、畫圖に畫き出したものである。從つて風俗も全く支那樣である。摩耶夫人の右脇否右袖から太子が生れ出でたまふ光景、是れ亦御物の金銅像などと比べて、その圖式の由來する所も考へられ、甚だ趣味深きことである。

第二　本生畫

一　本生譚

本生とは、梵語では闍陀迦(ジヤータカ)(Jātaka)といつて、釋尊が未だ成佛せられぬ幾百千萬年も古昔の前世に於ける修行時代の物語をいふのである。釋尊に限らず、苟しくも佛陀とならうとするには、三祇百劫の永い間、生れかはり死にかはりして種々の難行苦行を修し、勇猛精進に善本を殖ゑ功を積み德を累ねて最後に正覺を成じて佛陀となるのである。其のいはゆる修行時代の事蹟、特に釋尊についての物語が、佛所說の十二部經の隨一として本生經と名づけて傳承せられ、其の說話は廣く經典中に記載されてある。然らば釋尊は其の多劫多生の間、何う云ふ生を受け何う云ふ修行をされたかといふに、或時は仙人の身を受け、或時は天帝釋、或時は轉輪聖王の身を受け、或時は又國王、太子、王子、夫人、商賈、乃至貧人等の身を受け、或時は又更に象、師子、鹿、熊、雁、雞等の鳥獸の身をも受けられ、此の人間に於て檀波羅蜜等の六度の行を修せられたのであ

る。例せば儒童梵志の燃燈佛に遇ひ奉りて青蓮華を供養し、且つ髪を地に布きて佛をして踏ましめ、睒仙人の盲父母に孝養し、忍辱仙人の歌利王のために殘害に遇へる、頂生轉輪聖王、大善見轉輪聖王、大天轉輪聖王等の正法をもて善く四天下を治化せる、月光王の頭を截りて人に施し、快目王の惡婆羅門に眼を捨し、尸毘王の身を用て鴿に代れる、薩埵王子の身を餓虎に投じ、須大拏太子の二子並に妻を施捨せる、善生王子の身肉を父母に供養せる、象王の牙を獵夫に與へ、大熊の樵士を救助し、鹿王の溺人を水中より濟ひ、水牛王の善く惡猿の侮を忍べる、兎王の身を仙人に供養せる、獼猴王の身を殺して衆獼猴の身を全うせしめたる、或は又雁王の禮讓能く國王を化し、雞王の智明能く惡猫の誘惑を却けたる如き、即ち或時は布施の行を修して所有衣服飲食車馬輦輦醫藥等一切處世の資具、國土珍寶、乃至自の頭目髓腦を施し、或時は忍辱の行を修して手足等を切られ且つ種々の惡罵侮辱を蒙るも、而も慈愍の心を以て能く之を忍びて悔ゆること無く、又自から能く淨戒を持し、勇猛に精進し、禪定、智慧の行をも修得せられたと云ふのである。

蓋し此の本生譚は、現在經典中に收載されてある形のものが、凡て釋尊の金口から出たものであるか否かは聊か疑問である。寧ろ古くから語り傳へられた古聖賢の事蹟などに輪廻轉生の思想

が結び著き、釋尊は前世に斯の如き賢者聖者であつて、斯の如き善業德行を積まれたが故に、遂に萬德圓滿の佛陀となりたまふたと說くに至つたものと考へられる。その證據には彼の善見王、頂生王、大天王等は、皆往古の大王統の中の一人である。

二　本生譚に關する主要なる經典の解題

釋尊の本生に關する記事は、是れ亦大藏經中大小乘の經律論の各方面に涉りて弘く散說されてあつて、玆に一々之を列擧する餘裕は無いが、其の中にて比較的最も多數に此の本生譚を收載せる經典數部を出して左に譯者並に卷數等を略記することとした。

1　六度集經八卷　　吳康僧會譯

此の經は、吳の孫權の大元元年（西紀二五一）康僧會三藏の飜譯したもので、一部八卷、その中第一卷より第三卷までは、布施度無極章總じて六十六章、菩薩、薩婆達王、貧人、菩薩、偏悅王、國王、國王、仙難長者、普施、長壽王、（已上十章第一卷）波耶王、伽蘭王、薩和檀王、須大拏太子（已上四章第二卷）和默王、維藍梵志、鹿王、鵠鳥、孔雀王、兎王、理家、國王、梵志、理家、沙

門、――（―印は本生にあらざる説話、已上第三卷）第四卷は戒度無極章十五章、國王、象王、鸚鵡王、法施太子、國王、凡夫、商人、守墓人、凡人、獼猴、長者、墓魄太子、彌蘭商主、頂生王、普明王。第五卷は忍辱度無極章十三章。菩薩、睒仙人、羼提和梵志、童子、國王、獼猴王、虵、難王、盤達龍王、雀王、叔、國王、――。第六卷は精進度無極章十九章、凡人、獼猴王、鹿王、修凡鹿王、駈耶馬王、魚王、龜王、鸚鵡王、鴿王、精進辨比丘、清信士、小兒、商人、童子、天王、兄、帝釋、婦人、獨母。第七卷は禪度無極章九章―（初七章は佛傳）常悲菩薩、那賴梵志。第八卷は明度無極章九章、須羅太子、太子、凡人、儒童梵志、南王、阿離念長者、鏡面王、察微王、――等に關する本生譚凡そ九十章より成り、その中波耶王經、薩和檀王經、須大拏經、太子墓魄經、彌蘭經、頂生聖王經、普明王經といふ樣に、別して其内題の存するものが、第二卷に四、第三卷に一、第四卷に四、第五卷に四、第六卷に九、第八卷に八、計三十章あり、其の餘は皆題名を缺いて居る。而して上記の本生は、其の說話が孰れも古雅簡潔であつて、他の諸經典と對照上、孰れも原本的材料と認むることが出來るのみならず、諸方に散說されてある有名有用の本生は、殆ど十中七八迄網羅されてある。加之此の經所出の本生は、かのバルフートの古彫刻に造顯されて

ある本生畫と全く符節を合したる如く一致するもの、象王、獼猴王、修凡鹿王、睒仙人、墓魄太子、大天王等の數章ある中で、第六卷の獼猴王本生の如きは、其の遺圖がバルフート、サンチーの兩所に在りて、而も經證としては、大藏經八千餘卷の中に唯此の經一所にのみ存するものである（撰集百緣經中に類同のものあるも、彼の圖像を完全に解說し得るは今章のみ）。印度に於ける本生畫美術研究の祕奧が、此の經に由て始めて開かるゝものなるを思へば、その稀代の重典なること推して察すべきである。（宙五、四九右―九〇左・大正三、一―五二）

2 義足經二卷　　吳支謙譯

此の經は、吳の孫權の黃武二年より孫亮の建興二年（西紀二二三―二五二）に至る間に支謙三藏の翻譯したもので、一部上下二卷、桀貪王經、優塡王經、須陀利經、摩竭提梵志經、鏡面王經、老少俱死經、彌勒難經、勇辭梵志經、摩因提女經、異學角飛經（已上上卷）猛觀梵志經、法觀梵志經、兜勒梵志經、蓮華色比丘尼經、子父共會經、維樓勒王經（已上下卷）の十六の小經を收め、その中に鬱多童子、鏡面王等に關する本生が說かれてある。（宿五、五五左―六八右・大正四、一七四―一八九）

3 菩薩本緣經三卷　　僧伽斯那撰　吳支謙譯

此の經は、印度の僧伽斯那論師の撰著を、吳の支謙三藏の飜譯したもので、一部全三卷、毗摩羅品、一切施品、一切持王子品（已上上卷）善吉王品、月光品（已上中卷）兎品、鹿品、龍品（已上下卷）の八品より成り毘摩羅菩薩、一切施王、一切持王子、善吉王、月光王、兎王、鹿王、龍王に關する本生を收めてゐる。（藏七、七九左—九四右・大正三、五二—七〇）

4 撰集百緣經十卷　　吳支謙譯

此の經は、前と同じく吳の支謙三藏の翻譯したもので、一部全十卷、菩薩授記品、報應受供養品、授記辟支佛品、出生菩薩品、餓鬼品、諸天來下供養品、現化品、比丘尼品、聲聞品、諸緣品の十品より成り、滿賢姿羅門遙請佛緣、名稱女請佛緣已下、長爪梵志緣、孫陀利端政緣に至るまで總じて一百章、其の中商主、觀頂王、法護王、梵摩王、伽翅王、寶殿王、梵摩王、伽翅王、梵摩王、（已上卷第二）蓮華王、梵預王、尸毘王、善面王、梵摩王太子、梵摩達多王太子、鹿王、兎王、法護王子（已上卷第四）孫陀利王子（卷第八）仙人（卷第九）等に關する本生譚が記載されてある。（宿十、四四左—八七右・大正四、二〇三—二五七）

此の經は、西晉武帝太康六年（西紀二八五）正月、竺法護三藏の翻譯したもので、一部五卷、那賴經、分衞比丘經、和難經、邪業自活經、是我所經、野鷄經、前世諍女經、墮珠著海中經、梅閻摩梵志謗佛經、鼈獼猴經、五仙人經（已上卷第一）鼻甥經、閑居經、舍利弗般泥洹經、子命過經、比丘各言志經、迦旃延無常經、和利長者問事經、佛心總持經、護諸比丘呪經（已上卷第二）總持經、所欣釋經、國王五人經、蟲狐鳥經、比丘疾病經、審裸形子經、腹使經、弟子命過經（已上卷第三）水牛經、兎王經、無懼經、五百幼童經、毒草經、鼈喩經、菩薩曾爲鼈王經、毒喩經、誨子經、負爲牛經、光華梵志經、變悔喩經、馬喩經、比丘尼現變經、孤獨經（已上卷第四）梵志經、君臣經、拘薩羅國烏王經、蜜具經、雜讃經、驢駝經、孔雀經、仙人撥劫經、清信士阿夷扇持父子經、夫婦經、譬喩經（已上卷第五）の五十五の小經を收め、その中、那賴仙人、野雞王、年少梵志、導師商主、獼猴王、國王（已上卷第一）甥（卷第二）天人、福德王、拘迦利仙人、阿脂王、天帝釋（已上卷第三）水牛王、兎王、鼈王、轉輪王、光華梵志（已上卷第四）國王、密善財長者、甘庶烏王、五通仙人、仙人、淨修梵行天、孔雀王、國王、仙人、國王、獨母、魚、首達、儒童梵志（已上卷第五）等に關する本生が其の中に說かれてある。（宿五、二二右—五五左・大正三、七〇—一〇八）

6 菩薩本行經三卷　　失譯人名

此の經は、譯人の名を詳にしないが、東晉時代に翻傳されたものであるらしい。一部全三卷、別に品名を分たない。迦那迦跋彌王、跋摩竭提夫人、度闍那謝梨王（已上上卷）比藍婆羅門、修陀梨鄯寧轉輪王（已上中卷）尸毘王、摩訶薩埵王子、舍尸王、阿彌陀迦良王、修陀素彌王、須大拏太子、摩休沙陀太子、摩訶波利王、羼提婆羅仙人、迦尸王、毗婆浮梵天王、毗楞竭梨王、優多梨仙人、跋彌王、大自在天太子、白象王、比豆梨大臣（已上下卷）等に關する本生が說かれてある。（宙五、三四左—四七右・大正三、一〇八—一二四）

7 大方便佛報恩經七卷　　失譯人名

此の經亦、譯人の名を詳にしない。後漢代の譯とも傳へられてゐるが、少くとも東晉以前のものではあるまい。一部全七卷、序品、孝養品（已上第一卷）對治品、發菩提心品（已上第二卷）論議品、惡友品、慈品、優波離品、親近品の九品より成り、須闍提太子（卷第一）婆羅門（卷第二）忍辱太子、鹿母夫人（已上卷第三）善友太子（卷第四）大光明王（卷第五）婆羅門子、堅誓師子（已上卷第七）等に關する本生が說かれてある。（宙五、初—三四左・大正三、一二四—一六六）

8 賢愚經十三卷　　元魏慧覺等譯

此の經は、凉州の僧慧覺等が曾て于闐國に於て之を聞き、後還て高昌國に至り元魏太武帝の太平眞君六年（西紀四四五）に翻譯したもので、一部全十三卷、梵天請法六事品、摩訶薩埵以身施虎品、二梵志受齋品、婆羅梌貧人身供養品、海神難問船人品、恒伽達品、須闍提品（已上卷第一）波斯匿王女金剛品、金財因緣品、華天因緣品、寶天因緣品、羼提波梨品、慈力王血施品、降六師品（已上卷第二）鋸陀身施品、大光明王始發道心緣品、微妙比丘尼緣品、阿輸迦施土品、七瓶金施品、差摩現報品、貧女難陀品（已上卷第三）摩訶斯耶優婆夷品、出家功德尸利苾提品（已上卷第四）沙彌守戒自殺品、長者無耳目舌品、貧人夫婦疊施得現報品、迦旃延敎老母賣貧品、金人品、重姓品、散檀寧品（已上卷第五）月光王頭施品、快目王眼施緣品、五百盲兒往返逐佛緣品、富那奇緣品、尼提度緣品（已上卷第六）大劫賓寧品、梨耆彌七子品、設頭羅健寧品（已上卷第七）蓋事因品、大施抒海品（已上卷第八）淨居天諸佛洗品、善事太子入海品、摩訶金奴緣品、善求惡求品（已上卷第九）阿難總持品、優婆斯兄所殺品、兒語殺父品、須達起精舍品、大光明王始發無上心品、勒那闍耶品、迦毘梨百頭品（已上卷第十）無惱指鬘品、檀膩羈品（已上卷第十一）師質子摩頭羅世質品、檀彌羅品、象

護品、婆娑離品、二鸚鵡聞四諦品、鳥聞比丘法生天品（已上卷第十二）、五百雁聞佛法生天品、堅誓師子品、梵志施佛納衣得受記品、佛始起慈心品、頂生王品、蘇曼女十子品、婆世蹟品、優婆毱提品、汪水蟲品、沙彌均提品の六十八品より成り、修樓婆王、虔闍尼婆梨王、毗楞竭梨王、曇摩鉗太子、鬱多羅仙人、尸毘王、摩訶薩埵王子、須闍提太子（已上第一卷）羼提波梨仙人、慈力王、專光王、羅睺羅施王子（已上卷第二）鋸陀、大婦、婆塞奇王、擔蛇人、牟尼王女、大光明王（已上第三卷）散檀寧長者（第五卷）月光王、快目王（已上第六卷）設頭羅健寧王（第七卷）刹羅伽利王、大施婆羅門子（已上第八卷）善事太子、提婆令奴王、善求商主（已上第九卷）勒那闍耶商主（第十卷）須陀素彌王、阿波羅提目佉（端正）王（已上第十一卷）阿淚吒商主（第十二卷）蹂迦毗（堅誓）師子（第十三卷）等に關する本生が其の中に說かれてある。（宿九・大正四、三四九—四四六）

9 雜寶藏經十卷　元魏吉迦夜譯

此の經は、元魏孝文帝の延興二年（西紀四七二）に吉迦夜三藏の翻譯したもので、一部全十卷、十奢王緣、王子以肉濟父母緣、鸚鵡子供養盲父母緣、棄老國緣、佛於忉利天爲摩耶說法緣、往昔母迦旦遮羅緣、慈童女緣、蓮華夫人緣、鹿女夫人緣、六牙白象緣、兎自燒身供養大仙緣、善惡鬪諍

緣、佛以智水滅三火緣、波羅㮈國有一長者子供天神感王孝緣、迦尸國王白香象養盲父母并和二國緣已下、烏梟報怨緣、婢共羊鬪緣に至る百二十一章より成り、その中、王子、睒摩迦仙人、鸚鵡子、大臣、父、兒、慈童女、仙人（已上第一卷）六牙白象、兎、善獼猴、鸚鵡、長者子、白香象、王子（已上第二卷）三藏比丘、大達龍王、瞻蔔龍王、共命鳥、鵝王、大龜、斯那大臣、山鷄王、吉利鳥、老仙人、估客主（已上第三卷）師子、華施者（已上第六卷）、五通仙、婆羅門子、仙人、輔相子達多（已上第七卷）、鸚鵡、獼猴王、師子商主、比圖醯大臣、比舍佉商主、雁（已上第九卷）長者（第十卷）等に關する本生が說かれてある。（宿十、初—四四左・大正四、四四七—四九九）

10 菩薩本生鬘論十六卷　聖勇菩薩撰　宋紹慧詢等譯

此の論は、宋代に至り紹德慧詢等の翻譯したもので、一部十六卷、投身飼虎緣起、尸毘王救鴿命緣起、如來分衞緣起（已上卷第一）最勝神化緣起、如來不爲毒所害緣起、兎王捨身供養梵志緣起（已上卷第二）慈心龍王消伏怨害緣起、慈力王刺身血施五夜叉緣起、開示少施正因功能緣起（已上卷第三）如來具智不嫉他善緣起、佛爲病比丘灌頂獲安緣起、稱念三寶功德緣起、造塔勝報緣起、出家功德緣起（已上卷第四—卷第十六）の十四章より成り、其の中、摩訶薩埵王子、尸毗王、善生

王子（已上第一卷）、醜王子、兎王（已上第二卷）、慈心龍王、慈力王（已上第三卷）等に關する本生が收載されてある。而して此の論と同一著者同一題名の著書であつて現に梵本を存するものがある。即ちアールヤスーラ（Ārya-śūra, 聖勇）の本生鬘（Jātakamālā）である。此書既に獨逸のケルン氏に依て原文が刊行され、スパイヱル氏に依て英語に翻譯されてあるが、之を漢譯本と對照するに、漢譯には薩埵王子、尸毗王已下僅に數章の本生しか擧げて居らぬが、梵本の方には、ヴャーグフリー本生（Vyāghrī Jātaka 牝虎を救ふ話）、尸毗王本生（Śivi J. 帝釋の請に由り兩眼を施する話）已下、總計三十四章を出し、而もその最初の濟虎の緣と云ひ、尸毗王の緣と云ひ、章の出し方は似てゐるが、說話の內容に於ては、頗る變つた所があるのであつて、同一梵本の翻譯と見做すことは出來ぬのである。（暑五、一—四六右・大正三、三三一—三八五）

已上漢譯の諸經典は、本生經として孰れも餘り經つては居らぬが、兎も角も經律論の三藏中、割合に多數の本生譚を揭載したものを擧げたのである。此の外に簡略ながら數多の本生譚を取り集めて一言したものとしては、

11 大寶積經卷第八十、八十一（護國菩薩會（地四、一〇〇左—一〇七右・大正二、四五七—四六二）） 隋闍那崛多譯

12 護國尊者所問經第二（地十、六八右—七一右・大正一二、一—一四） 宋施護譯

13 大乘本生心地觀經第一序品（宇二、四七右—五一右・大正三、二九一—二九六） 唐般若譯

14 大智度論第十二（往一、七七右—八三左・大正二五、一四五—一五三） 姚秦鳩摩羅什譯

等があり、その他、金光明經、大莊嚴論經、雜譬喻經、出曜經、分別功德論等の諸經律論の中に散說されてあるものに至つては、一々之を擧示するの煩に堪へない。又一本生譚を一經にしたものとしては、

15 太子慕魄經一卷（宙五、一〇一左—一〇二右・大正三、四〇八—四一一）後漢安世高譯（外に吳支謙譯一卷あり）

16 太子須大拏經一卷（宙五、九〇左—九五右・大正三、四一八—四二四） 西晉聖堅譯

17 睒子經一卷（宙五、九七左—九八右・大正三、四三八—四四三） 西晉聖堅譯

18 九色鹿經一卷（宙五、一〇三左—一〇四右・大正三、四五二—四五三） 吳支謙譯

19 金色王經一卷（宙五、四七右—四九右・大正三、三八八—三九〇） 東魏瞿曇般若流支譯

20 菩薩投身餓虎起塔因緣經一卷（宙十、四左—七右・大正三、四二四—四二八） 北凉法盛譯

の類がある。猶ほ此の外に阿彌陀、阿閦等の大乘諸佛に關する本生を記せるものがあるが、是は

今の釋尊に關するものと多少趣きを異にするものなる故に玆に述べぬ。

なほ是等とは別に南方錫蘭の三藏中に傳へたものゝ中に完具な本生集として本生經(Jātaka)がある。フアスベール氏既に其の原文を出版し、又カウエル氏監修の下にチヤルマーズ等の諸氏に依つて英語に翻譯されてある。此の書の中には總じて五百四十七品の本生が集成されてあつて、謂ゆる本生經集としては殆ど全部を竭したものとも云へるのである。但し其の內容に至つては、南方で出來たために、北方所傳のものとは幾分趣向を異にしたものもあり、亦集中自から新古の說話が錯在してゐるやうである。其の餘にもパーリ所傳としては若用藏(Cariyā-Pitaka.)、梵文のものとしてはアヴダーナシヤタカ(Avadāna-Śataka)(撰集百緣經の原本)、ボーディサツトヴアーダナカルパラター(Bodhisattvādana-Kalpalatā)の類など多數の典籍が存するのである。

三　本生畫の製作並に其の流傳

印度に於ては、本生畫は佛傳畫と相並んで古くから製作せられ、且つ弘く世に流行したのであつた。先づバルフートの欄楯に九色鹿、六牙白象、嘉樹太子、睒仙人、十車王、商主、仙人慧、大天

王、須闍提王子、獼猴王、鷄王其の他廿有餘の題名を具せる貴重なる本生圖の存するを始めとし、サンチーには睒仙人、須大拏太子、獼猴等に關するもの、アマラーヴチーには尸毘王並に須大拏太子に關するもの、アジャンターには、六牙白象、白香象、熊、水牛、鹿、普明王、月光王、須提羅王、普施道士、鴈王等に關するものがあり、又少しく離れた所では、瓜哇のボロブツールにも、尸毘王、普明王、須大拏太子等に關した圖像がある。健駄邏地方に於ては、そのジヤマールガルヒー等の遺物に、睒仙人、須大拏太子、六牙白象の圖像がある。而して是等の土地にあるものは前揭の大小乘經律論に出て居る普通の本生譚の圖像が主であるが、健駄邏から中央亞細亞へかけては、別に大乘の神話に重要な關係を有する燃燈佛の本生畫がある。殊に中央亞細亞になると大乘關係のものが多い。尤も其の中で、前に述べた須大拏太子の本生圖像の如きは、サンチー、アマラーヴチー、並に中央亞細等にもあつて、支那にまでも廣く行き亘つて居るが、其の中特に燃燈佛の本生畫が南方にないことは注意すべき事である。支那に現存する本生畫は龍門に薩埵王子の畫と、例の須大拏太子の畫とがあるし、尙又吳越王錢弘俶の製作にかかる金塗塔の中には、尸毘王、慈力王、薩埵王子、月光王の四種の本生畫がある位なもである。印度に於ける本生圖像

は、前にも述べた如く殆ど印度美術の根柢をなして居るが、支那へ來ると圖像の分布が此の如く稀薄になつてゐて、從つて本生譚が美術文學に與へた影響も輕微になつてゐる。特に日本は一層甚しく、殆ど歴史の全部を通じて本生譚の影響を認め得ないと云つても善い位である。唯々かの有名な法隆寺の玉蟲厨子の臺座の兩側に雪山童子と薩埵王子との二つの本生畫のあるのは、實に珍しいものと云はねばならぬ。但し是れとても果して我國人の製作物であるか否かは少しく疑がはしい所があるのである。

四　本生譚と印度藝術

蓋し本生譚即ち闍陀伽は印度の文學美術の方面にも非常な影響を與へて居る。印度の文學美術から闍陀伽を除いて了ふと、殆ど零になるといふて善い位なものである。尤も最初は單純な說話に過ぎなかつたが、それが詩や小說に作られ、果は劇のやうなものまでも本生譚が骨子になるやうになつた。印度藝術の基礎になつて居るものは、實に本生譚だと云つても宜しい位に流行したのである。

印度ばかりでなく、南洋から西藏邊にまでも影響して居る。例の嘔多王統時代（西曆五六世紀頃）に作られた「雲の使」「龍王の喜び」の如き有名な戲曲も、本生譚から脫胎したもので、現今印度に於て實演せられつゝある劇の類にも此種の系統のものが多いと思ふ。

彫刻や繪畫に本生譚關係のものゝ多いことは勿論である。實際印度人は釋迦を崇敬すると同時に、釋迦の前生即ち本生譚に對しても熱烈な信仰を有つて居た。其の譚の中に出て來る土地を遺跡地として禮拜したものである。斯くて本生譚を現はした本生圖像も亦彼等の信仰の對象となり、遂に本生美術をして印度に於ける古代佛教美術の大部分を占めしむるに至つたのである。

第四十三　雪山婆羅門

玉蟲厨子臺座繪畫
（國寶、大和法隆寺藏）

〔解題〕釋尊がまだ修行中のことである。その幾百千萬年かの古昔、婆羅門と生れて雪山に住し菩薩の行を修したまふてゐられた時の事であつた。釋提桓因が菩薩を試みんとて身を變じて羅刹の像となり、婆羅門を去る遠からざる所に來り、過去佛の說きたまへる「諸行無常、是生滅法」の半偈を宣說したのである。時に婆羅門是の半偈を聞きて心中に歡喜し、誰の所說なるやを尋ねようとしても、餘人はゐず唯々畏るべき羅刹の在るを見る。是に於て婆羅門遂に此の偈が羅刹の說く所なるを察し、卽ち羅刹の前に詣り、更に其の餘の半偈を說かんことを乞ふたが、羅刹は飢渴の故を以て容易に之を肯せず、身肉を施する事を約するに及び、羅刹は卽ち「生滅々已、寂滅爲樂」の半偈を說いたのであつた。婆羅門聞き已りて此の偈を以て處々の石、壁、樹、道等に書寫し、著くる所の衣裳を繫け、高樹に上り羅刹に供養せんが爲めに身を樹下に投じたのである。時に羅刹は婆羅門が眞の菩薩なることを知り、還て帝釋の本身に復し、空中に於て婆羅門の身を接取して之を平地に安置し、頂禮恭敬して辭去したと言ふことである。

（第六十圖）

〔圖說〕 婆羅門が羅刹に就いて半偈を聽いてゐる所と、聽いた所の半偈を巖石に書寫してゐる所と、高處の樹上より身を投じた時に、羅刹が本形の帝釋の身に復して之を空中に接取する所とを畫いたもので、卽ち圖の下方、婆羅門に向て口を開きて何事をか語りつゝあるは、帝釋所變の羅刹である。その上方山巖の中復に婆羅門が筆を執つて偈文を記しつゝあるところ、高處より身を投じたるところ、かく一人の婆羅門を三所に畫いたのは、その動作の次第を表はすために、故意に圖されたものであつて、印度以來の古圖像に於ける常例の畫き方である。又羅刹の後方には、本身に復した帝釋が、婆羅門を空中に接受してゐる。其の間、此の本生說話の內容が始めから終まで遺憾なく畫き出されてあるのである。

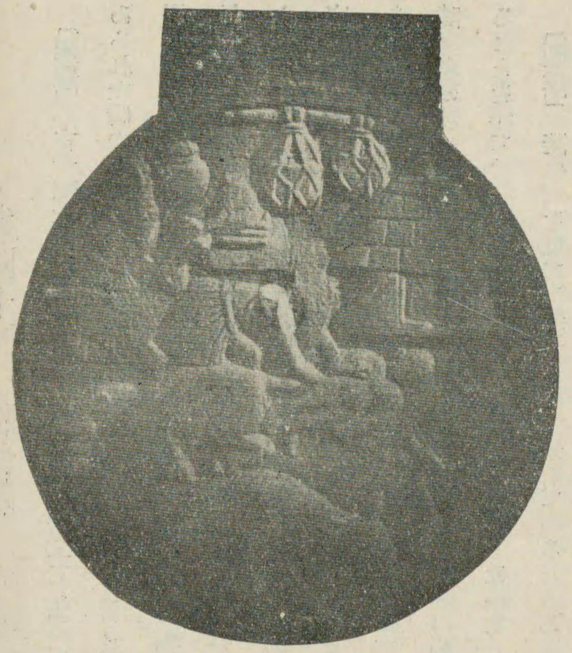
第四十四　睒仙人

印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cunningham—The Stūpa of Bharhut, P. 64, Plate XXVI, 7.)

〔解題〕 古昔釋尊が幾百千萬年かの前世に、道士と生れて山中に住し、菩薩の行を修したまふてゐられた時の事であつた。その名を睒(せん)(商莫迦(サーマカ) Sāma, Sāmaka.) と云ひ、老いたる盲父母に孝養を竭してゐた。ある時、二親のために水を汲んで居たら、迦夷國王が山に入つて獵してゐて麋鹿と見誤つて睒の胸を射貫いたのである。哀聲を聞いて驚いた迦夷國王は、現場に驅け付けたが及ばず、二親のことを囑して絕息してしまつた。仍て王はその二親の住する草舍に至つて此の事を告げ、その老父母を率ゐて屍處に來た。時に父は首を膝上に著き、母は其の足を抱て口を鳴して足を吮り、各々一手を以て其の箭の瘡を捫り、胸を推し搏て天を仰いで慟哭したのである。その至誠至孝の德に感慟した天帝釋は、天の神藥を以て睒の口中に灌いだものであるから、忽に蘇生することを得て、一座の悲は直にいひしれぬ喜悅となつたと云ふことである。

〔圖說〕 睒の死を見て二親が悲歎慟哭してゐるところを彫畫したもので、卽ち圖の中央、斃死せる睒を抱かんとしつゝあるは盲母、その後に居るのは盲父である。そして圖の向つて右方に少し

腰を曲げた姿勢をしてゐるのは、迦夷國王であらう。圖相が頗る簡單ではあるが、盲父母が睒の慘死を歎いてゐる有樣を圖し顯はしたものであることは明かである。圖の上方欄外に古梵字を以て Isi Singe Jātaka と銘記してあるが、漢譯の睒の字は蓋し Singe の音を寫したものであらう。



(第六十一圖)

之と同じ畫題の圖像が、サンチー及びジヤマールガルヒーの彫刻にある。その中サンチーのものは、圖の下に睒が水を汲むために泉に赴く所と、泉邊に於て迦夷國王のために射らるる所とを顯はし、その上部には、迦夷

國王が盲父母をその舍に訪ねて事變を物語つてゐる所が圖出されてある。又ジヤマールガルヒーのものは、之より更に明瞭に睒が迦夷國王に射殺さるる所と、迦夷國王が草舍に盲父母を訪ふて之を告ぐる所と、盲父母を牽ひて現場に向ふ處と、屍所に於て二親が睒の屍體を抱いて慟哭してゐる所と、今の說話の終始を詳細に畫いてある。

第四十五　須提羅王

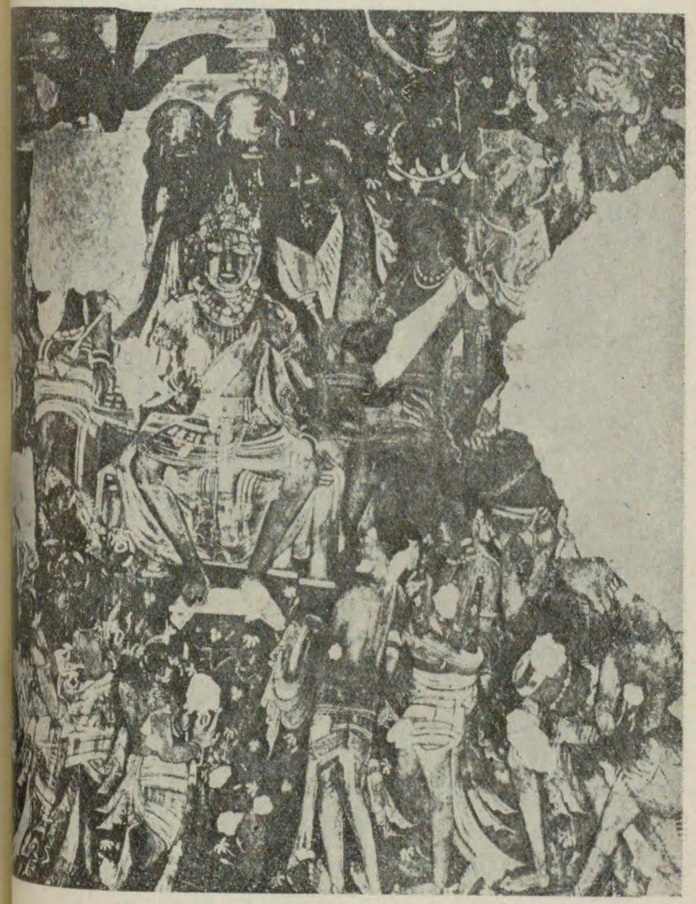
第四十六　須提羅王　其二（〃　Plate 75.）

第四十七　須提羅王　其三（〃　Plate 76.）

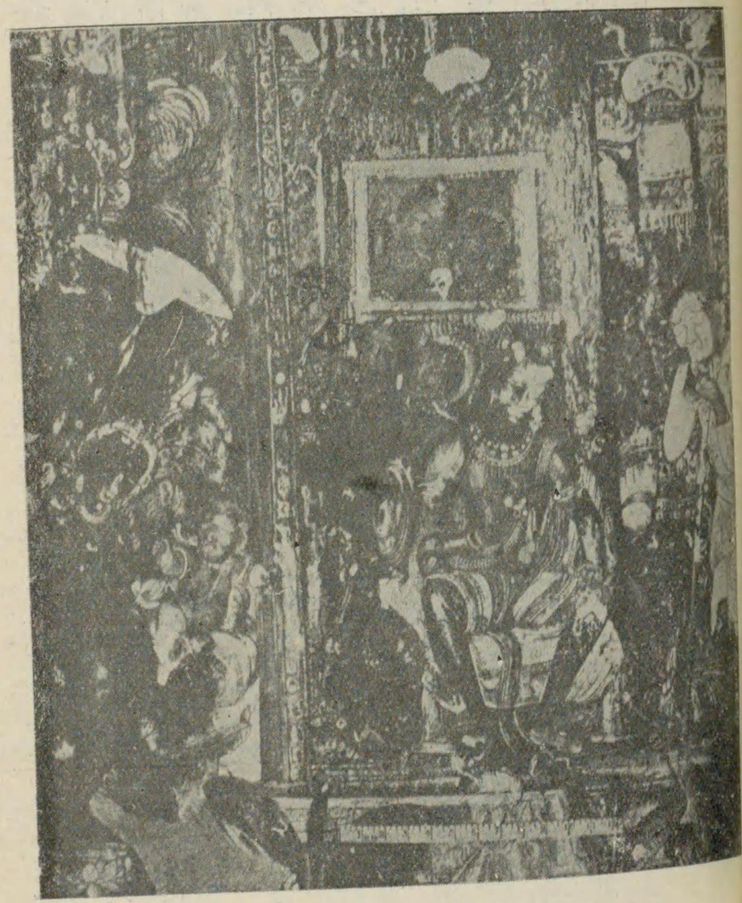
西印度アジヤンター窟寺第十七洞壁畫（J. Griffiths.—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanṭā, P. 33, Plate 70.）

〔解題〕釋尊が今を去る幾百千萬年の前世に、王者と生れて菩薩の行を修したまふてゐられた時のことであつた。その名を須提羅（Sudhira 快目）と云ひ、富迦羅拔城（Puṣkaravatī）に君臨し、八萬四千の小國を典領して盛に布施等を行じ、正法をもつて國を治めてゐた。時に邊境の小國に波羅陀跋彌と名づくる王があつて、縱逸荒迷にして國政を治めず、其の臣勞陀達は諫を用ひられずに追はれて須提羅大王の許に逃れ來たのである。須提羅大王は、波羅陀跋彌の暴政を聞き、兵を發して之を膺懲しやうとしたのであつたが、之を聞きたる波羅陀跋彌は大に驚き、その厄を遁れるために、その方便として盲婆羅門を遣はして王の眼を乞はしめたのである。盲婆羅門、王城に達

（第六十二圖）



(第六十三圖)



(第六十四圖)

して眼を施せんことを乞ふや、王は快く之を諾し兩眼を剜して婆羅門に施與した。然るに王の至誠は能く天帝を感ぜしめ、兩眼は平復して故の如くなつたのである。盲婆羅門は本國へ還り、波羅陀跋彌王に事の顚末を話したら、之を聞きたる波羅陀跋彌王は、自から憤死したといふことである。

〔圖說〕 王の灌頂卽位と邊國遠征と盲婆羅門乞眼との次第を畫いたもので、卽ち圖の中央は王が文武百官群臣庶民等に圍繞せられ乍ら卽位の儀式を擧げてゐるところ、圖の稍々向つて右方にあたり、莊嚴せる牀上に倚座してゐるのが卽ち彼の須提羅であつて、拂子を持てる侍者左右に侍しその後方に於て更に二人のものが瓶を高く捧げて頂上に水を灌いでゐる。是れ卽ち古來印度に於ける王者卽位の儀式である。圖の下方は王の軍勢が邊地の叛逆者波羅陀跋彌王を攻伐に向つたところを畫いたもの、又圖の上方、倚坐せる王者の前に、杖に縋がれる盲婆羅門がゐて、王が之に對して何か談話しつつある如く畫かれてあるのは、邊王波羅陀跋彌の派遣せる盲婆羅門が、王に向つて兩眼を施與せんことを迫つてゐる有樣を畫き顯したのである。

第四十八　尸毘王

瓜哇ボロブヅール寺塔彫刻
(A. Foucher.—The Beginnings of Buddhist Art, Plate XXXVI, 2.)

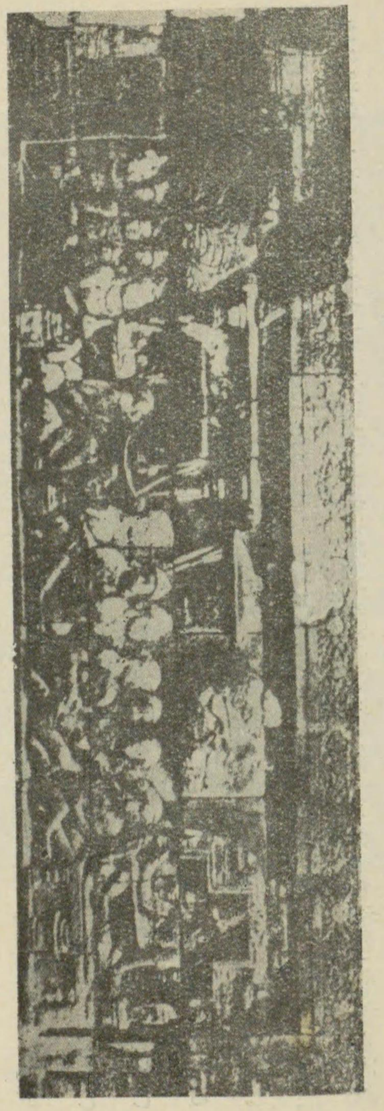
〔解題〕 釋尊が前世に王者と生れて菩薩の行を修したまふてゐられた時の事であつた。その名を尸毘王（尸毘迦 Sivika）と云ひ、提婆跋提城に君臨し八萬四千の諸小國を典領し、正法をもつて治化し人民を愛撫してゐたのである。時に天帝釋菩薩を試みんと欲して、毗首羯摩をして化して鴿とならしめ、自からは變じて鷹となり、急に鴿を追ふて捉へて之を食はんとしたものであるから、鴿は怖れて王の腋下に逃げ入つたのであつた。鷹後れて至り、王に向て我が食なればとて鴿を與へんことを乞ふたのであるが、王の慈心は鷹をして之を食はしむるに忍びず、遂に鷹に約して自己の身肉を割いて鴿の命に貿へることにしたのである。然るに鴿と同じ重量の肉を與へんとして股肉を割いて足らず、仍て臣下をして稱を持ち來らしめ、鉤を以て中を釣り兩頭に盤を施し鴿をその一頭に安じ、身肉を他の一頭に置かしむるに、兩股兩臂兩脇の肉を以てし、更に身肉を盡しても猶ほ鴿の重と等しきを得なかつた。是に於てか王は身を擧げて自から起ち稱盤に上らんとしたが氣力接がずして地に倒れたのであつた。天帝その至誠を感じて本身に復した。王の身體も亦堅

誓の德に依つて、やがて平復して本の如くなつたといふことである。

〔圖說〕 尸毘王が化鷹と問答のところ、及び身肉を割きて鴿の命に貿へてゐるとろを畫いたもので、卽ち圖の向つて右方は、王が殿中に在すところへ化鴿が逃げ込み、而して追ひかけ來たつた化鷹が殿前の樹上に止まつて、王に向つて鴿を引き渡さんことを迫り求めてゐるところである。圖の向つて左方は、王が稱盤を持ち來らしめ、一頭に鴿を置き、一頭には身肉を割きしものを置きて、その重量を計つてゐるところである。(六十六圖)

之と同題の畫圖は、アマラーヴチーの彫刻に凡そ數圖ほどもある。鴿が王の腋下に逃避せるところ、刀を捉つて股肉を割くところ、稱盤に上らんとしてゐる所など、それ〴〵巧に圖出されてある。(第六十五圖、J. Fergusson.—Tree and Serpent Worship, Plate LXXIII, Fig. 1.)

(第六十五圖)



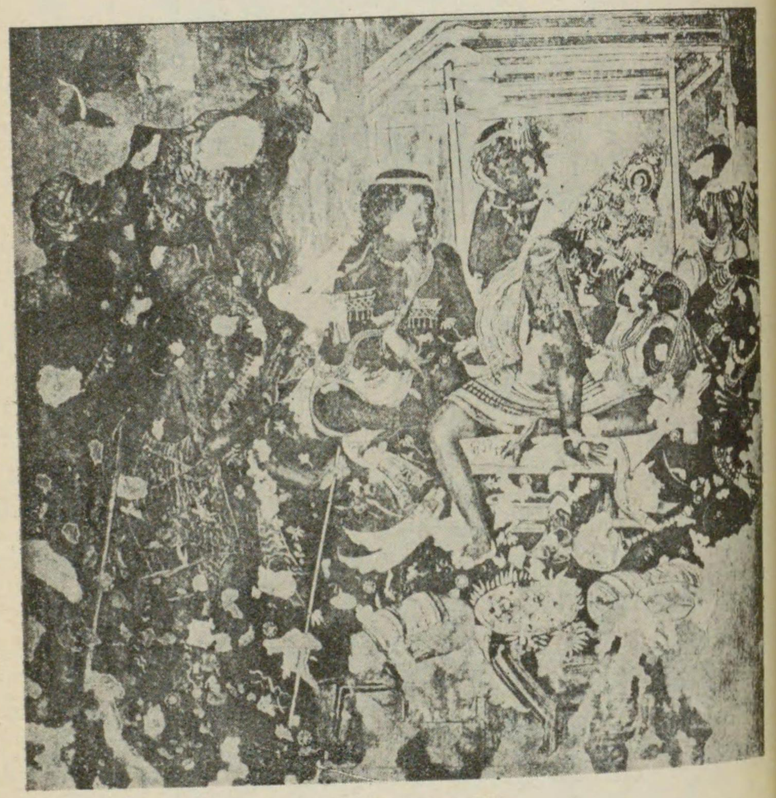
(第六十六圖)

第四十九　尸毘王　其二

西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths.—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 39, Plate 82.)

〔解題〕　古昔幾百千萬年の前世に釋尊が王者と生れて菩薩の行を修したまふてゐられた時の事であつた。その名を尸毘と云ひ、波羅奈國に君臨し、正法を以て國を治め、人民熾盛に豐樂極り無かつたのであるが、殊に王は常に布施を好みて貧乏を賑給し、諸の財寶、頭目髓腦、何一として乞者のために惜む所は無かつたのである。時に天帝釋は王の善心を試みようとして、便ち化して一の大鷲の身となり、王宮に飛來し、王に向て雙眼を賜與せんことを乞ふたのであつた。然るに王は化鷲の語を聞いて大に喜び、手に利刀を執つて自から雙眼を剜りて化鷲に施與した。而して其苦痛に悔恨無きやと化鷲の問へるに對し、王は毫も悔恨の心無きことの誓を作したら、兩眼忽ち還復して故の如くなつた。是に於て化鷲は本身の帝釋に復して、その未曾有なることを讃歎したといふことである。

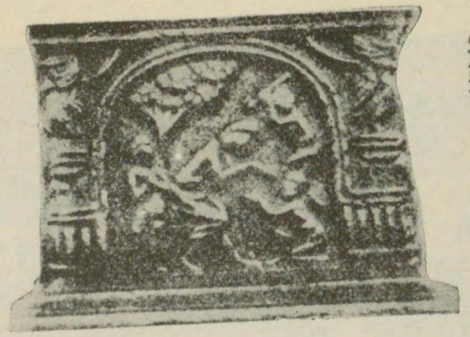
〔圖說〕　尸毘王が、諸の財寶は勿論、頭目髓腦一として惜むところ無く布施し賑恤せらるるに依つて、諸乞人が今しも王宮に詰め寄せて來た所を畫いたもので、王は床に坐して左足を屈して



(圖七十六第)

右足を垂れ、左手は屈して頰に當て右手は伸べて牀に置き、何か思惟してゐる樣に見え、その左右前後には侍臣侍女らしいものが數多居る。そして圖の左方には、杖を曳いて布施を乞ひに來た老婆羅門らしい樣な人物が二人ばかりゐる。圖中には帝釋所變の鷲といつたやうなものは見當らぬが、王の座せる牀上に尸毘王（Sibi Rāja）と銘記されてあるから、此の圖が尸毘王の本生畫であることは確かである。

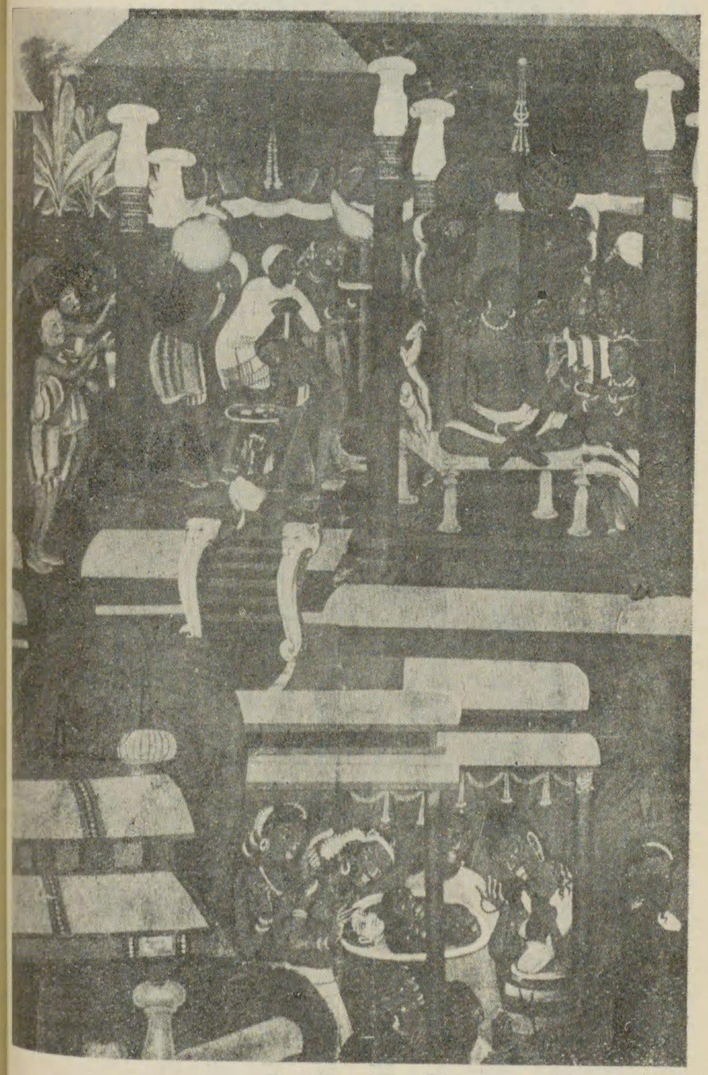
第五十　月光王



（第六十八圖）

西印度アジャンター窟寺第一洞壁畫
（J. Griffiths—The paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 24, Plate 7.）

〔解題〕古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が王者と生れて菩薩の行を修して居られた時のことであつた。その名を月光（旃陀婆羅脾（チャンドラプラバ）、戰達羅鉢刺婆 Candrapra-bha）と云ひ、跋陀耆婆城に住し、閻浮提八萬四千の諸小國を統領し、國土豐潤に、人民快樂なりしのみならず、國中の沙門婆羅門貧窮孤老等は、悉く王の恩を蒙りて快樂極りなく、皆王の德を讃歎してゐたのである。然るにその時に邊境の一小國に毗摩斯那と名づくる王があつたが、月光王の美譽高大なるを聞きて嫉妬に堪へず、之を殺害せんと欲して勞度差と名づくる惡婆羅門を遣はして王の頭を求めしめたのであつた。勞度差の王城に達して、王に向つて頭を施與せんことを乞ふや、大臣大月（摩訶旃陀）は、七寶の頭を作り、之に代へんとしたのであるが、婆羅門は固より之を諾す可くも無い。



(第六十九圖)

是に於て王は七日の猶豫を以て一切諸王臣民夫人太子等と訣別し、自ら一樹間に往き髮を以て樹に繫け、婆羅門をして刀を取りて王の頭を斬らしめたのである。時に毗摩羨王は、遙に月光王の頭施を聞きて、驚喜踊躍して心擗けて死し、勞度差は國に還りて毘摩羨王の命終を知つて吐血して死亡し、此の二人は孰れも命終の後に阿鼻地獄に墮ちたと云ふことである。

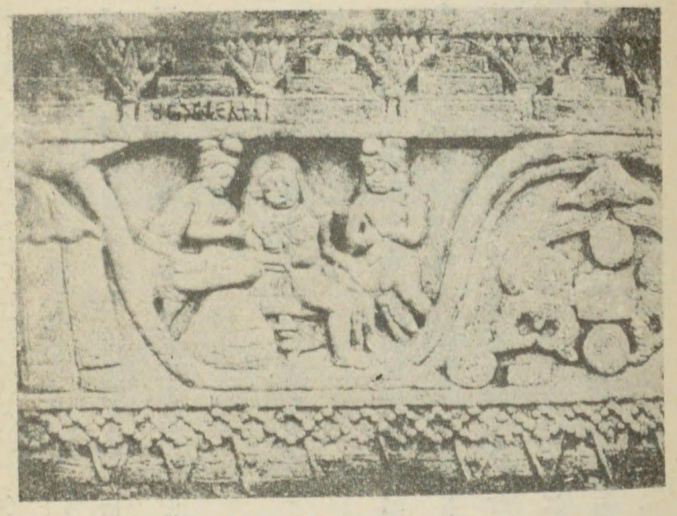
〔圖說〕 王の灌頂卽位と大檀施と、及び斷頭施與との有樣を畫いたもので、卽ち圖の向つて右方上段は、王が灌頂卽位の儀式を行つてゐるところ、王は莊嚴の牀上に坐し、その背後には二人のものが寶瓶を捧げて香水を王の頂に灌いでゐる。そして王の左邊には寶冠が置かれてあり、更にその傍には別に二人の侍者がゐて一人は拂子を採り、一人は華籠を捧げてゐる如く見える。又圖の上段向つて左方は、王が大檀施を行ふに由つて、國中の沙門婆羅門貧窮孤老の徒、集り來りて施與を受けてゐるところ、その中で杖をつき乍ら屋内に踏み入つてゐる白身の人物が、勞度差婆羅門であるらしい。又圖の下段は、大月大臣の計で七寶で作つた頭を以て王の頭に代へんことを勞度差に勸めてゐるところ、又圖の下段の右端は、王が頭を婆羅門に施與する爲めに樹下に下り立つたところを畫いたものと見られるのである。(第六十九圖)

之と同じ畫題の圖像としては、支那吳越王錢弘俶の作つた金塗塔に（第六十八圖、國寶山城金胎寺藏）月光王が樹下に立つてゐると、婆羅門が刀を擧げて其の頭を斷たんとしてゐる光景を顯したものがある。

第五十一　大天王

印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cunningham.—The Stūpa of Bharhut, P. 78, Plate XLVIII.)

〔解題〕古昔此の世界成立して後幾もなく、人壽八萬歲の時に、釋尊は金輪聖王と生れて菩薩の行を修してゐられたのであつた。その名を大天（摩訶提婆（マーハーデーヴ）、摩調 Mahādeva）と云ひ、四天下を典領し、心正しく行平に、紫金轉輪、飛行白象、紺色神馬、明月神珠、玉女聖妻、主寶聖臣、典兵聖臣の七寶を具有し、凡そ東西南北その遊觀する所、七寶導從し、粟散小國王所有臣民等皆悉く畏伏し、天龍善神皆常に防衞し、擧げて王壽無量を稱してゐたのである。然るに王ある時近臣の巾櫛を主る者に勅して、若し吾が頭髮の中に白髮を生ずるを見ば吾に聞かせよと命じたのであつた。



（第七十圖）

後日、近臣王の頭上に白髮の生ずるを見て、早速に此の事を上聞に及んだら、王は大に之を喜んで早速太子を呼んで位を讓り、吾が頭に白毛を生じたのは無常の證信なれば、最早念を無益の世に散ずる必要は無いといふて、深く太子を敎誡し已りて、卽ち國土を捐てて廬地樹下に至り、髮髮を除き法服を著け、沙門となつて佛道を修したといふことである。

〔圖說〕王の巾櫛を主る近臣の一人が、王の頭髮中に白毛の生ぜしを發見したに依つて兼ねての王命によつて之を王に示してゐる所を畫いたもので、卽ち圖の中央、床上に倚坐し、其の後方に居る理髮人より二筋の白毛を

受け取つて眺めてゐるのが大天王である。それは髪を梳てゐる間に發見された出來事とて、王の頭髪は解かれたままに畫かれてある所など、簡單の圖ではあるが、能く用意深く圖出してあるのである。且つ圖の上部には、古梵字を以て Magha deviya Jātaka と銘刻し、紛れも無き此の大天王本生の圖像なることを明記してあるのである。

第五十二　普明王

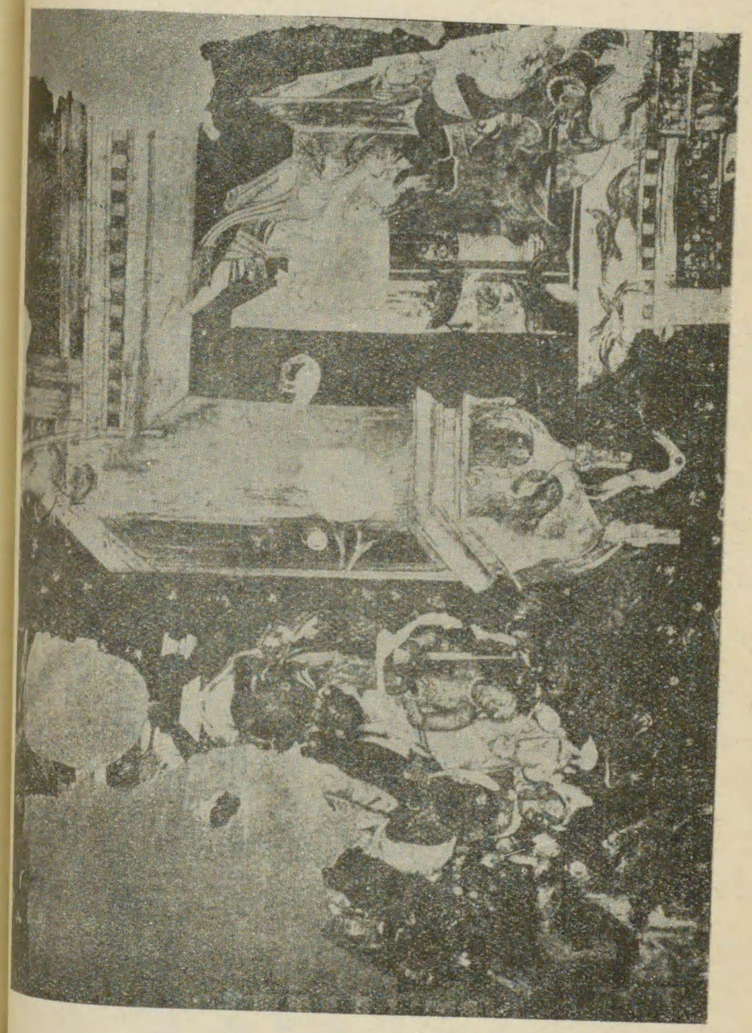
西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths.—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 37, Plate 67.)

〔解題〕 古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が王者と生れて菩薩の行を修して居られた時のことである。その名を須陀素彌（蘇陀蘇摩 Sutasoma. 普明）と云ふた。此の時に隣國なる波羅奈城には前王波羅遮摩達(Brahmadatta.)が騎師子と交會して生んだところの足に班駮のある駮足王（迦摩沙波陀 (Kalmāsapāda 班足）が君臨してゐたのであるが、此の駮足王は、その夫人の嫉妬憤恚から天神の祠を破壞し、その祟により仙人に肉を獻じて十二年中、恆に人肉を食すべき呪縛を受け、その因緣からして、厨監が小兒の死肉を獻じたのが端緒となつて、其の後は厨監に命じて小兒を

捕へしめて日々王の食膳に供せしめてゐた。然るに程なく此惡事が露見して人民は王を圍んで之を殺さうとしたのであるが、王は更に惡誓を立てゝ飛行羅刹となつて虛空に飛去り、山林の間に止まつて多人を噉殺した。加之他の惡羅刹衆と宴會饗應の資に供するため一千王を取らんとし、已に九百九十九王を得て、その最後に執へられたのが卽ち須陀素彌王である。須陀素彌王は、その執へらるゝ前に婆羅門に布施を約してゐたので、羅刹王の許を得て一旦國に還り前約を果し已りて駮足羅刹王の許に赴いたのであつた。そして駮足王のために道士より聞く所の偈を說き、兼ねて殺罪及び其の惡報、並に慈心不殺の福業等を明したものであるから、駮足王は忽ち本心に立ち返り、復た害心なく、須陀素彌及び諸王を放還したと云ふことである。

(第七十一圖)

〔圖說〕 駮足王が小兒噉食の惡事露顯して王臣等のために殺戮せられんとする所、及び變じて羅刹となつて其の場より飛去る所とを畫いたもので、卽ち圖の向つて右は王が諸群臣等のために將に迫害を受けんとするところ、刀劍を持



（第七十二圖）

つてる二人の兵士の前に蹲居せるは恐らく駮足王であらう。圖の向つて左は、既に羅刹に變化して飛去る所を畫いたものである（第七十二圖）。之と同題の圖が瓜哇のボロブヅールの彫刻にある（第七十一圖、A. Foucher-The Beginnings of Buddhist Art, Plate XXXIIV, 2.）。圖は今と同じく駮足王が變じて羅刹となつて飛去する所を顯してゐる。

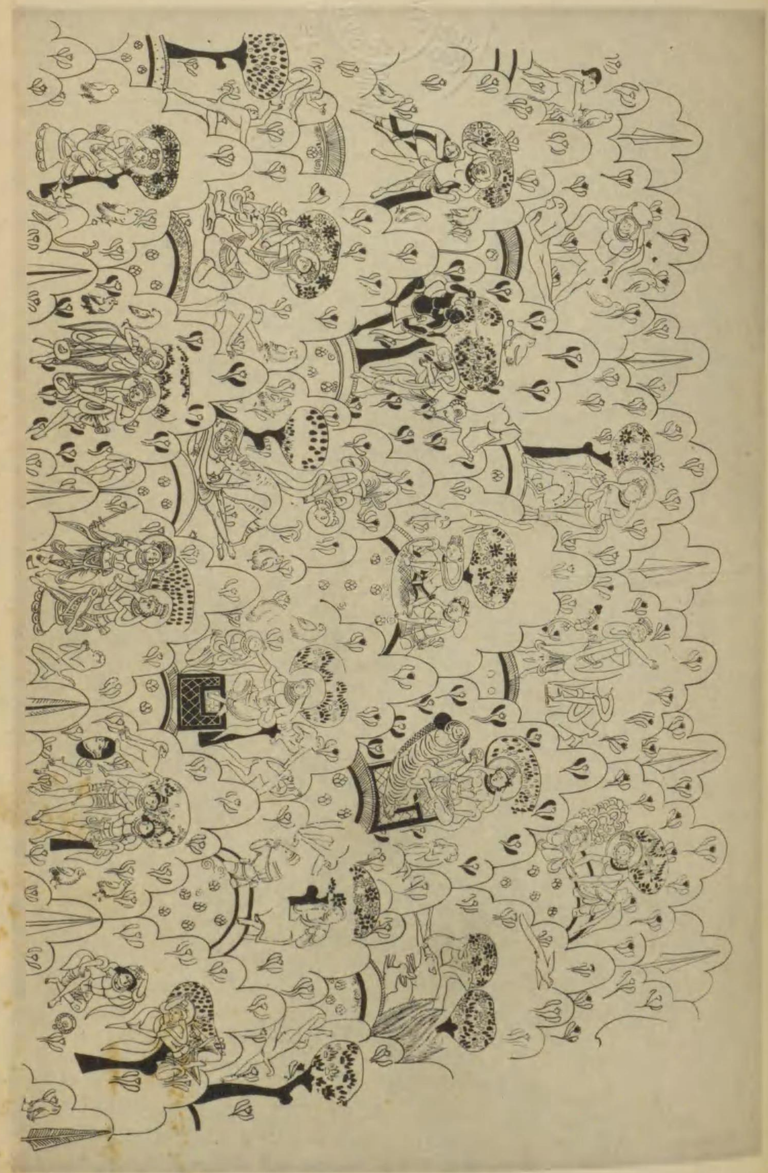
第五十三　須大拏太子

南印度アマラーヴチー大塔欄楯彫刻
(J. Fergusson.—Tree and Serpent Worship, P. 203, Plate LXV)

〔解題〕古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が葉波國薩闍王の太子と生れて菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。其の名を須大拏（蘇達拏 Sudāna 善施、善與）と云ひ、性仁慈にして布施を好み、普く群生を拯濟したのであつた。時に遠近怨國の諸王、此の葉波國第一の國寶に擬すべき羅闍恕大檀と名づくる白象の威力武勢を怖れ、八梵志を遣はし、乞ふて之を得せしめた此の事、端なくも國中上下の機嫌に觸れ、爲に十年を期して檀特山（彈多落山 Danda-loka）に遠流の身となつたのである。仍て太子は妃曼抵（Mardi）並に男耶利（Jali）女嚴拏（Kanyana）を將いて配所に向つたのであるが、行々馬を施し車を捨し、遂に凡ての物を施與し畢り、全く空手となつて

三七日にして檀特山中に至り、道士阿周陀（Asita）に就て學道し、自から柴草を以て屋を作りて

（圖三十七）



他其子王埵薩王光月王毘尸　五等

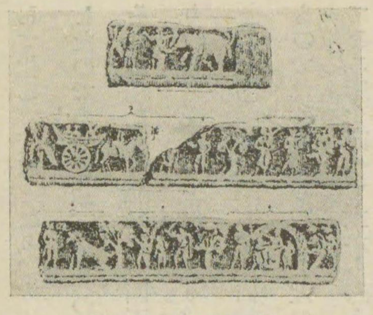
止住したのであつた。是の時鳩留國(Kuri)に老貧梵志あり、山に到りて太子に謁し、二兒を乞ひ得て、道すがら兒等を鞭ち苦しめつゝ遂に其の國に還つた。時に天帝釋亦太子の堅志を試みんとして化して梵志となり、太子の許に到り、妃を施さんことを乞ふたが、太子は之をも捨與せんとしたのであつた。然るに其の後、彼の鳩留國の老貧梵志が二兒を太子の本國なる葉波國に賣つた。それが端なくも祖父なる國王の手に救はるることとなり、尋いで太子並に妃も迎へられて國に還り、讓を受けて王位に登り、國を擧げて安穩を得たといふことである。

〔圖說〕 須大拏太子が白象を施與する所及び檀特山に遠謫せらるる所の有樣等を圖し顯はしたもので、卽ち圖の向つて左の一段は太子が異國の間者なる婆羅門に向て羅闍耶大檀白象を施與してゐる所、向つて左から三人目に金瓶を捧げてゐるのは卽ち太子である。次に中段の下部は車に乘じて配所に赴かんとする途を要して、乞者がその乘物を施與せんことを要請してゐる所、上部は檀特山中に修道中、その草屋前に於て、二兒を婆羅門に施與してゐる所である。圖の向つて右方の一段は其の圖樣を詳にしないが、恐らくは太子が既に迎へられて本國に還り、王位に登ることを得て國中上下の歸仰を得てゐる所を示したものであらうか。

第五十四　須大拏太子　其二

支那新疆省ミラン地方佛寺壁畫
(A. Stein.—Ruins of Desert Cathay, I. P. 457, Fig. 147)

〔圖說〕須大拏太子が、隣國の王から派遣された梵志に向つて、自國第一の寶として上下の尊重する所の羅闍耶大檀白象を施與してゐる所を畫いたもので、卽ち太子の事蹟としては、最も最初の出來事の說話を顯はしたものである。左手に象の鞍勒を牽き右手に金甕を持つてゐるのは、今しも婆羅門に白象を施與せんとしてゐらるゝところである。蓋し此の壁畫の原圖は、全體としては極めて廣く說話の終始を通じて完全に圖繪してあつたものらしいが、スタイン氏の著書の中には、今圖と外に馬車に乘つて檀特山に向はるゝ所の一部分しか撮影されて居らぬのは甚だ遺憾である。（第四十八圖）



（第四十七圖）

之と同題の畫圖としては、彼のサンチー大塔南門の最下の橫梁表裏にわたり、實に精細を竭した圖像がある。卽ち表面には白象施捨の處、謫せられて宮門を出づる處、檀特山に向はんとして

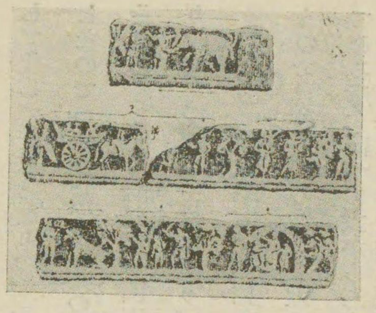
第六（甲）

（乙）

第五十四　須大拏太子　其二

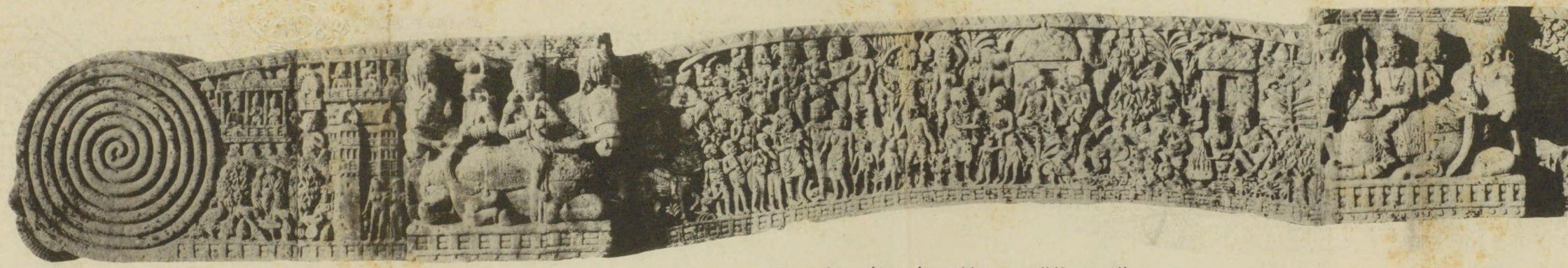
支那新疆省ミラン地方佛寺壁畫
(A. Stein.—Ruins of Desort Cathay, I. P. 437, Fig. 147)

〔圖說〕須大拏太子が、隣國の王から派遣された梵志に向つて、自國第一の寶として上下の尊重する所の雜閑恕大檀白象を施與してゐる所を畫いたもので、即ち太子の事蹟としては、最も最初の出來事の說話を顯はしたものである。左手に象の鞍勒を牽き右手に金甕を持つてゐるのは、今しも婆羅門に白象を施與せんとしてゐらるゝところである。蓋し此の壁畫の原圖は、全體としては極めて廣く說話の終始を通じて完全に圖繪してあつたものらしいが、スタイン氏の著書の中には、今圖と外に馬車に乘つて檀特山に向はるゝ所の一部分しか撮影されて居らぬのは甚だ遺憾である。（第四十八圖）

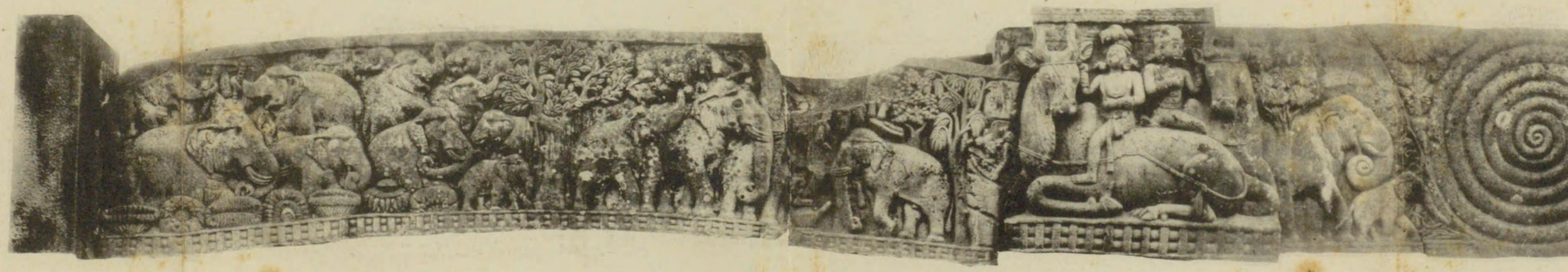


（第四十七圖）

之と同題の畫圖としては、彼のサンチー大塔南門の最下の横梁表裏にわたり、實に精細を竭した圖像がある。即ち表面には白象施捨の處、謫せられて宮門を出づる處、檀特山に向はんとして



第六（甲）　須大拏太子



（乙）六牙白象

第七十五圖

途に梵志に逢ふて馬を施する處、車を施する處、兒女を抱きて歩行して山に赴く處、阿周陀仙の許に到る處などを顯はし、裏面には「梵志が獵夫に途を尋ぬる處、太子、梵志に向つて二兒を施するところ、帝釋化して師子となりて妃の歸還を遮る處、太子更に妃を以て帝釋所變の梵志に施與する處、二兒婆羅門のために苦を受くる處、太子既に許を得て本國に歸還の處」など、殆ど殘り無く圖出されてあるのである。又大英博物館所藏ジヤマールガルヒーの遺品には（A. Foucher.-Notes of the Ancient Geography of Gandhāra, Trans, by H. Hargreaves, P. 24, Fig. 13.）には、一に白象施與の處、二に車馬施與の處、三に太子妃と共に各兒女を抱いて配所檀特山に赴く處、四に山中草屋前にて二兒を婆羅門に施與する所、五に婆羅門二兒を將て之を鞭ち苦しめつゝ下山の處、六に帝釋化して師子となり妃の歸路を遮る所を明確に畫き顯してある。其の他支那東魏武定元年作の碑像の中にも、其の說話の一部を畫出した圖像があり、又現に西藏などに行はれてゐる畫圖の中にも、此の本生に關する緻密な圖像があるのである。

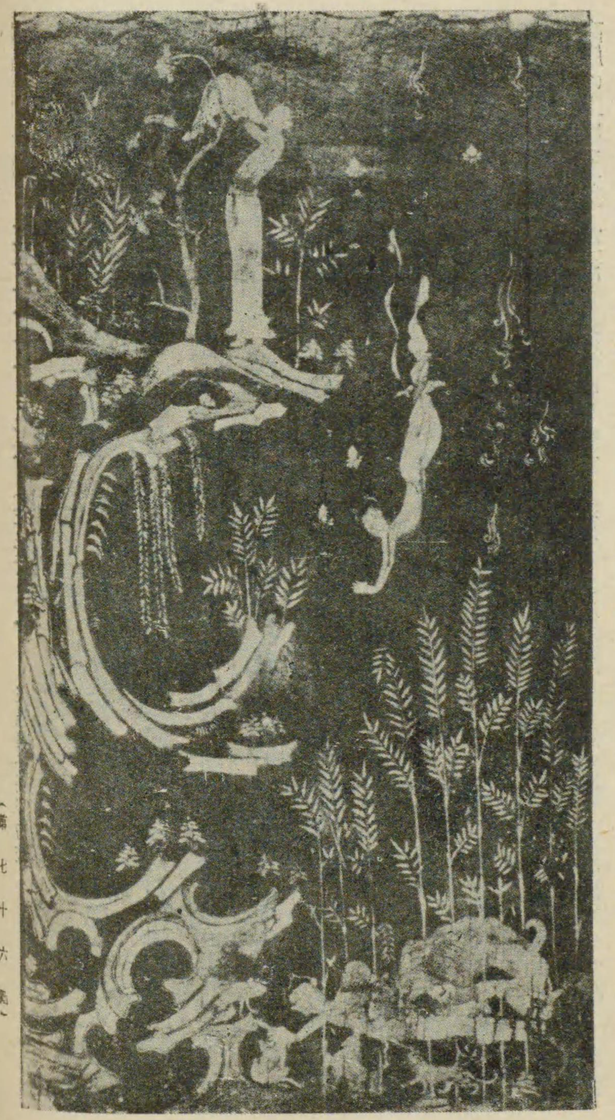
第五十五　摩訶薩埵王子

玉蟲厨子臺座繪畫（國寶、大和法隆寺藏）

〔解題〕古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時の事である。摩訶羅陀王の第三子として生れ、其の名を摩訶薩埵と云ふた。ある時二兒と俱に園林に遊觀して一大竹林に至つた時、一母虎が七子を生みて飢餓に迫られ、母子俱に命將に絶えんとするを見て大悲の心を起し、二兒と別れて獨り虎所に赴き、身の衣裳を脫ぎて竹枝の上に置き身を放して臥虎の前に臥し、虎の羸瘦して爲す無きを見るや、卽ち乾竹を以て頸を刺して血を出し、高山の上より身を虎前に投じたのであつた。その時に虎は流血の王子の身を汚すを見て、便ち血を舐めて其の肉を噉食し、唯々餘骨を留めたと云ふことである。

〔圖說〕摩訶薩埵王子が、餓虎のために身命を捨せんとして衣を樹上に懸くるところと、高山上より投身するところと、餓虎に噉食されつゝあるところとを畫いたもので、卽ち圖の上部には高崖の上にて太子が衣裳を樹枝に懸けつゝあるところを圖し、その稍下方には太子が崖上より投身して空中にかゝれるところを顯はし、その下部には太子が母虎並に七子のために噉食せられつ

つある所を畫出してある。蓋し太子の動作を顯はすために、太子は三たび畫かれてあるのである。

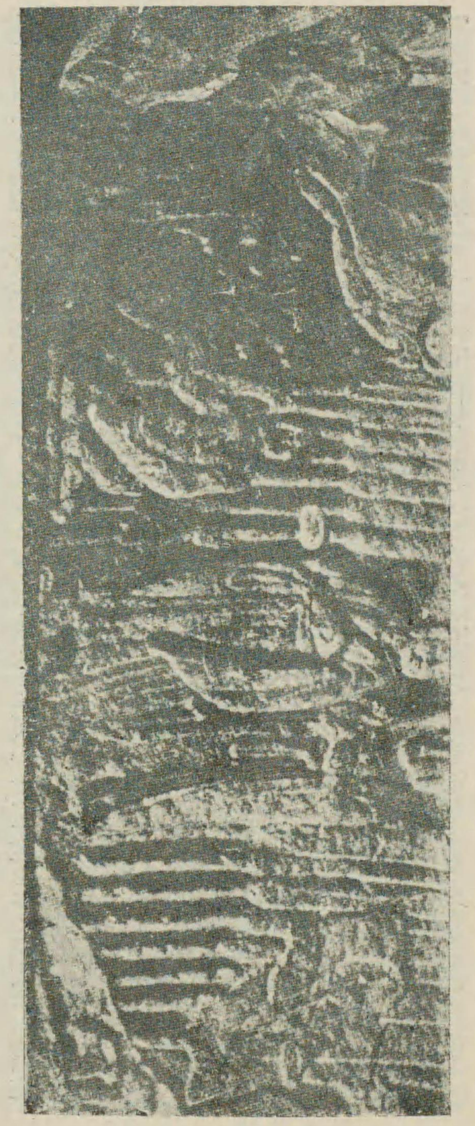


（第七十六圖）

第五十六　摩訶薩埵王子　其二

支那河南省洛陽龍門賓陽中洞雕刻（支那美術史雕塑篇附圖第五百十一圖）

〔圖說〕摩訶薩埵王子が、二兄と倶に竹林中の餓虎所に至り、餓虎を見て慈心を起し、身を虎前に投じ、餓虎等をして噉食せしめつゝあるところを造顯したもので、王子と倶に來た二兄は支那服を着けて立つて居り、太子は既に衣裝を脱ぎて裸體となつて身を虎前に投じ、虎前に坐して母虎並に仔虎等をして身肉を噉食せしめてゐるのである。之を前圖と比較するに、山巖の畫き方と云ひ、人物の形像並に衣裳の畫き方と云ひ、且つ又構圖の全般から見て、今圖が純粹の支那人の考案になる支那式の圖像であるに引き換へ、前の玉蟲厨子の圖像は、山巖の畫き方が甚だ奇古であつて、一般の支那人の作物に殆ど其の例を見ざること、及び一人の動作を顯はす爲に同一人物を一圖中に數度圖出するといふ畫き方が、印度古代の作例と其の規格を同じくする點から推考する時は、彼の厨子繪の畫者は、朝鮮人及び我國人にあらざるは勿論、支那人としても凉州又は燉煌あたりの西陲の人士の作であらうと考へられるのである。



（第七十七圖）

第五十七　墓魄太子

〔解題〕古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が菩薩の行を修したまふてゐられた時の事である。波羅奈國の太子として生れ、その名を墓魄といふた。生れてから十三年の間、口を閉ぢて言はず、恰も瘂人の樣であつた。それがために王や皇后は非常に之を憂慮されたのであるが、遂に梵志の言に由て、之を生埋にすれば必ず貴嗣を得られようとの事で、具に寶服を著けしめ之を喪夫に附せられたのであつた。而して壙前に至りし時、太子は車より下り衣を斂めて水に入つて淨浴

中印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cunningham.—The Stūpa of Bharhut, P. 51, Plate XXV, 4.)

（第七十八圖）

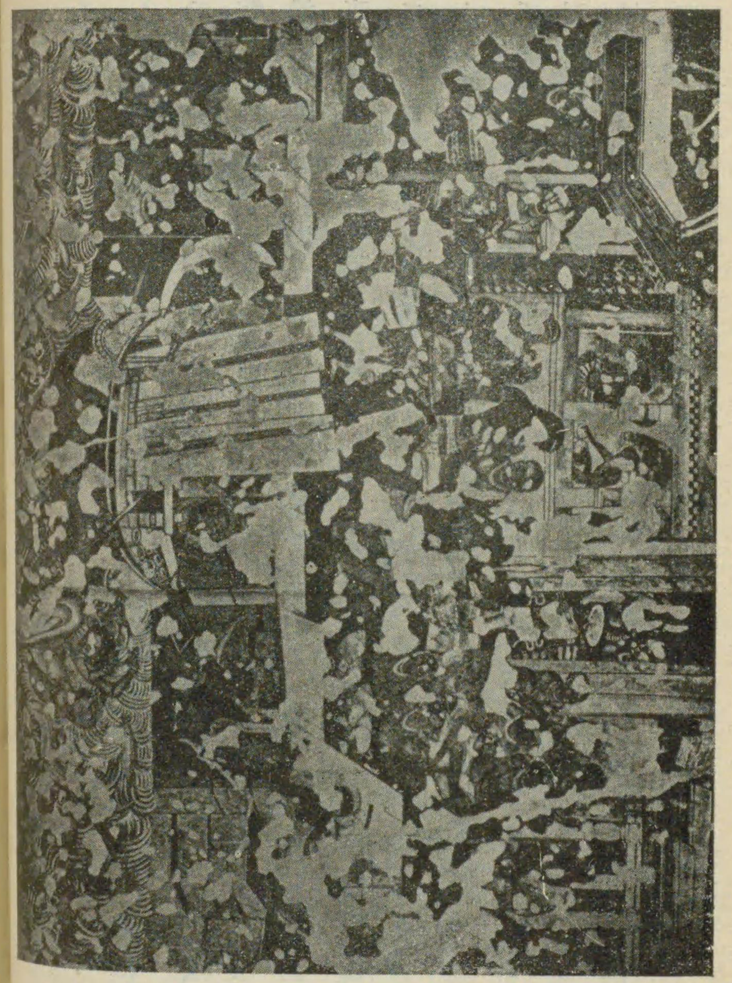
し、香を以て身に塗り、具に寶服を著け、更に喪夫に向つて自ら能く言語すべきことを王に啓せしめた。王后兆民等は大に之を怪しんで馳せ參じたが、時に帝釋は其の附近の地を化して苑池樹木とし、又太子が著する衆寶の衣を去つて化して袈裟衣とした。王到れる時、太子は五體を地に投じて禮を作し、出家して沙門となり無欲の行を守らんことを乞ふたと云ふことである。

〔圖說〕 墓魄太子が宮中に王后の鐘愛を受けて居るところその他を畫いたもので、卽ち圖の上部左方は波羅奈國の宮殿中に於て父母の鐘愛を受けてゐる所、その貴人の膝に抱かれてゐるのは墓魄である。圖の下部は曠野の塚墟所に至り、太子を生埋せんとするところ、左方の空車は太子を載せ來れる駟馬車である、その右方の人物の中で、立つて右手を擧げて何か話しをしてゐる姿勢を成せるは太子で、其の右に居るは太子に隨伴して來た喪夫であらう。又圖の上部の右方は、太子が天帝釋の化作した林中に坐し、袈裟衣を着し、父王等と對面してゐる所を圖し顯はしてゐるのである。

第五十八　普施道士

印度アジヤンター窟寺第二洞壁畫
(J. Griffiths—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 30, Plate 34.)

〔解題〕 古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。その名を普施といふた。貧乏を救濟せんがために親を辭して乞ふて沙門となり、周旋教化して一大國を經た。時にその國の豪姓が女を以て嫁せんとしたが、後日を約して進んで海邊に行き船に乘じて海を渡り、岸に上り遙に妙好なる銀城の宮殿を見た。時に毒蛇がゐて普施の來るを見て頭を擧げて向つたのであるが、普施ために慈定に住するや蛇毒滅して首を垂れて眠つてしまつたので、乃ち其の首の上を登つて城に入つた。城中には天神がゐて、願ふて留むると九十日、身自から饌を供し、恭敬聽法した。且つ去るに望むで明月眞珠一枚を送つたのであつた。その後普施は更に前行して黃金城並に琉璃城に到り、前と同じ樣に毒蛇の難を犯して城中に入り天人の歸仰を得て、此處にても亦神珠各一枚の寄與を受け、既に衆生の困乏を救ふに足るの寶を得たので舊居に還らうとした。然るに海中の龍神は三神珠の普施の手に渡りたるを遺憾とし、無理に其の珠を奪つたのである。處が普施の宿世の道力と並に遍淨天の助力は、海水を抒ふて殆ど



（第七十七圖）

其の十分の八を去らしめたので、龍神等驚き恐れて其の神珠を還へした。仍て普施は、神珠を齎してその本土に還り、路を尋ねて布施し、苟も過ぐる所の國は貧民が無かつたといふことである。

〔圖說〕 普施道士が船に乘じて海を渡り、海中の銀城等に達したところと、既に彼の城中に入りて天神の供養を受けてゐるところとを畫いたもので、即ち圖の下段は、普施が大船に乘じて海を越え、龍城の前に達したところの光景であつて、袈裟衣を着けた普施は、兩手を前へ指し出して何かを話してゐる樣にも見へ、船前には男女の龍が飛躍してゐるのである。又圖の上段は、普施が既に城中に入り、天神の供養を受けてゐるところであつて、圖の右方宮殿中にあたり、袈裟衣を着け、貴人らしい人物其の他に向つて對話しつつあるは即ち普施である。而してその圖の中央にあたり、貴人らしい人物とその後に隨從せる一人が、盆器の上に珠寶らしいものを載せて捧持してゐる。是れは彼の城中の天王が、城中第一の寶である明月眞珠（萬寶を雨らす如意寶珠）を持ち出でて、今しも普施の處に詣りて布施せんとして歩み行く所と見らるるのである。

第五十九　某商主

中印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cunningham,—The Stupa of Bharhut, Plate XXXIV, 2.)

(第八十圖)

〔解題〕古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。商主として生れ、五百の賈客と船に乘じて海に入り珍寶を求めたのであるが、ある時航海中に摩竭(マカラ)大魚（Makara. 鯨魚）の難に遇ひ、彼の頭を出して口を張れる大魚の魚口に至り、當に彼の腹中に葬られんとしたのであつた。時に商主は、船中の諸人に告げて一心に佛號を稱せしめた。五百人が俱に大聲を發して南無佛を唱へたら、魚は佛號を聞きて衆生を傷害す

るに忍びず、口を閉ぢてしまつたのであるから、轉た魚口に遠ざかり、其の危險を脱するを得たと云ふことである。

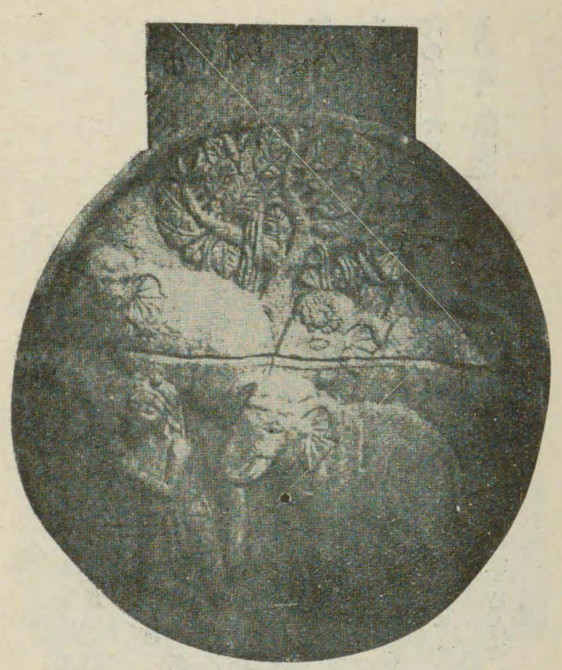
〔圖說〕商主等が摩竭大魚に遇ふて船諸共に口中に呑み込まるゝところと、商主等が南無佛と稱せしに由て、大魚の口中より逃れて安穩を得たる所とを圖に顯はしたもので、即ち圖の下方は今や船とともに商主等が呑み込まれんとしてゐるところであつて、その上部は、既に魚口から吐き出されて安穩地帶に達したところである。その船の左の方大魚の口から水が吐き出されて逆流しており、又その傍に五疋の魚がゐるが、是れすべて魚口から吐き出されたものとして畫かれたものらしい。圖中その木造の船の形も甚だ面白いが、その船に乘つてゐる人物の形貌衣髮等が、バルフートの遺品であるに拘はらず、他の一般のバルフートの遺品並にサンチー等のものと異り、印度人といふよりは、寧ろ希臘人に近い所があるのは、印度古代に於ける佛教彫刻史上、極めて重要視すべき價値ある遺圖と云はねばならぬ。

第六十　六牙白象

〔解題〕　古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。六牙の象王の身を受け、五百の象を從へて山中に住してゐた。象王に兩妻あり、ある時に水中に一葦の蓮華を得て嫡妻に惠んだことが、計らずも小妻の嫉恚を招き、小妻はために結氣して死亡し、轉生して四姓の女となり、長じて後、嫂せられて國王の夫人となつた。宿緣の然らしむる所、象王を害せんと欲し、卽ち王に奏聞して六牙の象の牙を得て珮几と爲さんことを請ふたのである。仍て四方の射師を召してその象王の所在を尋ねたが、南方の射師が之を知つてゐるといふ所から、命を奉じて行くことゝなつた。時に夫人は射師に命じて南行三千里、山より山に入り行くこと二日許りにて象王の在所に至らば、道の邊に坑を作り、鬚髮を除きて沙門の服を着け、坑中より之を射て其の牙を截り取り、其の二牙を將ち來れと云ひ付けた。射師は夫人の命の如く象王の遊處に行き、先づ象を射、そして法服を着け鉢を持して坑中に住してゐた。象王は沙門を見て頭を低れて何故に吾軀命を賊ふやと問ひ、疾く牙を取り去れよといふて、射師をして牙を截り去

中印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cunningham.—The Stūpa of Bharhut. P. 61, Plate XXVI. 6.)

らしめた。射師牙を得て還り王宮に持參した時、夫人牙を取て手中に著き之を視ようとしたら、忽ち吐血して死んだといふことである。



(第八十一圖)

〔圖說〕　象王が獵師に向て、その六牙を截りとらしめんとしてゐる所を圖し顯したのもで、卽ち四象の中その尤も前方に居るのが象王であつて六牙を具へてゐる。その象王の右にゐる獵師は、弓箭は傍に置きて、兩手で鋸樣の凶器を持つてゐるが、是れは象王が自から進んで獵師をして牙を截り取らしむるところを現はしたものと見られるのである。此の圖像の作者は此の圖

が Chhaddantiya Jātaka の圖であることを銘記してゐる。

第六十一　六牙白象　其二

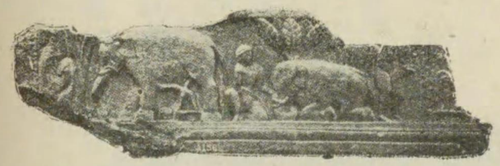
南印度アマラーヴチー大塔欄楯彫刻
(A. Foucher.—The Biginnings of Buddhist Art, Plate XXIX. 2.)

〔圖說〕象王が其の二妻並に眷屬等とともに山中を遊行し、又蓮池に至りて遊戯しつつあるところと、獵師に牙を授けてゐるところと、獵師が牙を得て歸還するところとを圖し顯はしたもので即ち圖の下部は象王等が蓮池に於て二妻並に眷屬等と遊戯のところ、その向て右方上段は象王等既に陸地に上り遊戯し乍ら、象王が蓮莖を嫡妻に與へてゐる處で、その上方に一象が牙を地に打ちつけてゐるのは、小妻が氣結して自から死する所であらう。又圖の向つて左方上段は象王が獵師のために牙を施與し之を截り取らしめてゐるところ、又圖の最上部に一人物が六牙を擔ふてゐるのは、獵師が既に牙を得たるを以て本國に歸還するところである。

(圖二十八第)

第六十二　六牙白象　其三

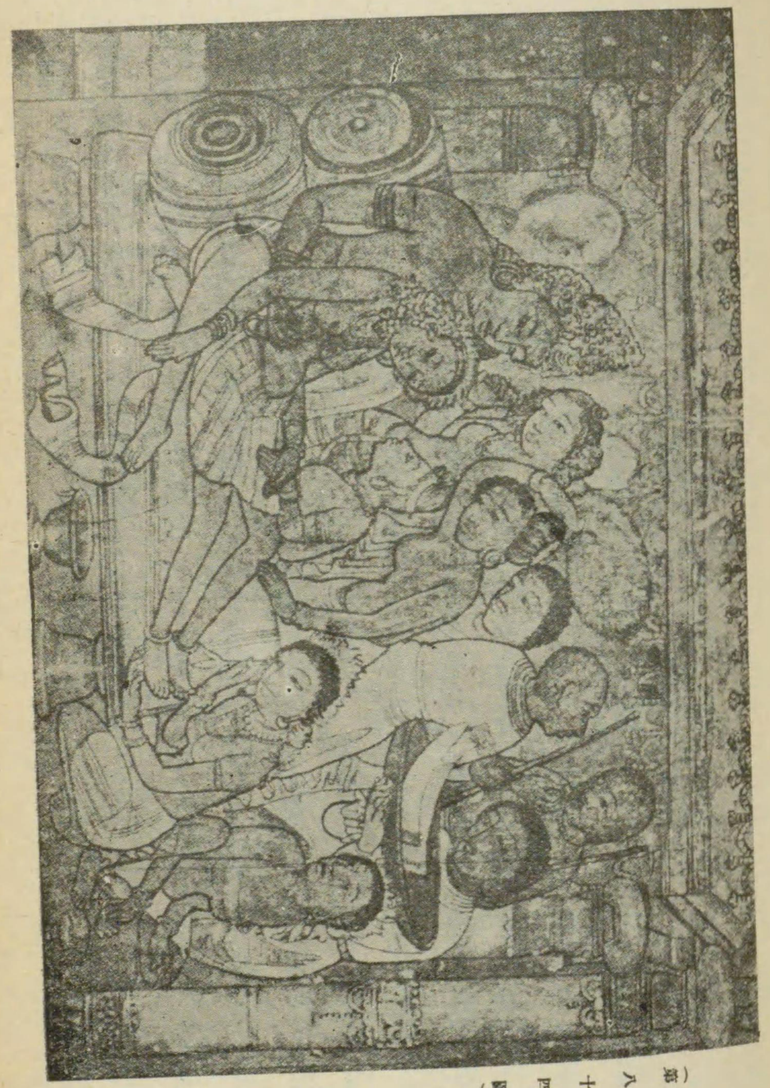
西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths.-The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 37, Fig. 73.)



(第八十三圖)

〔圖說〕獵夫が象王の牙を獲來りしを宮中に持參し之を王妃に示した時、王妃之を視て將に悶絶せんとする處を圖し顯はしたもので、即ち圖の右方には白衣を着けた人物が二牙を盤上に載せて入つて來た處を圖し、而して床上に在りて王の膝上に抱かれてゐるのは云ふまでも無く王妃であつて、その床の側に侍女らしいものが二三人居る。是れは王と共に妃を介抱して居るものと見られるのである。此の圖は蓋し獵夫が坑中より象を窺ふ所、既に象牙を得て二牙を擔ふて歸路に在る所、既に王宮に到達した處など一具に圖し顯はされてあるのであるが、今は唯々末段の一部分をこゝに掲載したのである。(第八十四圖)

之と同題の畫圖としては、同じ此のアジャンター窟寺第十七



(第八十四圖)

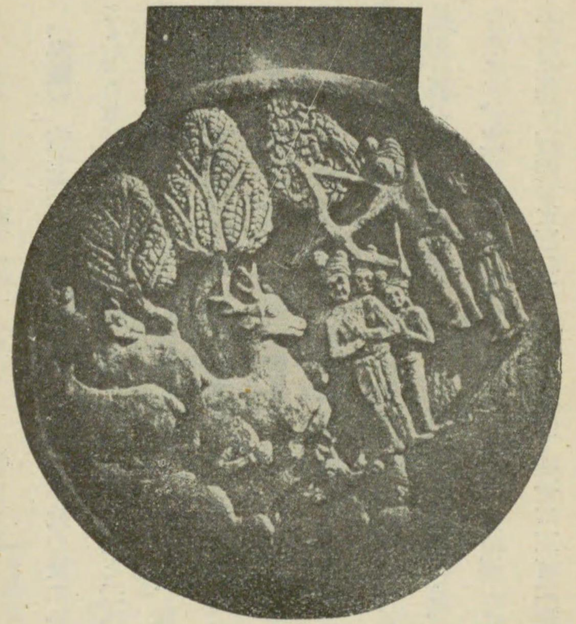
洞の壁畫には更に極めて詳密なる圖像がある。卽ちそれによると象王が衆象と俱に樹林を遊歩する所、池中に蓮華を得て之を嫡妻に與ふる所、小妻憤死の後人間に再生して四姓の女となり、聘せられて某國王の妃となる所、妃が王に向つて象王の牙を得んことを要請する所、妃欝々として娛しまず厭まで象牙を得んことを王に向て迫る所、獵夫を招き之に象牙を取り來らんことを命ずる所、獵夫、象王を窺ふ所、獵夫既に六牙を得て歸り、妃之を見て悶絕する所など、說話の始終が殘り無く圖出されてゐるのである。又ラホール博物館所藏、健馱邏地方カラマール發見の遺品には(第八十三圖 A. Foucher.-The Beginnings of Buddhist Art, Plate XXX, 1.)、獵夫が坑中より象王を射るところと、及び象王が自から獵夫のために牙を授くるところとが簡單に圖出されてある。

第六十三　九色鹿

中印度バルフート塔欄楯彫刻 (A. Cunningham—The Stūpa of Bharhut, P. 51. Plate XXV, 1.)

〔解題〕 古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の世に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。鹿王の身を受けられ、其の名を修凡と云ひ山中に止住したが、體毛九色にして世に希有のものであつた。ある時江邊に遊戯してゐると、偶々溺人ありて天を呼び哀を求むるを視、乃ち悲愍の情を起し、危に投じて水中に赴き溺人をして角に援り背に騎らしめて之を救ひ出したのである。そして溺人の去るに臨んで堅くその鹿王の所在を他に知らしめぬことを誓はしめたのであつた。處が其の國の摩因光王の妃和致が、夢に身毛九色にして其の角が犀にも踰えたる鹿王を親、王に向て此の如き鹿の皮角を獲て衣とし、珥とせんことを乞ふたのであつた。仍て王は群臣に向て鹿の體狀を說き、若し獲る者は之を一縣に封じ金鉢に銀粟を滿し銀鉢に金粟を滿たして與へんとて、之が應者を募つたのである。時に彼の溺人は之を聞いて其の賞金に眼が眩み、曩の回生の恩義と約諾とを忘れてしまひ、卽ち馳せて王宮に詣りて鹿王の在所を陳告した。すると忽ち溺人の面に癩を生じた。而も王は之を案內者として兵衆を率ゐて江を渡り、鹿王の所に到つたの

である。鹿王は王の弓を彎きて己に向ふを見、疾く馳せて王前に跪づき、具に溺人忘恩の顚末を述べた。王は鹿の言を善とし、之を放して國に還つたが、和致妃は之を聞きて心碎けて死んだといふのである。



(第八十五圖)

〔圖說〕 鹿王が溺人を救ふところ、及び摩因光王の害を受けんとし王前に至りて王と問答のところを圖し顯はしたもので、即ち圖の右下方、水中に鹿王の背に騎り將に岸に達せんとしつゝあるは、溺人が鹿王の救を受

ゝる所であつて、圖の右端弓を彎き傍に一人あつて前方を指し居るは、摩因光王が忘恩者溺人の案内に依り鹿王の所に至り、之を射殺さんとするところ、弓を彎けるは摩因光王、傍らに居るは溺人である。又圖の中央にあたり、鹿王跪坐し、その前に三人の人の立ちながら合掌恭敬せるは、鹿王が摩因光王の前に赴き具に溺人救濟の顚末を述べ、王之を聞きて感激して居るところと見るべきである。此の圖像の作者は、此の圖が鹿本生の圖であることを、圖の上部に古梵字を以て Miga Jātaka と銘記してゐるのである。

第六十四　尼瞿陀鹿

西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 39, Plate 83.)

〔解題〕　古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の世間に於て菩薩の行を修してゐられた時のことである。鹿王の身を受けられ、他の一鹿王並に五百の群鹿と俱に山中に止住してゐた。ある時國王が城を出でゝ狩獵し、此の群鹿を見て兵を率ゐて之を圍んだのであるが、二鹿王は王と諮つて爾後日に二鹿を送りて王食に供することとしたのである。然るに數日の後、一の姙身の鹿が死につくべき番にあたつた。菩薩鹿王は大に之を愍んで、遂にかの姙身の鹿に代つて自から王厨に詣つた。厨士は鹿王の自から來たるを怪み此の事を王に白した。王彼の鹿王を將き來らしむ、鹿王、王に向て廣く其の意を說く。王深く其の德に感じ、一國の內永く射獵せざるに至つたと云ふことである。

〔圖說〕　菩薩鹿王が姙身の鹿に代りて王厨に至り、王に對面してその事由を述べてゐるところを畫いたもので、卽ち圖の向つて左方は王の厨房であつて種々の瓶器等が置かれてある。其の下に鹿がゐて二人の厨士らしいものが驚きの樣をしてゐるのは、鹿王自から王厨に至れることを厨士が驚いてゐるところである。其の稍々右方厨房の入口に鹿王が居り、そして貴人と何か問答を

(第六十四圖)

してゐるやうに見えるのは、王に向つて具に來意を述べてゐる 所である。

第六十五　熊

西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 13, Fig. 28.)

〔解題〕 古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の世に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。大熊の身を受け深山に處して慈忍の行を修してゐられた。ある時一樵夫が路を失つて深山に踏み入り、且つ大雨に値ひ飢寒に迫られて困厄してゐた。大熊見て之を憐れみ窟中に宿せしめ甘菓美水を供給し、七日を經て雨の止むを待つて道徑を示して還らしめた。その時熊は彼の樵人に向つて堅く我住處を說いてはならぬと告げたのであつた。處が樵夫は安穩に里に出づるを得て後は、忽ち曩日の大恩を忘れ、獵師を招いて大熊を殺害してしまつた。そして分配した肉を手で展べて取らうとした時、背恩者たる樵夫の二肘は、忽ち地に墮ちてしまつた。

〔圖說〕 大熊が樵夫を抱きて、その飢寒をいたわり救ふてゐる所を畫いたもので、卽ち大熊がその慈愍の心を以て寒と飢とに惱める樵夫の身を溫め救養してゐる。圖相は極めて單純であるが

(圖七十八第)

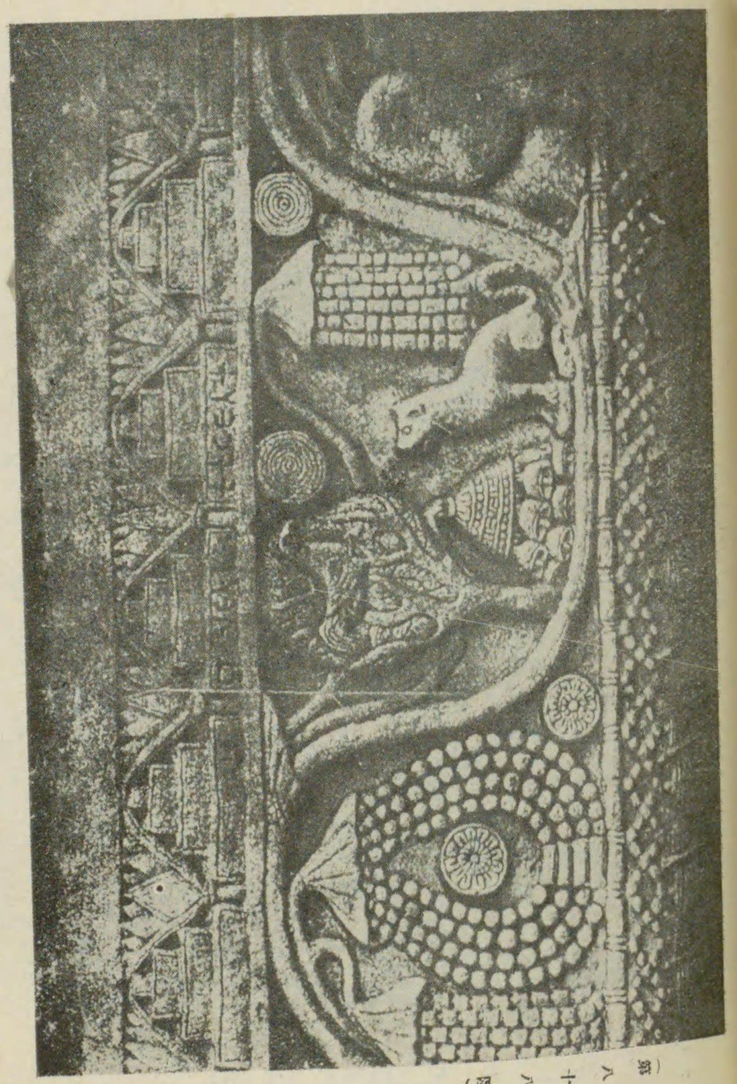
その樵夫の面貌など、如何にも飢寒に迫れる後の樣を示し、また背恩者としての性格も善く畫き顯されてゐて、正しく此の熊本生の圖像なることを推知せしむるに足るのである。

第六十六　野鷄

中印度バルフート塔欄楯彫刻
(A. Cumningham.—The Stūpa of Bharhut, P. 77, Plate XLVIII.)

〔解題〕　古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時の事である。野雞の身を受けて大叢樹の間に止住し、慈心を行じてゐられたのであつた。その時一の野猫が同じ叢林の中に住んでゐたが、樹上の野雞王を見て、心に毒害を懷きながら種々甘言を以て野雞を誘惑し、己が妻たらんことを勸說した。併しながら野雞は遂に怨家たる野猫の要求に應ずること無く、能く其の身壽を全ふしたといふことである。

〔圖說〕　樹上に居る野雞に對して、野猫が樹下に在りて種々誘惑の語を述べて問答してゐる所を畫いたものである。圖の上欄に古梵字を以て　Bidālo Jātaka Kukuta Jātaka　と銘記してある。ビダーラは猫、ククタは雞であるから、此の圖が雞本生（又は猫本生）なることは原畫者の記すところに依りて更に明確である。



（第六十六圖）

第六十七　雁

西印度アジャンター窟寺第十七洞壁畫
(J. Griffiths—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 37, Plate 64.)

〔解題〕　古昔幾百千萬年の前世に、釋尊が此の人間に於て菩薩の行を修したまふてゐられた時のことである。鴈王の身を受け、その名を賴吒といひ、臣なる素摩と名づくる鴈を始として五百の群鴈を侶として一處に住してゐた。ある時、不幸にも此の鴈王が獵者のために捕へられた。その時に五百の群鴈は皆棄てて飛び去つたのであるが、唯々素摩のみは隨逐して捨てなかつた。そして鴈王が梵摩曜王の宮庭に獻ぜられ、王前に至るや、素摩亦隨ひ、五百の群鴈も王の殿上に在つて聲を作した。時に鴈王は梵摩曜王の問に答へ、兼ねて王のために正法を以て國を治むべきことを勸說したので、王は善法を聞き且つ素摩の臣節に感じ、便ち之を放ち去らしめたといふことである。

〔圖說〕　鴈王と梵摩曜王とが相對して問答をしてゐるところで、卽ち圖の向つて左方に倚坐してゐるのは梵摩曜王で、其の背後にゐる數名の人物は孰れも王の臣僚であらう。そして王に對して床上に止住してゐる大鴈は卽ち賴吒鴈王で、その直ぐ左脇に居る稍小なる鴈は素摩鴈、その後に

(第八十九圖)

第七　獼猴

居る一の人物は鴈王を捕へて梵摩曜王に献じた獵師、その附近に居る多數の小鴈は所謂五百の群鴈である。是れ卽ち梵摩曜王が、賴吒鴈王と對話しつつある光景である。

此の外になほ鳥類に關する本生畫としては、彼のバルフート塔欄楯の古彫刻に、鵝王本生の圖像がある。圖は鵝王と孔雀鳥と問答をしてゐるやうな光景が畫いてあり、そして圖上欄外に古梵字を以て Hansa Jātaka と銘記してある。

第三　佛形像

一　造像の起原

佛像が製作さるゝに至つたことに就きて、傳說としては釋尊御在世の頃より造られたといふて經論の中にも處々に書いてあるが、併し實際現に殘存してゐるものに就いて研究して見ると、上古の遺物には佛の形像は全く見當らないのである。既に述べた如く佛傳畫の樣な當然佛陀の形相を造顯せねばならぬものにさへも、それが描出されて居らぬ。時代からいへば、釋尊が入寂されてから四五百年の間に製作された遺品として今日現存してゐるもの、卽ち阿育王時代の作物である佛陀伽耶の欄楯を始として、彼のバルフートの欄楯、及びサンチーの塔門など凡そ西曆紀元前後までの作物には、一も釋尊の形像を認める事が出來ないのである。そこで佛像製作の起原について何故に經論の中に確としたる傳說がありながら、而も實際に於いて佛像が無いかと云ふこと、何の時代から佛像が製作さるゝに至つたかと云ふこと、又何の土地で造り始められたかといふこと、

及び佛形像製作の動機について其の間に何か特殊の事情がありはせぬかといふやうなことが、目下學界の問題になつてゐる譯である。而してその中第一に經論に其の說があり乍ら遺物に其の像の無いといふことについては、經論と遺物とは孰れが確かで信用が出來るかを研究せねばならぬ。然るにその成立の時代から云へば、遺物が先きで經論の方が後に出來たものと推察することが出來るから、此の意味に於いて、經論の中に造像に關する傳說があつたとしても、それが必ずしも佛在世の時代から造像の事實があつたと云ふ證據にはならない。否な寧ろ遺物によつて、佛形像の製作が無かつたものとするが理の當然である。又第二に何時頃から起つたかといふに、西曆紀元前の作物である前記佛陀伽耶、バルフート等の現存遺物の製作年代を考へ、それ等の遺品中に全然佛形像のない所から推測して見ると、どうしても西曆紀元後のことゝ思はれる。假令若し紀元前に遡り得るとしても、それは極めて僅少な年月と見做さなければならぬ。次に又第三に何の地方から起つたかといふに、是については今の處で正確な判斷を下すことは出來ぬが、最近西洋の學者たちは、北印度の健駄邏附近に比較的早く希臘文明が入り込んで居た關係から、造像は健駄邏地方から起つて、その後印度本土に及ぼしたものであらうと云ふ說を立て、夫れが頗る有力となつ

て居る。併し乍ら希臘の文明は、阿育王以前から既に中印度へも入り込んで居たのであつて、必ずしも紀元前後と云ふ樣な後の時代では無いのであるから、若し希臘文明の影響として、佛陀の形像を造ることが起り得たとするならば、もつと早くから中印度に造像の事があつても差支無からうと思ふ。要するに、如何なる動機で從來描き現さなかつたものを描出する樣になつたかと云ふことは、今の處更に解らぬのである。若しこの理由が明瞭になれば、從つて初めて作つた時代も地域も判明する譯であるけれど、夫れが解らぬから致し方が無い。併かし健駄邏地方から起つたと云ふ考へは、決して惡い考へではない。寧ろ適當な歷史的の推論と認められるが、私等がまだそれ等の說に全部の贊意を表することの出來ぬのは、畢竟形像が無かつた時代から、ある樣になつた其の過渡期の圖像が、南印度のアマラーヴチーにあるからである。又健駄邏にも夫れに準ずる樣なものが一つ二つ見える處から考へると、これは或は健駄邏に起つて中印度に及ぼしたと云ふよりは、寧ろ或る時代に至つて、印度本土に於ても、健駄邏に於ても、同時に佛の形像が造顯される樣になつたものでは無いかと考へられる。それから又第四に佛形像が或る時期を經過した後に忽然と製作さるゝ樣になつた動機に就き、其の間に何か特殊の事情がありはせぬかといふ

について、私は最近種々研究思索の結果として、其は大乘佛教の興起と相策應して造顯さるゝに至つたものであらうと推斷を加へざるを得ざるに至つた。それにしても亦大乘佛教なるものが、果して何時何地に起つたかといふことに就いて、頗る難しい問題があるので、一概に輕々しく說明し去る譯にはいかない。唯々其の結論のみについて一言すれば、凡そ耶蘇紀元を去る遠からざる頃と思はるゝ時代に、健駄邏地方(?)を中心として大乘佛教が興起したのであつた。而して此の大乘佛教を奉ずる徒衆に於ては、從來の小乘佛教徒が、消極的に專ら自調自度の教を守つてゐたのに反して、大に進で積極的に自他兼濟の教を弘むることとなり、從つてその教義並に日常の行儀なども、全く面目を一新するに至つたのであるが、特にかの塔を建て像を造り且つ經典を書寫讀誦する等の種々の作善の如き、孰れも咸大乘教徒に由つて主として勸奬實行せられたるものなるを思へば、今造像の起原並にその事業が凡べて彼等の手に成るものなることは推測するに難くない樣にも考へられる。

二　造像形式の發達

佛の形像が製作さるゝ樣になつた時は、既に佛滅後數世紀を經てゐる故に、その佛の形像が始めて出來た頃には南方印度ばかりでなく、北方印度の健駄邏地方は勿論、中央亞細亞へかけても充分に佛教が弘まつて居た。從つて一たび佛の形像が造られる樣になつてからは、南北一度にその造像が行はれることになつたらしい。而して其の造像形式の發達に就いては、地理的にも又時代の上からも自から多少の變遷があつて、其の間大體に於て南方印度方面のものと、北方健駄邏及び西域地方のものとの二通りある樣に思はれる。

その中で南方印度方面に於ては、初期時代には佛傳畫が專ら行はれてゐた。而も最初は故意に佛陀の形像を表現しなかつたものに對して後日新しく佛像を描き加ふることゝなつた。それが卽ち佛像の最初のものと考へられる。例へば成道の圖、轉法輪の圖、經行の圖などの類から佛の形像を造顯することが創まつたものと思ふ。而して其の初めは單に佛傳の畫圖の中へ佛陀の形像を目立つ樣に大きく顯はし、その兩脇などへ侍者を副へた位であつたものが、更に進んで來ると、周圍の人物を少さく臺座の中へ現はして、佛の形像だけを臺座の上へ大きく造り出す樣になつた。印度の遺物に現はれた佛像、卽ちアマラーヴチー、アヂャンター、健駄邏、摩突羅、サールナート

等の遺物を、順次に比べて見ると、其の發達の工合が略々明に見分け得るのである。而して印度に行はれた佛像としては、特に禮拜の對象となつた本尊像の製作と云ふものは、餘り古くは行はれないと考へられる。たとへあつてもその遺物は極めて新しいもので、而も多くは多少共にまだ佛傳圖から脫化したものゝ俤を傳へて居る。其の特徵の一としては、アヂャンター、摩突羅、サールナートあたりの佛像が、其の坐像は座具を敷いて居つて、膝下に其の布端が見えて居る。そして光背（後光）は單に頭光ばかりで、身光のあるのが殆ど無い。その頭光も、多くは華模樣などを彫出して、光相らしくなつてゐないのである。此の點に於て、支那又は日本にある身光を備へた佛像から見ると、多少造像の趣を異にして居るものと見なければならぬ。

又同じ印度の中でも、今云ふ南方印度のものと、北印度健駄邏地方のものとは、全然造像の形式を異にした所がある。今その最も著しい點を一つ二つ云へば、南方印度のものは佛の頭髮が孰れも螺髮になつてゐるが、健駄邏地方のものは波狀形の髮をしてゐる。又南方印度のものは趺坐の場合に膝下には座具の布端が見えてゐるが、健駄邏地方のものにはそれがなくて總體に衣が臺座まで垂れ下つてゐる。又頭光の如きも南方印度のものは華模樣などを一面に彫鏤して始と光相

らしくなつてゐないが、健駄邏地方のものにはその事なく、單なる圓光として彫出され、その或るものゝ如きは、周圓に光燄を現はしたものがある如きは卽ちその例である。次に西域の造像については、古代の遺物の現存するものが多くまだ發見されて居らぬから、其の造像形式の發達などについても思ひ切つた事は言ひ得ないが、種々の事情と支那の造像とから逆に推測する事によつて、幾分の推斷を下す事が出來る。卽ち西域に於ても、紀元以後、月氏、安息、康居等の諸國に佛敎が盛に行はれ、夫れが間もなく新疆省地方へ入つた。其處で時代は不明であるが、大體印度で佛像が創作せられたと殆ど同時頃に西域でも佛像が造り初められたものと思はれる。併しその造像は大體印度よりも寧ろ盛に行はれたらしい。そして更に支那の大同や龍門にある北魏時代の佛像から遡つて考へると、西域の造像は、印度のものとは內容形式共に、大分趣を異にして居たらしい。夫れは印度の像は佛傳圖から脫化して來て居るが、龍門あたりのものは佛傳圖でなくて禮拜の本尊像としての形式で造られて居るのである。卽ち脇侍として菩薩像があつたり、後光には頭光許りでなく身光をも備へて居る。且つ其身光に化佛などのついて居るのがある。是等の北魏の造像と同時代の印度の作物であるところの南方印度系のアジャンター、摩突羅、サールナー

ト邊の造像、或は北印度健駄邏地方の造像と比較すると、餘程其の間に隔りがあるのである。否支那北魏の造像は、印度に行はれた南北の二系統の中では、寧ろ北方の健駄邏地方の造像の影響を受けてゐるものなることを認めることが出來るが、その實はそれはどうしても健駄邏以北西域で發達した造像の形式を承繼して出來上つたものと考へるのが正當であらう。今日の處では、西域地方で作られた極く古い遺品が餘り發見されて居らぬために、其等造像形式の發達系統の由來する所が判然せぬが、要するに南方印度の造像と、健駄邏地方の造像と、西域及び支那の造像とは、佛教の教理發達に伴ふ信仰の相違と、その地理的の關係とから、多少とも異つた徑路を以て發達して來たものと考ふべきである。即ち教理の發達は小乘と大乘と其の教を異にするに從つて、前者は唯釋迦一佛のみを崇信せしに對して、後者は阿閦、阿彌陀等の十方の諸佛並に文殊觀音等の諸大菩薩を尊奉するが如き、又南方印度に於ける造像と、健駄邏地方の造像乃至西域支那の造像とは、其の風土の相違並に民族の好尚に從つて、容貌、姿態、衣服その他に於て、自から形式を異にするに至れる如きは必然の結果である。又同じ地方の造像にても時代の變遷と其教儀の發達につれて、前後必ずしも同一でない。即ち印度に於ても當初は大體小乘教の立場で現實の釋尊を現は

したものが多いのであるが、後には大乘の佛菩薩像乃至密教の明王天等の信仰造像も行はるる樣になつた。支那の造像も北魏の時代は、寧ろ健駄邏地方並に西域地方の造像の影響を受けてゐるが唐時代のものになると、直接に印度の形式を採る所が尠なくない。又西域の如きは、始めは健駄邏地方の造樣を承繼し、自から一風調をなしてゐたものと思はれるが、唐宋以後のものになると、皆唐風を摸して作られたもののみである。斯樣な譯で、造像の形式も今日に至るまでには、永い間に種々複雜なる事情の下に各時代各地方に於て各特異な發達を遂げたものと察せられる。

三　觀佛と造像

印度方面の造像は、前に述べた如く當初佛傳圖の製作から起つて居るのであるから、餘り觀佛と云ふやうな事については重きを置かず、單に現實の釋尊の尊容を現はす事が主になつて居た。勿論夫れについても、釋尊の御姿を人間として理想的な立派な形で現はすと云ふことには努力をして居つたのである。そして釋尊の御姿が如何に立派であつたかと云ふことを言ひ現はす爲めに、三十二相、八十種好と云ふ樣な說が立てられて、夫れが造像の上にも多くの影響を及ぼして居る。

例へば、肉髻相、白毫相、馬陰藏相のやうな部分的名稱が付けられて、釋尊の身體の各部を描出するについても、多大の苦心が拂はれて居たわけである。一例を擧げて見ると、アヂャンターの彫刻にある佛像は、非常に手が長くて、膝に達して居ると云ふやうなことも、矢張り據る處があつて造られて居るのであつて、兎に角印度の方の造像は人間としての釋尊を表現することが主となつて居た。

然るに西域地方及び支那の造像になると、信仰の對象として、即ち理想的の本尊像としての佛陀を現はしたものであるから、像としては單に同じ佛身を現はして居るけれども、そは寧ろ現實の釋尊を現はしたもので無くて、釋尊又は他の諸佛の報身報土の佛と云ふやうなものを現はしたのが多い。從つて造られた像の形の上では同一の樣に見えるけれども、造像の動機及び信仰の內容には大なる相異があるのである。特に或時代からは佛陀の身體を觀じたり、極樂の淨土の有樣を觀ずる樣な信仰が起つて來て修行をする樣になり、其の信仰の對象として、佛像が造られる樣になつた。像としては、矢張り三十二相、八十種好を具したものと考へて居つた故に、大した相違はないが、先に云ふた特徵としての身光のやうなものは、北方造像の特長として最も異彩を放つ

ものの一と見做すべきである。

觀佛の事を書いた最もやかましい經典として、般舟三昧經、觀佛三昧海經、觀無量壽經等がある。觀佛三昧海經の中には、三十二相のことが非常に委しく書いてある。又、觀無量壽經の中には、彌陀の佛身等に關することが書いてあるが、其の中に「圓光の中に五百の化佛あり、釋迦牟尼佛の如し」と云ふ樣なことが書いてある。是は何でもないことのやうであるが、支那の大同の佛像や、我國の唐招提寺の盧舍那佛の圓光などを見て考へると、後光に化佛をつけたのは、印度には殆ど其の造例を見ない所であるから、即ちかゝる北方佛敎（西域、支那）獨特の佛像の行はれた起原沿革の古く且つ由來の深いことについて、一種の興味を感ぜざるを得ないのである。

四　三十二相八十種好

佛陀の形像は、人間身體の善美を竭せるものと考へられ、その美點を列擧したものは、即ち三十二相八十種好の說である。而して此の三十二相八十種好の說は大小乘經律論の中に弘く散說せられて居り、其の說明も必ずしも一定でないが、今大智度論第四の說に依つて、その三十二相の名

目を擧げて見ると、

1 足下安平立相　足の下が一切地に著き針を容れる間隙も無い。

2 足下二輪相　足下に輪相があつて、千輻・輞・轂の三とも具足し妙好を極めてゐる。

3 長指相　足指が纖長端直である。

4 足跟廣平相

5 手足指縵網相　手足の指の間には縵網があつて、指を張れば其の相が現はれる。

6 手足柔軟相　手足の柔軟なること細き劫波のやうである。

7 足趺高滿相　足を以て地を踏むに廣くもなければ狹くも無く、足下の色は赤蓮華の如く、足指の間の網及び足邊の色は眞珊瑚の如く、足趺の上は眞金色で、足趺の上の毛は青毗琉璃の色をしてゐて、其の足の嚴好なることは、雜寶の殿の種々裝飾せられたもののやうである。

8 伊泥延脛相　其の脛の形は伊泥延鹿（羚羊の一種）の脛の隨次に圓の細き如く、長短所を得て居る。

9 正立手摩膝相　俯しもせず仰ぎもせずに、掌で膝が摩せられる。

10 陰藏相　陰物は馬王の如く藏れてゐる。

11 身廣長等相　四支齊等に中を得て、恰も尼拘盧陀樹の四邊齊等なるに似てゐる。

12 毛上向相　身上の諸毛は皆上に向つて靡いてゐる。

13 一一孔一毛生相　一々の孔に一毛を生じ、而もその毛は亂れずに青琉璃の色をなし右旋して上に向つてゐる。

14 金色相

15 丈光相　身の四邊に一丈の光がある。

16 細薄皮相　身皮には塵土が著かない。

17 七處隆滿相　兩手兩足兩肩項の七處皆隆滿端正である。

18 兩腋下平滿相　兩腋下は高くもなければ深くもない。

19 上身如師子相

20 大遠身相　一切の人の中で身量最も大きく而も直ぐである。

21 肩圓好相

22 四十齒相　四十の齒がある。

23 齒齊相　諸齒齊密にて其の間一毫も容れない。

24 牙白相　その牙白きこと雪山王の光にも增してゐる。

25 師子頰相　その頰の平廣なること師子王のやうである。

26 味中得上味相　一切食する所皆上味を得る。

27 大舌相　舌大にして口中より出せば一切の面分を覆ふて髮際に至るけれど、若し還て口中に入れば、亦口中に滿たない。

28 梵聲相　其の聲梵天の五種の聲の如く、深きこと雷の如く、淸み徹り遠く聞え厭く者悅樂し、心に入て敬愛され、諦に了りて解し易く、聽くもの厭ふことがない。又迦陵毗迦鳥の聲の愛すべきが如く、亦大鼓の音の深遠なるにも比すべきである。

29 眞青眼相　眼は好青蓮華のやうである。

30 牛眼睫相　睫は牛王の睫のやうに長くて好く、而も亂れてゐない。

31 頂髻相　髻の如き骨髻が頂上に在る。

32 白毛相　眉間に生じた白毛は高からず下からざる所にあつて、白淨にして右旋してゐるが、舒せば長さは五尺もある。

略右記の如くであるが、更に方廣大莊嚴經に依るに、三十二相とは、一には頂に肉髻がある。二には螺髮右旋して其色は青紺である。三には額は廣く平正である。四には眉間の毫相は白きこと珂雪のやうである。五には睫は牛王のやうである。六には目は紺青色である。七には四十齒ありて齊しく而も光潔である。八には齒は密にして疎でない。九には齒の白きこと軍圖華のやうである。十には梵音聲がある。十一に味中上味を得。十二に舌は軟薄である。十三に頰は師子のやうである。十四に兩肩は圓滿である。十五に身量は七肘ある。十六に前分は師子王の臆のやうである。十七に四牙は皎白である。十八に膚體は柔軟細滑にして紫磨金色である。十九に身體は正直である。二十に手を垂るれば膝を過ぐ。二十一に身分は圓滿なること尼拘陀樹のやうである。二十二に一々の毛孔に皆一毛を生じ。二十三に身毛は右旋して上に靡き。二十四に陰藏は隱密である。二十五に髀脯は長く。二十六に腨は伊尼鹿王のやうである。二十七に足跟は圓正にして足指は

纖長である。二十八に足趺は隆起してゐる。二十九に手足は柔軟細滑である。三十に手足の指には皆網輓がある。三十一に手足の掌中には各輪相があつて、轂輞圓備し千輻具足し光明照曜してゐる。三十二に足下は平正にして周遍して地に案ずと云ふ。なほ八十種好につきて、八十種好とは、一には手足の指の甲は皆悉く高く起つてゐる。二には指の甲は赤銅のやうである。三には指の甲には潤澤がある。四には手の文に潤澤がある。五には手の文は理深く。六には手の文は分明に顯著である。七には手の文は端は細く。八には手足は曲がない。九には手の指は纖長である。十には手の指は圓滿である。十一は手の指は漸く細く。十二に手の指は曲がない。十三に筋脈は露れず。十四に踝は現れず。十五に足下は平である。十六に足跟は圓正である。十七に脣の肉は赤好なること頻婆果のやうである。十八に聲は麁獷でない。十九に舌は柔軟にて色は赤銅のやうである。二十に聲は雷音の如くにて清暢和雅である。二十一に諸根具足してゐる。二十二に臂は纖長である。二十三に身は清淨にして嚴好である。二十四に身體は柔軟である。二十五に身體は平正である。二十六に身に缺減がない。二十七に身漸く纖直である。二十八に身は動搖しない。二十九に身分は相稱ふてゐる。三十に膝輪は圓滿である。三十一に身は輕妙である。三十二に身に

光明がある。三十三に身に斜曲がない。三十四に臍は深く。三十五に臍は偏らず。三十六に臍は位に稱ひ。三十七に臍は清淨である。三十八に身は端嚴である。三十九に身は極めて淨く遍ねく光明を發して諸冥暗を破し。四十に行くことは象王のやうである。四十一に遊歩することは師子王のやうである。四十二に行くことは牛王のやうである。四十三に行くことは鵝王のやうである。四十四に行くことは右に順ふ。四十五に腹は圓滿で。四十六に腹は妙好である。四十七に腹に偏曲がない。四十八に腹相現ぜず。四十九に身に黑子がない。五十に牙は圓正である。五十一に齒は白くして齊密である。五十二に四牙は均等である。五十三に鼻は高くして脩直である。五十四に兩目は明淨である。五十五に目に垢穢がない。五十六に目は美妙である。五十七に目は脩く廣い。五十八に目は端正である。五十九に目は青蓮のやうである。六十には眉は纖にして而も長い。六十一に見る者は皆喜を生じ。六十二に眉の色は青紺である。六十三に眉の端は漸く細い。六十四に兩眉の頭は微しく相接してゐる。六十五に頰の相は平滿である。六十六に頰に缺減がない。六十七に頰に過惡がない。六十八に身に缺損がなく譏嫌する所がない。六十九に諸根は寂然としてゐる。七十に眉間の毫相は光白鮮潔である。七十一に額は廣く平正である。七十二に頭頂は圓滿

である。七十三に髪は美にして黒い。七十四に髪は細軟である。七十五に髪は亂れてゐない。七十六に髪は香潔である。七十七に髪には潤澤がある。七十八に髪に五卍字がある。七十九に髪の彩は螺のごとく旋つてゐる。八十には髪に難陀越多吉輪魚の相があると記してある。蓋し是れ等の諸特徴は、古代印度人の眼に映じた人間美の窮極を列擧したもので、中には色や形に顯はすことの出來ないものまでも擧示してゐるが、而も是れ等傳說の成立とともに、肉髻相、白毫相、縵網相、馬陰藏相、足下千輻輪相など、それ〴〵造像形式の上にも幾分づゝ參酌されてあるのである。

五　菩薩明王天等像

佛陀の形像以外、即ち菩薩、明王、天等諸像の造顯に就きて、其の菩薩の形像は、釋尊出家以前在家形のものは、古くから印度に澤山に在るが、彌勒、觀音等の大乘の佛菩薩像に至つては、時代が稍々下つてから製作さるるに至つたものと認むべきである。就中不空羂索、十一面等、多面多臂の異形の諸尊に至つては、孰れも西紀第七八世紀以後に於て、始めて造顯さるるに至つたもので、古い所には絕對に無い。又明王像の如きも、是れ亦密敎興起以後になつて漸く製作さるる

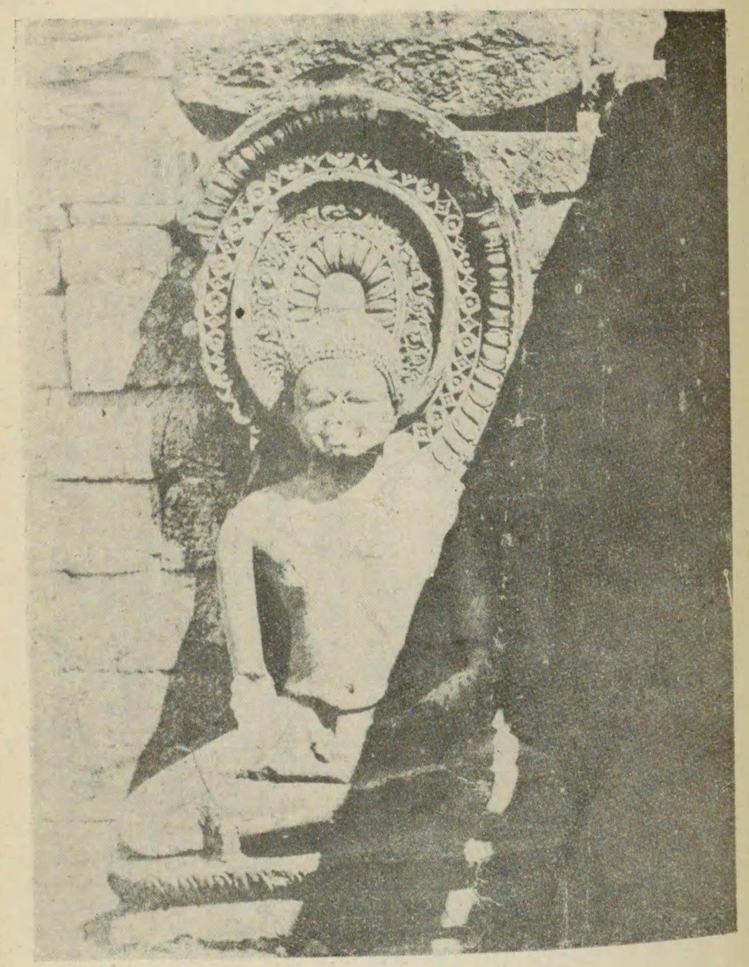
ことになつたのであるから、その起原は是れ亦比較的新しいのである。又梵天、帝釋、四天王等に於ては、是れは極めて古い所から佛陀の歸依者として既に佛傳畫の中に畫き出されてゐるので、その造像例は、最古代の遺品からしてあるが、今日我國に現存する如き、甲冑等を着けたものは、南方印度にては孰れも裸形でその造例がなく、是れ亦主として健駄邏以北西域支那の製である。

第六十八　佛坐像

中印度サンチー遺品彫刻
（野生司香雪氏撮影）

〔解題〕　此の佛像はサンチー（Sanchi）の古精舍に安置されたものである。サンチーは印度ボーパール州中にある村落にて、即ち殑伽河の一支流なるベートヴ河の左岸に位し、ヴィルサ市の西南約五哩半、ボーパール市の北東約二十哩の所にある。此の地は大史及び善見律毘婆沙等に見えたる優禪尼（ウジャイニー）國の畏提寫（キヂシヤ）（Vidisa）に相當するものの如く、阿育王が此の地方に副王たりし時、此の地の長者女と婚し、摩哂陀等を生んだ。摩哂陀出家の後、此の地に寺塔を造立したと傳へらるるところである。蓋し此のサンチーの大塔は、阿育王時代の造顯にかゝるものなることは殆ど疑ひないが、塔門や欄楯は是れより稍後れて案達羅（アンドラブリトヤ）（Andrabhritya）王統シュリーシャータカルニ（Sri-Sata-karni）王等の外護の下に建造されたもの、其の塔門の雕刻に就きていへば、佛陀伽耶やバルフー

（第九十圖）

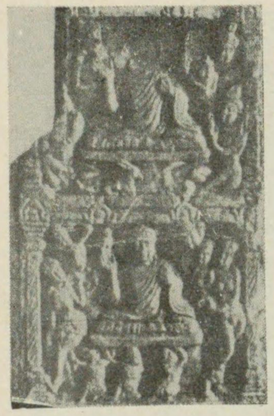


（第九十一圖）

トよりは後れ、アマラーヴチーよりは前のもので、凡そ西暦紀元前第一世紀頃の製作である。而して此の時代は、未だ佛形像の製作されなかつた時代であるから、塔門の雕刻には、佛傳畫はあつても、佛の形像は一つも圖出してないのである。此に掲ぐる佛像は、此のサンチーの古精舍中に安置されてあつたものには相違ないが、塔門の諸圖像に比すれば遙に後代の作物である。

〔圖說〕 降魔の相をなしたまへる釋迦像で、蓮華臺上に結跏趺坐し、左手は膝上に案じ、右手は舒べて地に案じてゐられるのである。衣は極めて薄くして衣紋の如きは殆ど見えない。頭光は全部華模樣を以て莊嚴され光相として受けとれぬ程のものである(第九十一圖)。此の種の佛像は概して餘り古いものでなく、早くも西紀四五世紀、崛多王統時代以後のものである。同じサンチーより見出されたる佛像としては、フェルガツソン氏の摸寫したものの方が(第九十圖 J. Fergusson.—Tree and Serpent Worship, P. 158, Plate XLI, Fig. I.) 幾らか古いかとも思はれぬでもないが、大體に於て同形式の像であり且つ製作年代も大差は無い。

第六十九　佛立像並佛脚跡

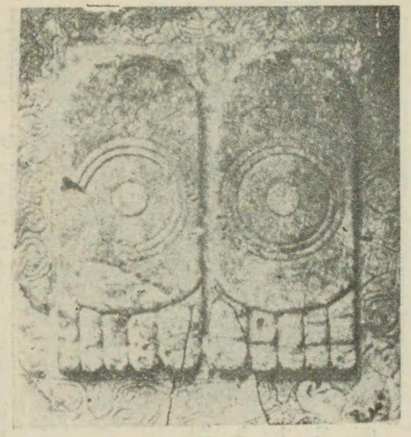


(第九十二圖)

南印度アマラーヴチー遺品彫刻 (J. Fergusson—Tree and Serpent Worship, Plate LXXV, Fig. I.)

〔解題〕 アマラーヴチー(Amarāvatī)は南印度キストナ河の南岸にてベースワーダ市を去る約十八哩の地點にある。玄奘の謂ゆる馱那羯磔迦國なる阿伐羅勢羅(Avaraśāila)僧伽藍に當るのである。創建者並に創建年代は詳かでないが、大方等無想經の懸記に依ると、佛滅七百年後に、此の地に增上女王出世し、閻浮提に遍ねく七寶塔を起すと傳へてゐるが其の實際の事蹟は明かでない。猶ほ此の經には、佛滅千二百年後に南天竺大國王婆多婆呵那王が大乘方等經典を講宣流布すと記してあるが、今の此のアマラーヴチーの彫刻の記銘の一に Maharaja Yadnya Sri Santakani の名がある。是れは案達羅王統のヤジニヤシユリー・シヤータカルニヽ(Yajñaśri Śātakarṇin)に相違ない所を見ると、此の塔欄楯の造建については亦かのサンチーの塔などゝ同じ樣に、案達羅王統の外護に待つことが多かつたらしい。此の點は無想經の懸記も多

少史實と連絡ある事とも見られるのである。蓋し此の地方は阿育王時代には摩訶提婆に依つて布教されたものらしく、恐らく塔の當體は古く阿育王時代に遡るべきものであろうが、但し欄楯に至つては後のものであることは明確である。而してその欄楯は内外二重あつたのであるが、此の塔欄楯の彫刻の中にも、其の圖像の上に古代のものと新様のものとの二種類がある。是れ或は内外二重の欄楯は各製作年代を異にし、一はサンチー塔門等の造建に次いで西紀第一世紀頃に成り、一はそれより稍々後れて同第二三世紀頃に成つたのではあるまいか。若し強て憶測を以て彼の大雲經の懸記に多少の信頼を托し得るものとすることが出來るならば、内の欄楯は増長女王、外は娑多婆の縣記に多少の信頼を托し得るものとすることが出來るならば、内の欄楯は増長女王、外は娑多婆の縣記に多少の信頼を托し得るものとすることが出來るならば、内の欄楯は増長女王、外は娑多婆



(第九十三圖)

呵那王の外護に成るものといひ得るかも知れないのである。凡そ此のアマラーヴチーの彫刻には、彼のバルフートやサンチーのものと同じく、故意に佛の形像を圖することを省略したものと、後

のアジャンターや健駄邏の作品と同じ様に、明に佛の形像を圖出したものとの二種類がある。今圖は蓋しその後者に屬するものである。

〔圖說〕 南方印度に於ける純印度様の彫刻として最も古き佛の形像を有するはアマラーヴチーであつて、今の彫刻も其の一者である(第九十四圖)。此の像は兩手とも缺損してはゐるが、左手は裂娑角を把り、右手は擧げて說法してゐられる。そして被着されたる裂裟の衣襞が明瞭に刻されてあるが、此の種の形式の形像は、造像史上比較的原初のものである。此の外になほ此のアマラーヴチーの佛像は其の作例に乏しくないが、立像にしても坐像にしても、大概今圖と相似たものである。而してその佛の頂部に就きて、今の像は頭部の髮形が判然して居らぬが、他の作例で見ると、判然と螺髮になつてゐる。即ち同地遺品の降魔成道圖

(第九十四圖)

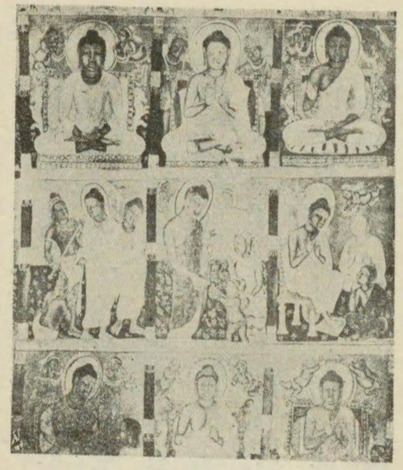
及び鹿苑初轉法輪圖等について之を見るに、その成道圖(第九十二圖 A. Foucher.—The Beginnings of Buddhist Art, Plate IV, 2.) の方の佛像の頭髮は明に螺髮であつて、而もその兩手は今と同じである。後世の像になると、彼のサールナートの造像例に見る如く、成道の時は觸地の印、說法の時は謂ゆる轉法輪の印に畫き顯はすのが普通であるが、此の圖は其の樣なことに頓着なく、擧手說法の形になつてゐる。その形式の定まらぬ所に其の造像の古さが認められるのである。又此の坐像に於てその趺坐したまへる下より座具の布端が見えてゐるが、是れは純印度樣の佛坐像の製作に於て、殆ど通規になつてゐる一特徵の始原を示してゐるのである。次に佛脚跡圖に就きて、バルフートやサンチーのものは、佛の全身を圖する代りに、唯佛の兩足のみを圖した。此の時代には全然佛の形像を圖することを避けてゐたのである。此のアマラーヴチーの圖像の中にも、例せば三迦葉敎化圖の如く前のバルフートやサンチー等のものと同一の意味で製作された圖像もあるが、旣に佛傳圖の中に判然と佛の形像が畫き出される樣になつてからは多少製作上の意義が變つて來た。そして最初は中央に千輻輪相(第九十三圖)のみであつたものが、三股形なども追加され、其の時代の下るに從て、遂にはかの大和藥師寺の佛足跡の如き複雜なものが出來る樣になつた。

第七十　佛倚像並諸尊像

西印度アジヤンター窟寺第九洞外壁彫刻
(野生司香雪氏撮影)

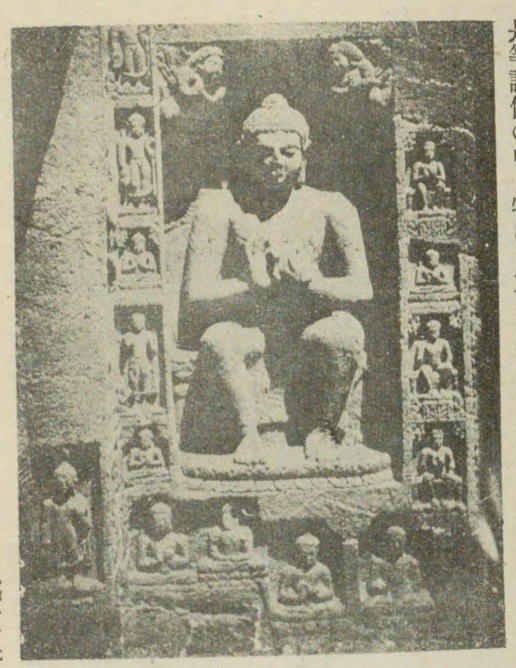
〔解題〕 アジヤンター(Ajanta)は印度デツカン高原の北部ギンドヤ山脈の附近エルーラの北方にある窟寺であつて、アウランガバドの東北約五十五哩、孟買市を去る約二百二十哩の所に在る。西域記に云ふ所の摩訶剌陀國の東境幽谷中に在りし伽藍に當り、西紀第五世紀の終頃に陳那菩薩等の止住して居られた處である。其の創建者は阿折羅阿羅漢であると傳へられてゐるが、其の事蹟は詳かでない。その窟寺は溪を挾んで斷崖に對立横布してゐる。造建の年代は窟に由つて同じでないが、古きは西紀第二世紀頃から新しきは同第七世紀頃に及んでゐる。併かし其の古いものといふても、大體アマラーヴチーの作物よりも後のものと考へられる。その中第十第十一第十六第十七第十九洞の如きは案達羅王統の保護を受けて成つたものかも知れぬ。窟內に多數の佛傳、本生等に關する壁畫を有するを以て頗る人口に膾炙してゐるのである。

〔圖說〕 此の像はアジヤンターの佛像として最も作例多き形相であつて、雙足を垂れて床に倚坐し、二手俱に胸に當て左手は內に向つて袈裟の角を把り、右手は外に向けて頭指と大指と相捻し左手の小指を壓すの勢を爲す。是れ後人の謂ゆる轉法輪の印相である。頭は螺髮で、衣は極めて薄く肌が透いて見えてゐる。上方左右には淨居天が華鬘を捧げて供養してゐる(第九十六圖)。此種の造像はサールナートの遺品にも多數の作例の存するもので、凡そ西紀四五世紀以後の製作物と見らるべきである。而して周圍に併せて十四の小佛像が彫刻されてあるが、その立像四體の中で、三體は左手は袈裟角を把り右手は舒べて後人の謂ゆる與願の印相をして居り、一體は左手は袈裟角を把り右手は擧げて、施無畏の相をして居る。又倚像三體の中、一體は本像と同じ轉法輪の印で、他の二體は手相缺損して詳かでないが、一體は轉法輪、他の一體は右手施無畏の相ではないかと思はれる。又坐像七體の中六體は本像と同じ轉



(第九十五圖)

法輪の相であるが、一體は左右の二手俱に膝上に案じて之を累ね定印の相に住してゐるのである。是等諸像の中、特に目立つて面白く感ぜられるのは、立像の右施無畏手の大きく長く作られてあることで、是れは佛三十二相の一に手を垂るれば膝を過ぐと云はれてある傳說にも相當し、彼の頂上螺髮の右に旋れるなどと相待つて、謂ゆる三十二相等の傳說と、その造像との間に密接なる關係を有するものなるかの如くにも感知せしむるのである。此の外第十九洞の壁畫(第九十五圖 J. Griffiths.—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 40, Plate 89.)を始め種々の形相をなせる佛の尊容を圖出せるものも尠なくない。



(第九十六圖)

第七十一　三尊佛像

西印度アジャンター窟寺第九洞壁畫
(J. Griffiths.—The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, P. 31. Plate 38.)

〔解題〕 印度に現存する佛像の中で、大乘佛教の本尊たるべきものが、相當に數多く存在すべき筈であるが、何うも確と大乘の佛像と稱し得べきものが甚だ尠ない。今此の三尊佛の如きは、尊名は解らぬが、兎も角も大乘の佛像と稱し得べき點に於て、頗る貴重な圖像の一なることを知るのである。

〔圖說〕 此の圖の中、中央の佛は莊嚴の師子牀に倚坐し、兩手共に胸に當て、左手は內に向て袈裟角を把り、右手は外に向けて頭指大指を相捻して左手の小指を壓し、謂ゆる說法の相をしてゐられる。そして其の佛の背後には傘蓋が立てられ、左右には拂子等を持てる侍者がゐる。又その佛の左右には佛に向つて少しく頭を下げ恭敬の相をなせるが如き佛が立つてゐる。其の佛は孰れも左手は少しく擧げて袈裟角を把り、右手は舒べ恰も與願の印の如き姿勢を作し、且つ其の後には傘蓋等を持せる侍者が居るのである。此の圖像は何佛の形像であるか詳かでないが、小乘では釋迦佛以外に同時に餘佛の出世を說かぬのであるから、かく一處に諸佛の集りたまふ樣を畫けるは

(圖七十九頁)

大乘の教説に本づけるものなることは察するに難くない。或は簡短な淨土變相の一種とでも見るべきものであらうか。なほこのアジャンターの造像中には、千佛の像を始めとして釋迦佛以外の佛諸尊を畫いたのかと思はれる圖像が尠なくないが、不幸にして今一々それ等の諸尊の尊名を知ること能はざるは遺憾である。但し此等大乘諸尊の圖像の顯し方は、西域系統のものに比すると、稍々初心の面影を留めてゐる。例へば頭光のみにて身光なく、天蓋華蓋を用ひずに、傘蓋を畫き顯はせる如き、亦以て一般を察すべきである。

(第九十八圖)

第七十二　佛立像

中印度摩突羅地方遺品彫刻
(野生司香雪氏撮影)

〔解題〕摩突羅(ヤ)(ラ)(秣菟羅、摩倫羅、末土羅、摩頭羅、Mathurā)は中印度閻牟那(ヤムナ)河の西岸にある今のムツトラ市に當り、阿育王時代に出世した烏波毱多の生地として有名である。此の地は中印度の摩揭陀と、北印度の健馱邏との中路に位し、佛滅後阿育王時代へかけて佛教が盛行したが、シュンガ王統の興起後に、佛教が一時中印度の地を拂つて衰退した時には、此の地も勿論その影響を受けたに相違ない。然

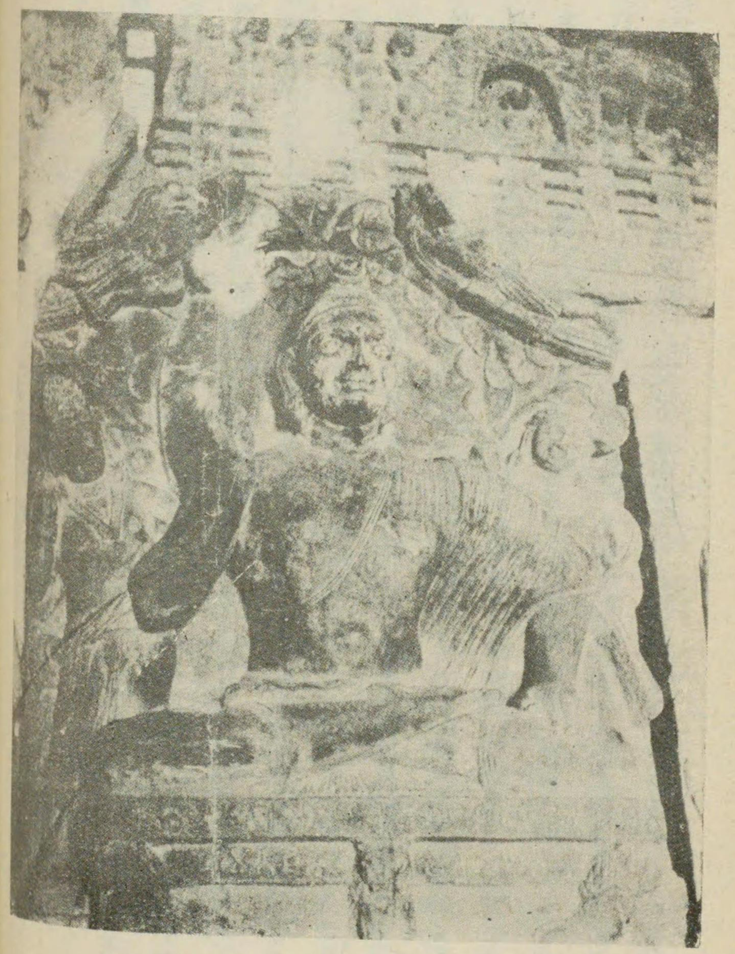
るに北印度に月氏貴霜王統起りて此の地を兼併し、兼ねて佛教を廣宣するに及び、再び教勢を輓回したものであるらしく、法顯が西遊した當時、中央印度の佛教は殆ど衰運にあつたが、唯々此の地と巴連弗（パータリプトラ）と佛陀伽耶（ブッダガヤ）の大覺寺との三所のみは、比較的に佛教が興行されてゐた。此の摩突羅の佛像に、中印度佛教復興期の作物として、サールナート其の他のものに比し、稍々古き時代の遺品の存するは、蓋しかかる歴史的事實の然らしむる所であらう。世親門下の學徒に由り那爛陀、カノージ等に佛教の再興されたのは、法顯の西遊より一世紀又は二世紀後れてゐるのであつて、遺物もそれに準じて新しいのは當然である。

〔圖說〕 此の像左手は舒べて袈裟の角を把り、右手は缺損してゐるが恐らく手を擧げて說法施無畏の相をしてゐられたものらしい。特にその缺所が恰も木彫の繼目の如き痕を存してゐるは注意すべきことである。頭頂は螺髮で、衣は通肩に着け衣襞は明瞭に雕出されてあり、頭光は悉く皆華紋を顯して光相たる所以の意義は殆ど失はれてゐる。

第七十三　佛坐像

中印度摩突羅地方遺品彫刻（野生司香雪氏撮影）

〔圖說〕 此の像も摩突羅地方から發見された彫刻であつて、菩提樹下に於て金剛師子座の上に結跏趺坐し、左手は舒べ曲して膝上を壓し、右手は擧げて說法の相に住してゐられる。頭は螺髮でその肉髻部が著しく突起して居り、且つそれは髮尾を捲き上げた樣にして而も螺形になつてゐる。此の種の頭頂は極めて珍らしいものではあるが、瓜哇のボロブヅールの彫刻、降魔成道圖などの中にその作例が無いでもない。又その衣相が偏袒右肩に披着されてゐる。其の左肩の部分の衣襞が極めて明瞭に彫出されてあるにかゝはらず、胸部や足部は後の崛多時代以後の造像例に見る如く、殆ど無紋になつてゐるのは何ういふものか。まさか後になつて衣襞の一部を削つた譯でもあるまい。又趺坐の下から座具の布端と覺しきものの見えるのは、南方純印度樣造像の通規である。そして佛の背後左右には脇士の菩薩と思はるべきものが侍立して居り、又佛の頭上左右には淨居天が供養してゐる。全體としての圖相は詳かでないが、或は菩提樹下の成道を顯はしたものの圖の一ではあるまいか。古代の成道圖は必ずしも觸地の印相でないことは、アマラーヴチーのものに既に



(第九十九圖)

先例があるのである。

此の像の製作年代は詳かでないが、臺座に刻されてある古梵字の書體より考へて、大體西紀第二三世紀頃の作品と思はれる。概して印度様の佛像に於て、衣襞の明瞭に彫出されてあるはその無紋のものよりは古いのであつて、後者を崛多王統時代以後のものとすれば、前者はその以前の作品である。前出の佛立像の如きも、此の像に比べては少しく新しからうが、兎も角も恐らく崛多時代以前のものであらう。

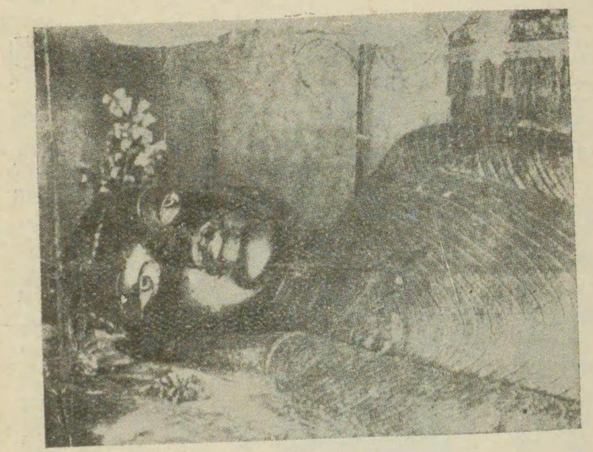
第七十四　菩薩立像

〔解題〕サールナート（Sārnāth）は古の波羅奈城即ち今のベナーレス市の北方三哩の地に在りて釋尊初轉法輪所鹿野苑の故趾である。而して此地からは相當に多數の遺品が發見されてゐるが、此の像は特に造像の由緒が臺座の上に銘記されてあつて、造像者並に造像の年代も明かに解り、印度に於ける造像史上極めて貴重なる資料を提供するものである。即ちその臺座の銘文に依ると、迦膩色迦大王の第三年冬第三月二十二日に、三藏法師比丘婆羅（Bala）等が薄伽梵の經行處に菩薩像一軀並に天蓋と柱を造つたとある。迦膩色迦王の出世即位の年代は詳かでないが、諸種の史料より推察して、假りに西紀第百三十年頃とせば、此の像の出來たのも略ぼ其の時代と

（第百一圖）中印度サールナート遺品彫刻（Daya Ram Sahni.—Catalogue of the Museum of Archaeology at Sārnāth, P. 33, Plate VII.）

見做すことが出來る。更に玄奘の西域記に、同地四佛經行の遺跡の上に如來經行の像のあつたことを記して「像の形は傑異にして威嚴肅然たり、肉髻の上には特に髻髮を出す。靈相隱れ無くして神鑒徴あり」と云ふてゐるが、玄奘が見た佛經行の像とは、恐らく此の像であつたであらう。

而して此の像の造像者バラ等が迦膩色迦大王の年號を使用してゐることは、若しバラ等が波羅奈の住民であつたとしたら、此の地は迦膩色迦王の領土でなければならなかつたであらう。若し然らざればバラ等は摩突羅あたりの他地方から此の聖地に來つて此の像をここに造顯したものと考へなくてはならぬのであるが、是れは摩突羅地方などが貴霜王統の影響を受けて夙に佛教の復興してゐたこと、銘文の文相及び法顯西遊時代此の地方の



（第百一圖）

佛教が餘り再興されて居らなかつた事情などを綜合するに、事實は寧ろ後者であらう。して見れば此の像は前の摩突羅の佛像と同一系統の造像者の手に成つたものではあるまいか

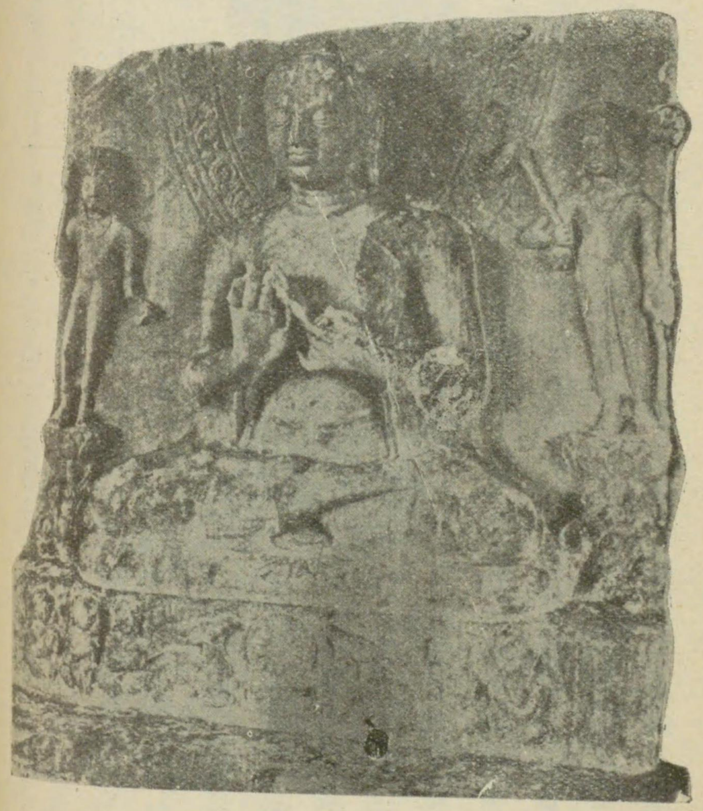
〔圖說〕 此の像、左手は腰邊に當りて袈裟の一端を把り、右手は缺損して存せざるもその姿勢並に缺け樣から考へて、恐らく擧手說法施無畏の相をしてゐたものであらうと思はれる。頭頂は顏面と俱に故意に毀損せしめてあるが、玄奘の記事に「肉髻の上、特に髻髮を出す」とある文から推察すると、髻の字は髮尾のことであるから、髻髮を出すといふは、前の摩突羅の佛像の頭髮の樣に作られて居たのでは無いであらうか。又衣の着け方は偏袒右肩ではあるが、衣襞は明に彫り顯はされてゐる。前の摩突羅の二像に比して稍古いものと認めらるるのである（第百〇二圖）。尙ほ此の種の系統の造像として、ラクナウ博物館所藏の佛立像（第百圖、野生司香雪氏撮影）及び拘尸那城精舍安置の大涅槃像の如き（第百〇一圖、野生司香雪氏撮影）亦孰れも嵬多王統時代以前、或は同時代初期の製作に準ずべきものであらう。

（第百二圖）

第七十五　佛坐像

中印度サールナート遺品彫刻
(J. Burress.—The Ancient monuments, Temples and Sculptures of India, Plate 66.)

〔圖說〕 此の佛像は、鹿野苑に於ける初轉法輪の形像であつて、臺座の面に鹿苑の表示たる二鹿形、及び轉法輪の表示たる輪寶があり、且つ最初の弟子たる阿若憍陳如等の五比丘が侍る。而して釋尊は臺上に大きく彫出され、結跏趺坐して二手胸に當て左手は內に向て袈裟角を把り、右手は頭指と大指と相捻して左の頭指の端を壓して轉法輪の勢を作し、頭は螺髮にて、衣は薄く殆ど衣紋の襞を見ざる程で、唯々座下に於て座具の布端と覺しきものが、例の如く判然と畫き出されてある。頭光の光相上に華文を彫せることも亦恆の如くである。唯々佛の左右に蓮華臺上に立てる二菩薩が、拂子等を持して侍立してゐる外は、大體に於て前に佛傳畫の部なる初轉法輪の項に揭げた圖像と同じである。その製作年代は、恐らくは凡そ西紀七世紀前後のものと思はれ、さして古い方の遺品ではない。蓋し此のサールナートの遺品としては、佛の誕生より涅槃に至る四相や八相



(第百三圖)

等を一具に彫畫したものを一特徴として比較的多數の遺物を存するのであるが、是れ亦概して西紀六七世紀以後なる中印度佛教再興以後の造像の様に感ぜらるるのである。

第七十六　菩薩立像

北印度健駄羅地方シャーバーズガルヒー遺品彫刻(A. Foucher.-L'art Gréco-Bouddhique du Gandhara, I. Frontispice)

〔解題〕　健駄邏(ガンダーラ)(Gandhāra)とは北印度迦濕彌羅の西方現今の西北境諸州に屬するペシヤワール(Peshawar)市を中心とする其の附近一帶の地を云ふ。蓋し此の地は印度の西北境に位し西方諸國との交通貿易の要衝になつてゐたために、早くから文化大に開け、頗る樞要な地域として認められてゐた。そして阿育王の時に既に末闍提大德が、此地及び迦濕彌羅に派遣されて佛教を弘め、且つ呾叉始羅には副王が置かれて三年毎に無遮大會を行ふて教法の宣傳に眼めた。孔雀王統の廢絶後も、中印度の佛教が全く衰退してから後も、此の地の佛教は却て漸次に勢力を增廣し、彼の舍竭城に都せし大夏希臘種の彌蘭王(Menander)の如きさへも之に歸依したのであつた。其の後月氏の貴霜(クサーナ)王統が南下して此の地を領有し、迦膩色迦王が布路沙城(プルシャプラ)(Purušapura)に奠都して大に佛教を興隆してより以來、一時佛教文化の中心地となつたのである。西紀第二世紀の中頃に、此の

（第百四圖）

地の出身者である支婁迦讖が支那へ來て、般若、般舟三昧、阿閦佛國等の諸大乘經を齎して飜譯したが、かの佛の形像を作りて之を禮拜することなどは、實に大乘佛教徒に依つて創始されたものであらうと考へらるゝに依れば、大乘佛教の興盛し佛形像を具せる完全なる佛傳圖及び佛形像の製作さるゝに到つたのも之より溯ること遠からざる時代であらう。而して此の地の佛教は其の後數世紀の間全盛を極めたのであつた。法顯三藏の西遊した西紀第四五世紀の交の如き、寺塔佛像等嚴麗を竭してゐたことは、その紀行中に明記せられてあるが、續いて第六世紀の初に惠生、宋雲等の巡禮するに至るまで、尙ほ頗る盛觀を呈してゐた。其の後幾もなく摩醯羅炬羅王の滅法に遭ひて打擊を受け、第七世紀初に玄奘の遊歷した頃は、昔日の面影は無かつたが、佛教は其の後なほ數世紀の間流傳してゐたのであつた。凡そ此の地に佛教の流傳されたのは、古く且つ久しいだけあつて、關係の遺物も新古錯雜して多數に存在して居り、中南印度で發達した純粹の印度樣のものとは頗る相違する所がある。

〔圖說〕 此の菩薩像は、健馱邏佛教最盛期否西紀第四五世紀頃の造像とも見るべきもので、如何にも相好端嚴な代表的尊像である。左手は少しく垂れ屈して腰邊を壓し、右手は少しく擧げて後世

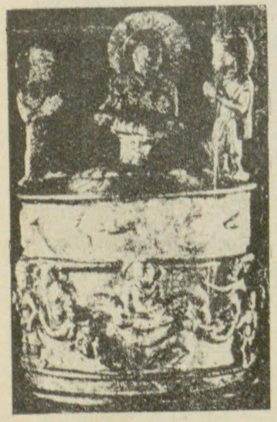
謂ゆる施無畏の相を爲し、環釧、瓔珞をもつて其の身を莊嚴し、下身には裙を着け、上半身は繒を纏ひ、頭頂も亦繒衣を以て嚴飾し、脚には草鞋樣のものを履いてゐる。その眉間に白毫の相があり、鼻下に髭がある。此の白毫相等は、アマラーヴチーやアジャンター等の純印度樣の造像にはその作例が尠ない。是れ寧ろ健駄邏樣の造像の特徴に數ふべきものの一である。

第七十七　佛坐像

北印度健駄邏地方サフリバフロール遺品彫刻
(A. Stein—Excavations at Sahri-Bahlol, P. 106, Plate XLI, Fig. 15.)

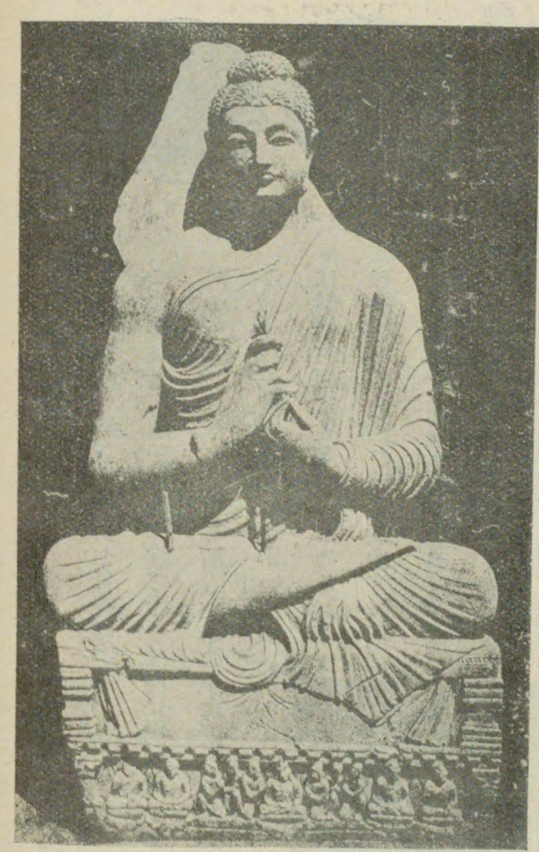
(第百五圖)

〔圖說〕 此の佛像は健駄邏地方の遺品として比較的最も新しいものの一で、確とした製作年代は解らぬが、約そ西紀第七世紀頃のものかと考へられる。其の像は臺上に結跏趺坐し兩手を胸に當て左手は內に向て拳の如くし、右手も亦內に向つて拳の如くにしても而も左拳の上に置かれ、頭髮は波狀形をしてゐるが其の波紋は極めて細かい。衣は偏袒右肩に披着されてゐる。(第百七圖) 蓋し此の健駄邏地方の遺品として最も古い佛像は、迦膩色迦王の古貨幣に鑄出された小さき立佛像であつて(第百五圖 A. Foucher.—The Beginnings of Buddhist Art, Plate XIV, 2.) それに次ではベシャーワール郊外、迦膩色迦大寺の遺跡から發見された金銅の舍利器の上に



(第百六圖)

第八　佛立像



(圖七四第)

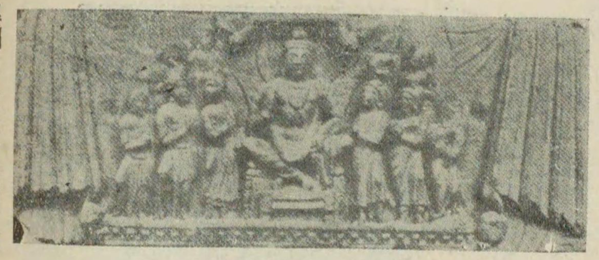
とりつけられた佛像である（第百六圖、A. Foucher.—The Beginnings of Buddhist Art, Plate XV, 1.）。是れ等は俱に西紀第二世紀の製作にかゝるものであつて、前に擧げたサールナートの遺品比丘バラの造顯せる菩薩立像と殆ど同時の作である。而してその像容は圖像が少さくて餘り明瞭ではないが、大體に於て前に

（第百八圖）

説明した中のアマラーヴチー、摩突羅、サールナートの古像の如く左手は袈裟の角を把り、右手は擧げて説法の相をしてゐるものと見られるのである。之より時代稍下れる西紀第三世紀乃至同第五世紀頃の遺品としては多數の佛傳圖があるが、古い處は

（第百九圖）

概ね學手說法の相であつて、稀に入定の相又は降魔の相といつた樣なものがあつても、サールナートや、アジャンター等のものに比べると、同じ手の下げ方でも、其の間に何となく趣を異にした感じがないでもない。而して今茲に是れ等諸像に於ける共通の特徴とも云ふべき點を强いて列擧して見ると、先づ第一には其の頭髮が南方印度樣の圖像の如く螺髮では無くて波狀形に作られてある。第二には其の坐像の時、南方印度樣の圖像では趺坐の下に座具の布端が見えるのが通例であるが、此の地方のものは、凡て大衣の端が長く座下に垂れ下つてゐる。第三に座は南方印度樣のものは大抵蓮華の上に座し又は立ち給ふてゐるが、此の地方のものは概して普通の牀、又は繩牀、又は師子牀で、彼の龍宮說法の圖と見らるべきものの外、蓮座に坐したまふたものは殆ど無い。其の他後光に就きては、此の地方のものは單純に圓光の相を爲し、異例としては光焰を附したものもあるが、印度樣のものは多く華紋を鏤刻して光相か何か一寸解



(第百十圖)

ぬものになつてゐる。又着衣の相に於ても、此の地方のものは衣襞が極めて明瞭に刻出されてあるが、印度樣のものの中、特に崛多王統時代以後のものは、衣薄く殆ど其の襞の見えぬ樣になつてゐるのである。又坐相の如き、趺坐の像及び普通の倚像の外に脚を交へた倚像もある。例せばナツーの遺品である。光焰を有する佛說法像(第百〇八圖 J. Burgess.—The Ancient monuments, Temples and Sculptures of India, Plate 5, Fig. 5.)及び大英博物館所藏の釋尊が耶輸陀羅の閨房を出でんとする圖(第百〇九圖 A. Foucher.—L'art Gréco-Bouddhique du Gandhāra, II. P. 297, Fig. 447.)、及び(第百一十圖 A. Foucher—L'art Gréco-Bouddhique du Gandhāra, II. P. 89, Fig. 348.)の如き、善く此の種の特徴の存する所を知るべきである。支那に於ける大同、龍門の造像が、稀には印度樣の作風をも交へ居るとはいへ、其の大體は、此の種健馱邏樣の造像を摸せるものなることは、頭髮、衣相、臺座、光相等の細部を檢察すれば、自からその造像の手法形式

(第百一十圖)

の由來する所が了解される筈である。

併かし乍ら今茲に掲げた佛の形像は、其の製作が後れてゐるだけに、其の形像も上記の古像とは異つてゐる。その頭髪の波紋が如何にも細かく、又その手印の相が後世密教所傳の金剛界曼荼羅に於ける大日如來の智拳印に類似せる如き、是れ確に前記の諸像より發達した新しい作物たることを證するものである（第百七圖）。此の種の佛像の作例としては、現に吐叉始羅に存する塑像などにも（第百十一圖、野生司香雪氏撮影）之を見るのである。猶ほ健馱邏佛像の頭髪は波狀形なるを常とするも、其の製作の比較的新しきものの中には、稀に螺髪形のものも存してゐる。

第七十八　佛立像

錫蘭アヌラーダプラ遺品彫刻
(A. Coomaraswamy.—Buddha and the Gospel of Buddhism, P. 326, Plate y.)

（第百十二圖）

〔解說〕錫蘭に佛教の傳はつたのは、阿育王の時に摩哂陀大德が傳道僧として派遣されたのに始まるといふことで、彼の印度本土の佛教が、盛衰の幾變遷を重ねたに對して、此の地の佛教は獨り今日に至るまで連綿として弘通されてゐるのである。從て此の地には由緒の正しい原始的な佛教が傳通されてゐる。尤も現今傳へてゐるのは小乘佛教のみであるが、古くは大乘佛教も併せ傳へてゐたものであることは、法顯や玄奘の記錄に徵して明かなる所である。且つ眞言密教も行はれ

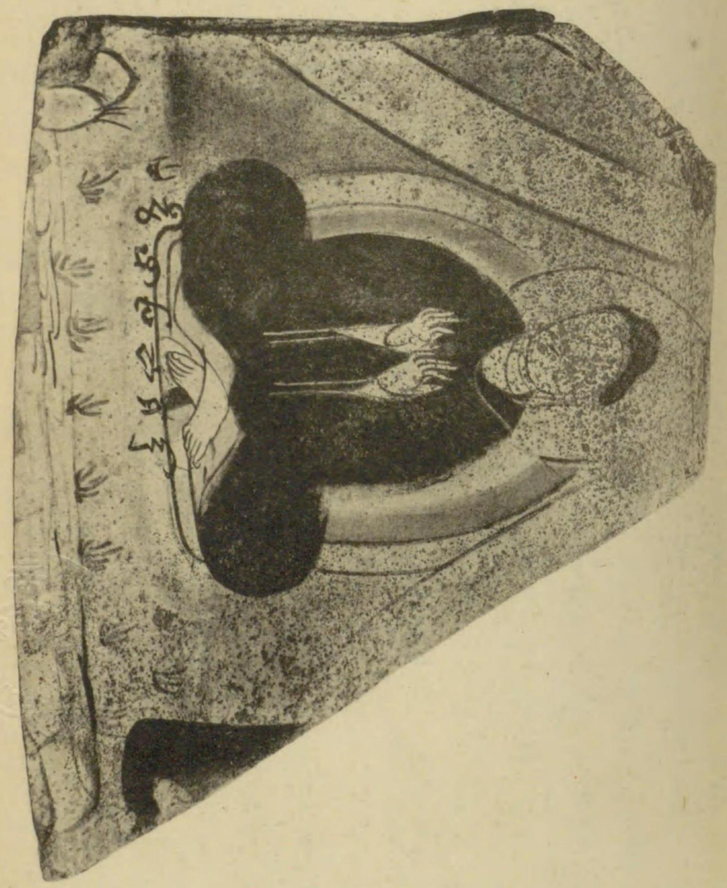
てゐたものなることは、不空が此の地に金剛頂部の密典を求めた事蹟及び現に觀音等の大乘の佛菩薩像及び文殊、金剛薩埵等の秘密諸尊像の遺存し發見せらるる事實に由つて明確である。

〔圖說〕 此の像、兩手俱に缺損してゐて解らぬが、その衣襞から考察して、左手は袈裟角を把り右手は擧げて說法施無畏の相に住してゐられたものと思はれる。是れ大體に於て前に出したアマラーヴチー、摩突羅、及びサールナートのバラ造顯の古像などと、略々同一形相の像であつて、其の製作年代も亦それ等と甲乙なき西紀第二三世紀頃のものであらう。

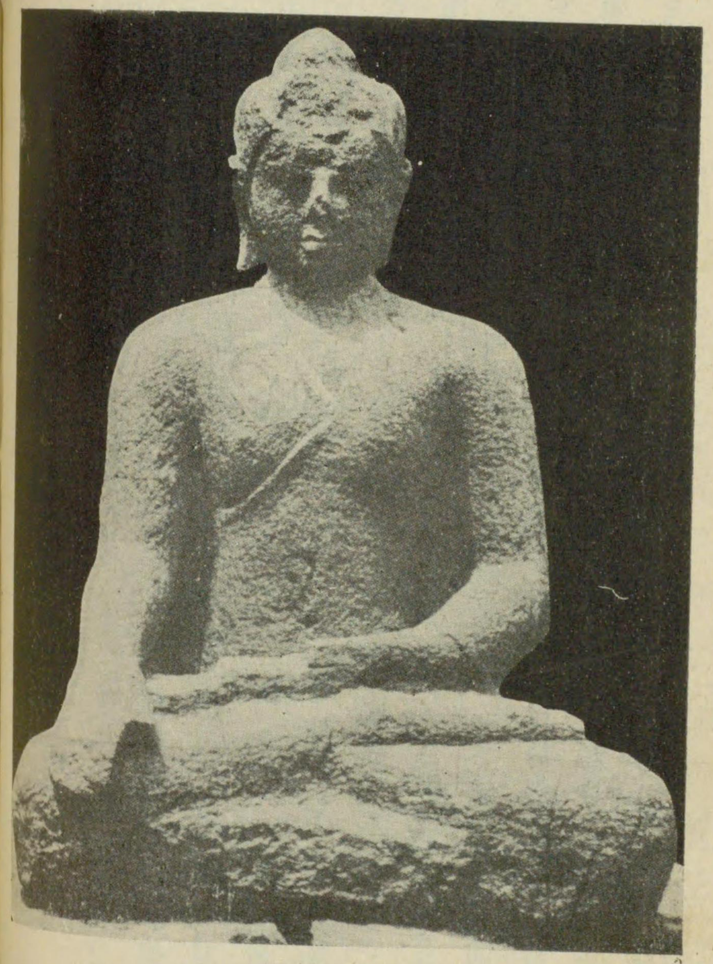
第七十九　佛坐像

瓜哇ボロブヅール遺品彫刻
(A Foucher.—The Beginnings of Buddhist Art, Plate XLIII, 1.)

〔解題〕 是の佛像は瓜哇のボロブヅール(Boro-Budur)塔寺に存せし佛像である。此の瓜哇に佛教の傳通した詳細な事蹟は詳かでないが、西紀第五世紀の初に、北印度罽賓出身の大德求那跋摩が師子國(錫蘭)を經て支那に來らんとする途中で暫らく此の地に滯留し、深く國王の歸依を受けた事蹟などより推察するに、相當に古い歴史を有するものと認められ、而も其の佛教の最も盛なりしは義淨不空等の印度に來往せし西紀第七八世紀頃と思はれる。併かし乍ら現存の遺物として存するのは、主として唯々ボロブヅールの塔寺及びその附近より發見さるるものであるが、其の塔の彫刻には精巧にして優麗無比なる佛傳及び本生の彫刻畫を有し、その塔及び附近より發見さるる佛像中には、密教關係の佛菩薩明王天等の諸尊像が尠なく無い。蓋し是れ等の遺物は、西紀第七八世紀から第十世紀頃に至る間に成れるもの多數を占むるが如く、かの佛傳畫、本生畫が、佛教藝術史上の至珍であると同時に、その密教尊像亦我が國所傳の密教との比較研究上頗る重要な意義を有するのである。之を思へば暹羅及び緬甸の佛教が古い歴史を有するに拘はらず、遺物として



第九佛坐像



(第百十三圖)

學術上の參考に資すべきものの殆ど發見されないことは、聊か不審の至りといはざるを得ぬ。

〔圖說〕 降魔の相を爲したまへる釋迦像で、卽ち結跏趺坐して左手は膝上に安じ、右手は舒べて膝上に垂れ地を指してゐられる。髮部、顏面倶に著しく損じてはゐるが、もとは恐らく螺髮形で而も相好は端嚴に在したのであらう。衣は薄く其の襞紋を顯はしてゐない。製作年代は解らぬが崛多時代以後の作として恐らくは西紀六七世紀頃のものであらう。

第八十　佛坐像及立像

支那新疆省于闐地方ダンダンウイルク遺品彫刻
(A. Stein.—Ancient Khotan, Plate LIV.)

〔解題〕 此の佛像及び光背の斷片は、西域の于闐から發見された彫刻である。于闐は支那新疆省の南隅に位し、卽ち南は崑崙山に據り北はタクラマカンの砂漠を隔てて遙に龜茲（今の庫車）と相對してゐる現今の和闐市である。此の地は漢代に於ける西域南道の大都城として、西は莎車（今の葉爾羌）、竭盤陀（今の塔什庫爾干）を經て、北印度、若しくは大夏に通ずる交通貿易の要衝にあたり、古くから開明の域に達してゐた。そして佛教も早くから傳通し、西紀第三四世紀の

(第百十四圖)

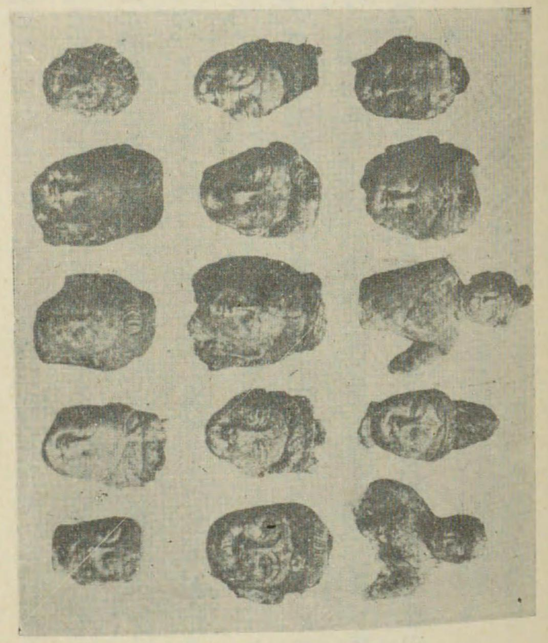
頃には既に頗る興隆し、大乘佛教が盛に流布されてゐた。華嚴、法華、般若を始め、支那に傳へられた大乘經典は此の地から請來されたものが甚だ多く、西域に於ける大乘佛教國として、佛教文化史上最も重要なる地點である。斯くて此の地の佛教は古く且つ久しく流行せし歴史を有するに拘はらず、その文華の故蹟は多く砂漠に埋もれて、遺品の世に紹介せられしものは甚だ僅少で、殆ど語るに足らないのである。

〔圖說〕 數箇の斷片の中で、圖の向て右下の佛像は左手は舒べて膝下に垂れ右手は擧げて說法の相に住してゐる。頭髮の相は解らぬが、恐らく健馱邏のものと同じく波狀形であつたのであらう。衣は通肩に披着され、光背は頭光の外に身光もあつて重光になつてゐる。左下の小像は定印に住してゐるが、此の像も光背は重光になつてゐる。中央の三立像は左手は垂れ右手は擧げて經行說法の相をしてゐられるが、此の像は大佛像の光背に化佛として刻出されたものであらう。此の像の製作年代は元より詳かでないが、餘り新しいものとも見えぬし、さればといつて、そう古いものとも思はれぬ。恐らく西紀第五六世紀頃のものではあるまいか。而して今茲に是等の佛像について大に注意すべきことは、後光として頭光身光俱に併せ存することである。古代印度の造像に於

ては、南方純印度様のものには、唯々頭光のみであつて身光の存するものは殆ど無い。それも光中に華模様等などを雕り出してしまつて、光相らしくなつてゐないものが多い。稀にはアジャンターの壁畫などの中に身光らしいものも無いではないが、數ふるに足る程のものは無い。然るに西域地方の造像には、頭光身光倶に存する謂ゆる重光を有する佛像が大部分を占めてゐる。此の重光の起原については、その由來する所は明かでないが、かの迦膩色迦大王の古貨幣に鑄出された佛像其の他に既にその光相の存するより見れば、健駄邏以北西域地方に於ける大乘教徒の造像には、古くから此の重光を有する佛像が造顯されたものと推知すべきであつて、支那に於ける大同、龍門等の諸龕像が多く重光を有するのは、かゝる西域地方造像の影響の然らしむる所である。

第八十一　佛菩薩頭　支那新疆省高昌地方遺品 (Le Coq.—Choscho, Plate 54.)

〔解題〕 高昌は支那新疆省の北東に位し、甘肅省の燉煌から西に進み天山北路を辿つて龜茲(クッチャ)に赴くに、其の正しく中路に在る都市であつて、古くは車師前國と稱せられてゐた。即ち今の吐魯



(圖五十百續)

蓄(Turfan)地方である。蓋し此の地は龜茲と燉煌との間にあつて、而も支那から西域へ通ずるには南北兩道の孰れを行くも必ず過ぎらざるを得ぬ樞要の地點である所から、早くから開明の域に達し、佛教の如きも彼の于闐、龜茲等に於て、既に西紀二三世紀頃から盛に傳播してゐた影響を受けて、燉煌並に凉州などと俱に、夙に盛に弘通されてゐた樣である。且つ此の地は同じ西域諸國の中でも、最も支那に接近してゐる丈に、西域の文化を支那に輸入し、支那の文化を西域に紹介するに與つて力あつた。且つ屢々支那の領土に從屬した關係上、支那の文化を接受することも亦比較的多かつた樣である。

〔圖說〕 此の佛菩薩の頭は、別にさしたる意義を見出すことは出來ない。元來此の地方は支那佛教文化の源泉をなした所であるが、現存の遺物は概ね唐宋以後支那の文化を逆に受け入れたものゝみであつて、此の地獨特の古代文化の芳躅に接することの出來ぬのは遺憾である。

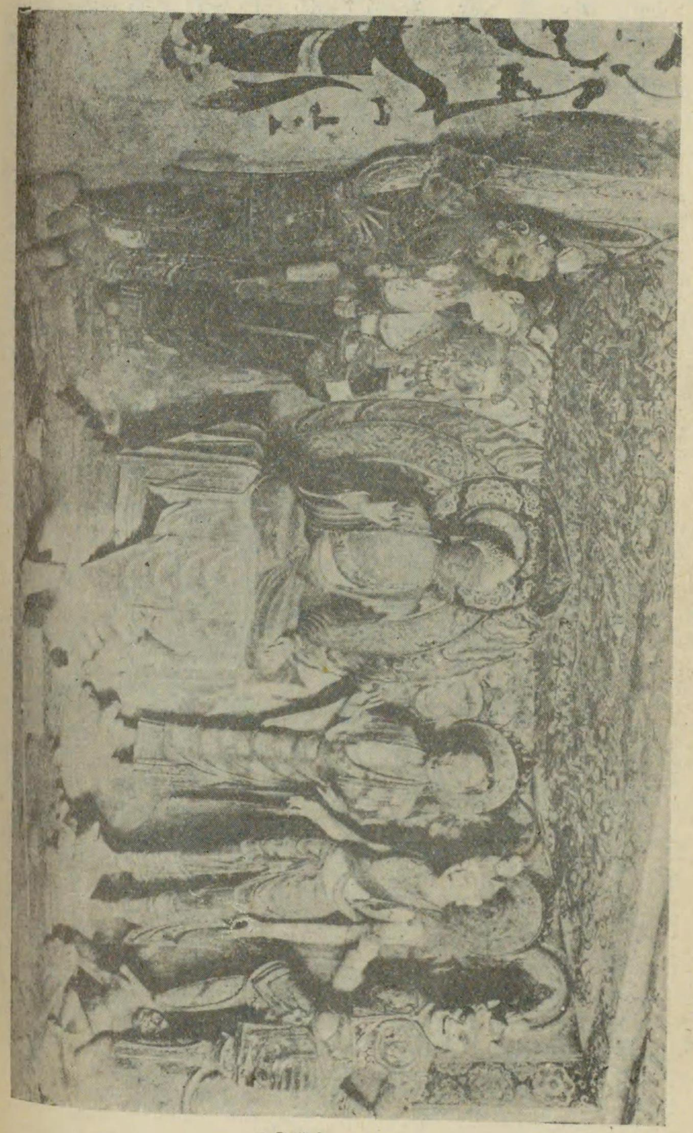
第八十二　佛菩薩像

支那甘肅省燉煌千佛洞安置
(A. Stein.—Ruins of Desert Cathay, II. P. 26, Fig. 161.)

〔解題〕 此の諸尊像は、燉煌の千佛洞に安置せらるゝ所のものである。燉煌は支那甘肅省の西邊に在つて、古來から西域に通ずる樞要なる都市であつた。此の地に佛教の流布したのは、彼の于闐や龜茲に傳通したのと略々其の時代を同じうするが如く、西紀第三世紀には竺法護三藏の樣な名德が出て、西域を歷遊して大教を傳へ、之を支那に弘通したのであつた。その後も引き續き支那と西域との中間に介在して佛教も盛に弘宣された。現に千佛洞の如き大窟寺も嚴存してゐるのである。而して此の地方の佛教最盛期と云へば、それは于闐や龜茲などゝ同じく西紀四五世紀頃であつたらしいのであるが、當時の遺物の存するものは殆ど見當らぬ。現に殘つてゐる佛像佛畫其の他は、孰れも皆唐が西域を征服して以後、唐の勢力文化が却て逆に此の地に及んでから出來たものゝみであつて、此の千佛洞安置の諸尊像並に壁畫の如きも、亦古い所で唐宋、新しいものになると元明代の人士の手に成つたものもあるのである。

〔圖說〕 本尊は何尊であるか詳かでないが、左手は舒べて膝に安じ、右手は擧げて大指無名指小指を屈して頭中の二指を竪て、頭は螺髮である、二聲聞、二菩薩、二天王が脇士として安置されてゐるが、是れ恐らくは中唐以後に於て、唐土の造像に摸して造顯されたものであらう。

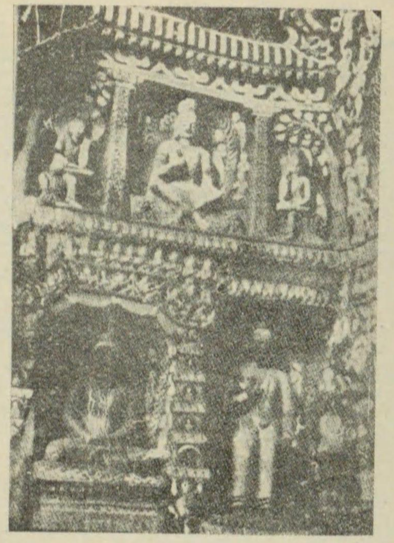
第十菩薩立像



第八十三　佛立像

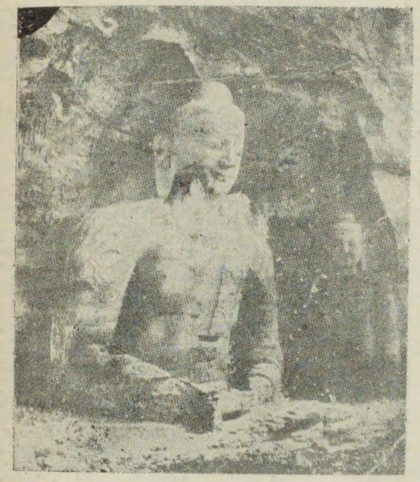
支那河南省洛陽龍門賓陽中洞北面本尊雕刻
（支那美術史雕塑篇附圖第五百四十八圖）

〔解題〕　龍門の佛龕は、北魏の孝文帝が此の洛陽に遷都して以後、太和景明の頃から隋唐に至る間に漸次開鑿されたもので、其の製作年代は窟龕によりて必ずしも一定してゐないばかりでなく、同一の龕の中にも時を異にして造顯された諸佛像が交雜して存在するのである。而して今此の賓陽洞の諸像は、概ね宣武帝の景明元年より明帝の正光四年に至る間に成つたもので、かの北都恒安の造像、即ち今の大同の造像に比し、時代は聊か下つてゐるが、孰れにしても兩者相併せて倶に南北朝時代に於ける北地の造像の精粹をなせるものなることは事實であつて、今像の如きも、その盛時の作の一に數ふ可きものである。



（第百十七圖）

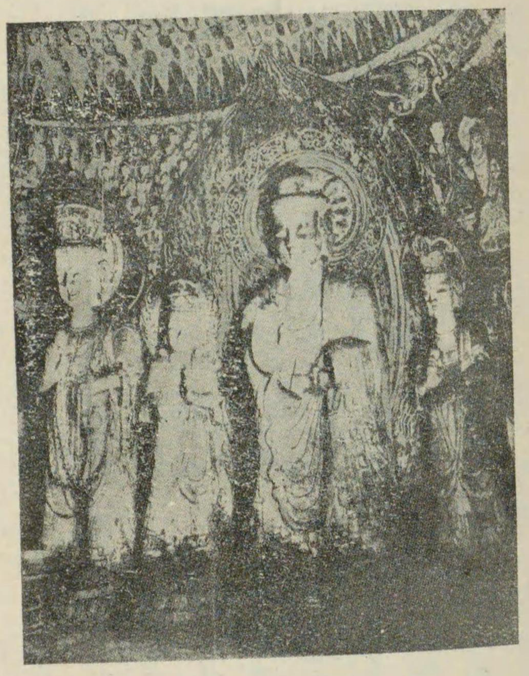
【圖說】此の像が何佛の形像であるかは詳かでないが、その中尊の像容は、左手は少しく下げ屈して掌を外に向けて無名指と小指を屈し、右手は擧げて掌を外に向け施無畏の相に住してゐられる。頭髮は螺髮で無くて波狀形をなし、衣は通肩に披着し、後背には重光ありて具に光焰の相をなし、又その脇侍の菩薩像は、頭に寶冠を戴き頂に圓光を帶び、孰れも返蓮華の座の上に立つてゐる。（第百十九圖）



（第百十八圖）

蓋し此の北魏時代の造像の形式につきては、今その細部に就きて考ふるに、頭髮、衣相、臺座、後光等概ね西域を通して健馱邏樣を承繼してゐるものなることが解る。

勿論大同靈巖第六洞に見る如き（第百十七圖）純粹の崛多時代印度樣の形式を摸したやうなものが稀にはなかつた譯ではないが、大體に於て十中八九までは健馱邏系統のものなることは、苟くもそれ等造像の細部を檢察したものゝ能に肯



（第百十九圖）

肯し得らるべき所である。彼の靈巖崖外の大佛の如き（第百十八圖）、顏貌そのものは或は妬跋族の風尙をなしてゐるかも知れぬが、その多數の化佛を附せる重光の如きは、恐らく西域造像の樣を摸したのであらう。その外此の時代の造像の特色の一に數ふべき衣相及びかの交脚倚像の如き、又既に健馱邏地方の造像にその作例あることは前に述べた通りである。

第八十四　佛坐像

支那山東省長淸縣五峰山蓮華洞本尊雕刻
（支那美術史雕塑篇附圖第六百七十一圖）

〔解題〕　凡そ支那の佛教遺物に於て、北地の造像は大同や龍門に無數の作例があるが、南地の造設に至つては、之に反して其の遺物が比較的少數であつて、殆んどその造像の一般形式さへも推知し得ぬ程である。併かし乍ら之を地理的關係、海陸交通並に實際の歷史的事實に徵し、支那南北朝時代の造像に於て、彼の北地に於ては大抵陸路より健馱邏並に西域樣を傳へ、南地の造像は主として海路より南方印度樣を傳へたものと考へられる。一例を云へば、梁の天監八年に郝騫等が印度より梅檀佛像を齎して楊都に歸還せるは、當時印度の模範的佛像を請來せしものと認むることが出來、又北魏の正光元年に惠生、宋雲等が、四塔變等を摸して健馱邏より洛陽に歸着せるは、是れ當時の健馱邏樣の精粹を傳承し來れるものと考ふることが出來る。北魏の造像

（第百二十圖）

が、大體健馱邏樣を摸せるものなることは事實の示す所、前に既に一言した通りである。但し此の時代に於ける南地の造像に就きては、大同、龍門のそれに比して、遺物の徵すべきものが殆ど見當らぬのであるが、併かし乍ら恐らく印度樣のものなりしことは、歷史的文獻の上より見て推測するに難くない。今像の如きは其の造顯の時代を凡そ六朝時代末のものとして時代は稍々下つてゐるが、南地造像の一例として、極めて重要な意義を有するものである。

〔圖說〕　此の像は何佛の形像であるか詳かで無いが、結跏趺坐して二手俱に膝に安じ、先づ右掌を下に左掌を其の上に安じて定相に住してゐる。頭は螺髮であつてそれに圓光があり、別に全身にわたりて擧身光がある。その顏貌及び着衣の相の如き、既に大分支那化してゐるために、一寸見た感じとしては龍門等に於ける北地の佛像と大差ない樣にも觀られるが、その螺髮の頭と蓮華模樣の圓光は、明かに印度樣の造式を承繼したものと推斷せらるるのである（第百二十一圖）。而して我が國に於ける最初の造像、卽ち飛鳥時代の佛像は、支那南北孰れの系統を承けたるものかと云ふに、普通には北魏造像の影響を受くるものと說明せられてゐるが、事實は必ずしもそうでないのである。尤も佛教渡來當初に當つて三韓から貢上された佛像及び工人の中には、北地の系統を

承けたる所謂北魏様の造像のあつたのは事實であつて、現に法隆寺の藥師三尊、並に御物四十八體佛の中にその造例がある。去り乍ら南支那から我が國に移住してゐた司馬達等が護持し其の孫鞍作止利の作つた元興寺丈六佛（飛鳥の大佛）及び法隆寺釋迦三尊の如きは、明に螺髪頭の南地の作法を傳へてゐるのである。推古天皇第十三年止利佛師の功を美めたまへる

（第百二十一圖）

詔勅を拜讀しても當時二種の樣式が並び行はれてゐた中で、特に南地の造樣が天皇の御意にもかなひ、時人の推賞する所となつてゐたことがわかる。言を換へていへば、我が飛鳥時代造像の本

樣は、北魏の造樣は少くして、却て南地卽ち梁陳地方の造樣が規範をなしてゐたものと思考されるのである。此の意味に於て今此の蓮華洞の本尊像と、我が飛鳥の大佛などとは、其の間に頗る緊密な關係を持つてゐるものとも云へるのである。

唐以後に於ては、海陸兩路から直接に印度に交通することとなり、盛に印度西域の文化を傳へて遂に彼の開元天寶の黃金時代を爲すに至つた。此の時代には印度樣も健馱邏樣も兼ね傳へたが、どちらかと云へば印度樣の方が主であつた。（第百二十圖、支那美術史彫塑篇附圖第八百十八圖）從つて其の造像形式の如きも、螺髪頭の印度樣のものゝ方が盛に流行した。我が國の造像もその影響を受けて、健馱邏樣波狀髪のものは殆ど其の後を絕ち、專ら螺髪頭印度樣のもののみが行はれたのである。

第十一　菩薩倚像

第四　世界圖

一　佛教の世界說

大宇宙の間に處して、私等の棲息してゐる世界が如何なる形態のものであり、且つ如何なる場所に位置してゐるかとの疑問に對しては、最近諸科學の發達と俱に、吾々人類の止住する此の大地は、空中に懸在する一の大圓團子であると證說せられ、何人も之を疑ふものはない。是れ謂ゆる地球說である。而して佛教經典中に說かれてある所の世界說は、須彌山を中心として九山八海の存在を明し、日月の運行を說く須彌說であつて、是れ本より二千幾百年も前から行はれた古傳說であるから、最近學界の定論たる地球說に一致せしむべきものでは無いが、併かし乍ら設へその形態等の說明に不備の點が尠なくないにしても、謂ゆる三千大千世界萬億の須彌といふたやうに此の世界が圓形で而も無數に大空中に懸列してゐることを明し、且つ又此の世界が或時間を經過する毎に成壞することがあると說く所などは、寧ろ隱約の間に最近の學說とも吻合するやうな氣

がせぬでもない。否斯かる世界說の新古當否は別問題として、兎も角も古來佛敎の神話並に學說は、此の世界說を基本にして成立つてゐるのであるから、之を知らずに佛敎の敎理、神話、文學を語ることは出來ない。そして之に關する圖像の製作も既に種々なものが相當にあつて、而も之を知つて然る後に初めて五道六道十界等に關する概念を得ることが出來、乃至諸佛諸菩薩諸尊神天等の本緣本住處等が解るわけであるから、こゝに便宜上先づ關係圖像の一部を解說することにしたのである。

二　世界說に關する主要なる經典の解題

閻浮提、須彌山、三界、六道、三千大千世界などといつたやうな言葉は、佛敎經典の孰れの所にも用ひてない所は無い程であるが、今玆にそれ等經典中、特に其の書本の全冊に涉りて此の世界說のみを記述したもの、又は特に之に就き詳說を出せる典籍數部を出して、譯者卷數等を紹介して置かう。

1　大樓炭經十卷　　西晉法立　法炬　共譯

此の經は、西晉惠帝の世（西紀二九〇―三〇六）に法立三藏が法炬三藏と共に翻譯したもので、一部全六卷、本と長阿含經第四分世記經の異出であつて閻浮利品、鬱單曰品（已上卷第一）轉輪聖王品（卷第一第二）泥梨品、阿須倫品（已上卷第二）龍鳥品、高善士品、四天王品（已上卷第三）忉利天品（卷第四）戰鬪品、三小劫品、災變品（已上卷第五）天地成品（卷第六）の十三品より成り、吾々の居住すと傳へらるる閻浮利（閻浮提）の說明から始めて、須彌山、同四洲、四天王天、忉利天、乃至天地成壞の次第に至るまで悉しく說明してある。（辰十、初―二八右・大正一、二七七―三〇九）

2　起世經十卷　　隋闍那崛多譯

此の經は、隋文帝の開皇年中（西紀五八一―六〇〇）闍那崛多三藏の翻譯したもので、一部全十卷、閻浮洲品（卷第一）鬱單越洲品（卷第一、第二）轉輪聖王品（卷第二）地獄品（卷第二、第三、第四）諸龍金翅鳥品（卷第五）阿修羅品（卷第六）四天王品（卷第六）三十三天品（卷第六、第七、第八）戰鬪品（卷第八）劫住品、世住品（已上卷第九）最勝品（卷第九、第十）の十二品より成り、前の大樓炭經と同本異譯である。（辰一、二八左―七二左・大正一、三一〇―三六五）

此の經は、隋煬帝の大業年中（西紀六〇五―六一六）達摩笈多三藏の翻譯したもので、一部全十卷、閻浮洲品（卷第一）鬱多囉究留品（卷第一、第二）轉輪王品（卷第二）地獄品（卷第二、第三、第四）諸龍金翅鳥品（卷第五）阿修羅品（卷第五、第六）四天王品（卷第六）三十三天品（卷第六、第七、第八）戰鬪品（卷第八）劫住品、住世品（已上卷第九）最勝品（卷第九、第十）の十二品より成り、前の起世經の同本異譯である。（辰一、七二左―一一六左・大正三、六五―四二〇）

4　長阿含經（自第十八卷至第二十二卷）　　後秦　佛陀耶舍　竺佛念　共譯

此の經は、後秦姚興の弘始十五年（西紀四一四）に佛陀耶舍三藏が、竺佛念法師と共に翻譯したもので、一部全二十二卷、四分二十四經（第一分三經、第二分十五經、第三分十經、第四分一經）の中、第四分の世記經は、第十八卷より第二十二卷に至る五卷に亙り、其の中更に閻浮提洲品、鬱單曰品、轉輪聖王品（已上卷第十八）地獄品、龍鳥品（已上卷第十九）阿須倫品、四天王品、忉利天品（已上卷第二十）三災品、戰鬪品（已上卷第二十一）三中劫品、世本緣品（已上卷第二十二）の十二品に分ち、閻浮提等の須彌四洲、地獄、龍鳥、阿修羅等の諸界並に四天王、忉利等の諸天、乃至世界成壞の事に至るまで、詳細に之を說明してある。前記大樓炭經、起世經等は、此の經より別行したもので

ある。（戻九、九二左―一二一右・大正一、一一四―一四九）

5　立世阿毗曇論十卷　　陳眞諦譯

此の論は、陳武帝の永定三年（西紀五五九）、眞諦三藏の翻譯したもので、一部全十卷、地動品、南剡浮提品、六大國品、夜叉神品（已上卷第一）漏閣耆利象王品、四天王品、數量品、天住處品（已上卷第二）觀喜園品、衆車園品、惡口園品、雜園品、波利夜多品（已上卷第三）提頭賴吒城品、毗留勒叉城品、毗留博叉城品、毗沙門城品（已上卷第四）天非天鬪戰品、日月行品（已上卷第五）云何品（卷第六）受生品、壽量品（已上卷第七）地獄品（更生地獄品、黑繩地獄品、聚磑地獄品、叫喚地獄品、大叫喚地獄品、燒炙地獄品、大燒炙地獄品、阿毘止地獄品、外園隔地獄品、閻羅地獄品）（已上卷第九）小三災疾疫品（小三災刀兵品、小三災飢餓品、大三災水災品）（已上卷第十）の二十五品より成り、叙述丁寧にして細大漏すところ無く、凡そ佛教の世界說として其の說明の詳細なるは、大藏經中本書の右に出づるものはないのである。（秋一初―四六右・大正三二、一七三―三二六）

6　阿毗達磨大毗婆沙論第百七十二　　五百大阿羅漢造　唐玄奘譯

此の論は、西紀第二世紀頃、迦濕彌羅國に於て脇尊者等五百の大德に依つて編纂されたものを、

唐高宗の顯慶元年（西紀六五六）より同四年に至る間に玄奘三藏の翻譯したもので、一部全二百卷の中、その第百七十二卷に地獄須彌四洲等に關して比較的詳細に重要な說明がある。（收七、七七右、八一右・大正二七、八六四―八六九）

7　阿毘達磨俱舍論卷第十一、第十二　　世親菩薩造　唐玄奘譯

此の論は、西紀第五世紀頃、世親菩薩の著作したものを、唐高宗の永徽二年（西紀六五一）五月より同五年七月に至る間に玄奘三藏の翻譯したもので、一部全三十卷、分別界品、分別根品乃至破執我品の九品より成る中、その分別世品中の卷第十一第十二に、此の佛教世界說の全般にわたつて可なり詳しい說明があつて、而もその記事は、長阿含經、起世經等の說と多少相違する所があるが、佛教所傳の世界說を記せるものとしては、比較的善く纒つており、且つ弘く後世學徒の間に依用せられてゐる。是れ前に擧げた長阿含經及び立世阿毗曇論と併せて佛教世界說の研究上最も須要な典籍である。（收十、二三左―三二右・大正二九、五七―六七）

8　阿毗達磨順正理論卷第三十一、第三十二　　衆賢論師造　唐玄奘譯

此の論は、西紀第五世紀頃、衆賢論師の著作したものを、唐高宗の永徽四年（西紀六五三）正月

より翌五年七月に至る間に、玄奘三藏の翻譯したもので、一部全八十卷、辨本事品、辨差別品、辨緣起品、乃至辨定品の八品より成り、其の辨緣起品中卷第三十一、第三十二の兩卷に、前の俱舍論などと同じく、此の世界說全般につきて略々詳細なる說明がある。（冬四、五〇右—六一左、大正二九、五一四—五二七）

9　阿毗達磨顯宗論卷第十六、第十七　　衆賢論師造　唐玄奘譯

此の論は、衆賢論師の著作を唐高宗の永徽二年（西紀六五一）四月より翌三年十月に至る間に、玄奘三藏の翻譯したもので、一部全四十卷、序品、辨本事品乃至辨定品の九品より成り、其の辨緣起品中第十六、第十七の兩卷に、世界說に就きての詳說があるが、その記事は、前の順正理論の說と同じである。（冬七、六六左—七五右・大正二九、八四九—八五九）

10　彰所知論二卷　　元發合思巴造　沙羅巴譯

此の論は、元世祖の至元十二年（西紀一二七四）、發合思巴帝師の著作せるを、後に沙羅巴法師の翻譯したものであつて、器世界品、情世界品（已上上卷）道法品、果法品、無爲法品（已上下卷）の五品より成り、その上卷器世界、情世界の二品に於て、是れ亦世界說に關し詳細な說明を加へてゐるのである。（藏四、四左—一四右・大正三二、二二六—二三七）

11　正法念處經七十卷　　東魏瞿曇般若流支譯

此の經は、東魏孝靜帝の興和元年（西紀五三九）、瞿曇般若流支三藏の翻譯したもので、一部全七十卷、十善業道品（卷第一、第二）生死品（自三卷至五卷）地獄品（自六卷至十五卷）餓鬼品（卷第十六、第十七）畜生品（自第十八卷至第二十一卷）觀天品（自第二十二卷至六十三卷）身念處品（自第六十四卷至第七十卷）の七品より成り、五道生死の相、並にその業因を說くこと詳細を竭してゐる。即ち此經の說は世界說として組織的に纏つてはゐないが、地獄、餓鬼、畜生乃至諸天趣の有樣を明すこと、微を穿ち細を盡して又餘蘊ないのである。（宿一—四・大正一七、一—四一八）

12　大智度論卷第十六（往一、一〇一已下・大正二五、一七四—一八〇）　姚秦鳩摩羅什譯

13　觀佛三昧海經卷第五（宙五、一九左已下・大正一五、六六八—六七四）　東晉佛陀跋陀羅譯

14　雜阿毗曇心論第二（冬十二、三三左已下・大正二八、八七〇—）　劉宋僧伽跋摩等譯

など、此等世界說の中の一部を散說するものに至つては、大藏經中に數へきれぬ程多數の典據があるのである。

三　世界說の大要

佛教の世界說は、長阿含經、俱舍論、及び立世阿毗曇論等に明す所、各々必ずしも一致しては居ないが、今比較的弘く人に知られてゐる俱舍論等の說に依るに、

凡そ此の世界は、風水金の三輪に依りて把持せられ、須彌山（蘇迷盧 Sumeru. 妙高山）を中心として九山八海があり、それに日月等を加へて一世界をなしてゐる。而も是れ等の九山は孰れも金輪の上に住し水中に入ること八萬由旬（一由旬は支那里數の四十里）であつて、其の中須彌山は中央に處し、四寶を體とし、水上高さ八萬由旬、頂上の闊さ亦八萬由旬あるのであるが、其の山の水際より一萬由旬の處に第一の層級があり、山を圍繞して傍に出づること一萬六千由旬、之には堅手鬼神（迦留波陀 Karoṭapāṇayo-deva）が止住してゐる。更に上に向ふこと一萬由旬の處に第二の層級があり、山を圍繞し傍に出づること八千由旬、之には持鬘鬼神（Mālādhāra. 持華）が止住してゐる。又上に向ふこと一萬由旬の處に第三の層級があり、山を圍繞して傍に出づること四千由旬、之には常醉鬼神（Sadāmadta. 常勝）が止住してゐる。又更に上に向ふこと一萬由旬

の處に第四の層級があり、山を圍繞して傍に出づること二千由旬、是の處は四大天王及び其の眷屬の居止する所であつて、東方に持國天王（提頭賴吒 Dhṛtarāṣṭra）南方に增長天王（毗樓勒叉 Virūḍhaka）西方に廣目天王（毗樓博叉 Virūpākṣa）北方に多聞天王（毗沙門 Vaiśravana）の居城がある。而して山の頂上は卽ち忉利天（Trayastriṃsa. 三十三天）であつて、是れ天帝釋（Indra. 因陀羅）等三十三天の居住する所である。其の地の中央に善見（Sudarśana）大城がある。卽ち帝釋の都城であつて、四面各二千五百由旬、その城の中には殊勝殿（皮闍延多殿 Vaijayanta prāsāda）がある。四面各二百五十由旬、種々の妙寶を以て莊嚴せられてゐる。是れ帝釋所住の宮殿である。その城外の四方に當り、南に衆車、東に麁惡、西に雜林、北に喜林の四苑林があり、四苑の四邊に妙池がある。又城外の東北に圓生樹（波利夜多 Pāriyātra）、同西南の角には善法（Sudharma）堂があり、且つ四方に諸小王の宮殿がある。又山頂の四角は各一峯あつて高さ廣さとも五百由旬、金剛手神（跋闍羅婆膩 Vajrapāṇi. 執金剛、密迹力士）が中に止住して諸天を守護してゐるとのことである。

次に須彌山の外圍には中間八萬由旬の香水海を隔てて周匝して持雙山（踰健達羅 Yugaṃdhara）

があつて、高さ四萬由旬、濶さ亦四萬由旬ある。又持雙山の外圍には四萬由旬の香水海を隔てゝ周匝して持軸山（伊沙駄羅（イーシャーダーラ） īsādhāra）があつて、高さ二萬由旬、濶さ亦二萬由旬ある。又持軸山の外圍には二萬由旬の香水海を隔てゝ周匝して擔木山（竭地洛迦（カヂラカ） Khadiraka）があつて、高さ一萬由旬、濶さ亦一萬由旬ある。又擔木山の外圍には一萬由旬の香水海を隔てゝ周匝して善見山（蘇達梨舍那（スダルシャナ） Sudarśana）があつて、高さ五千由旬、濶さ亦五千由旬ある。又善見山の外圍には五千由旬の香水海を隔てゝ周匝して馬耳山（頞濕縛羯拏（アシュヴカルナ） Aśvakarṇa）があつて、高さ二千五百由旬、濶さ亦二千五百由旬ある。又馬耳山の外圍には、千五百由旬の香水海を隔てゝ周匝して障碍山（毗那怛迦（ビナタカ） Vinataka）があつて、高さ千二百五十由旬、濶さ亦千二百五十由旬ある。又障碍山の外圍には、千二百五十由旬の香水海を隔てゝ持地山（尼民達羅（ニミンダラ） Nimiṃdhara）があつて、高さ六百二十五由旬、濶さ亦六百二十五由旬ある。而して已上七山は皆悉く金を以て體とするところから合して七金山とも稱せられてゐる。更に持地山の外圍には大海があつて、中間二億二萬二千由旬を隔てて鐵輪圍山（斫迦羅（チャクラヴァーダ） Cakravāḍa. 鐵圍）と相對してゐるが、その大海は鹹水であつて其の中には四洲等がある。鐵圍山は鐵を以て體とし高さ二百十二由旬半、濶さ亦二百十二由旬半あ

り、是れは此の世界の外廓である。

四洲とは吾々人間の住する所であつて、持地山と鐵圍山との中間大海中に在る大洲であつて、遙に須彌山と相對して各四方に位してゐる。その中で南の瞻部洲（閻浮提（ジャムブドヴィーパ） Jambudvīpa）は其の形車の如く、北は廣く南は狹く三邊は量相等しくて、南邊は廣さ僅に三由旬半に過ぎざるも、他の三邊は各二千五百由旬ある。洲の中に金剛座（Vajrāsana）がある。是は諸佛成道の處である。又洲中より北に向つて三處に三重の黑山があり、其の北に大雪山があつて、又その北に香醉（Gandhamādana）山がある。而してその大雪山と香醉山との中間に無熱惱池（阿耨達（アナヴダタ） Anavadata. 無熱）があり、縱廣五十由旬、池の四面より殑伽等の四大河を出してゐる。池側に瞻部林樹（Jambuṣaṇḍa. 閻浮樹）があつて形高大にして其の果の甘味である所から此の洲の名を立てたのであるといはれてゐる。洲邊の左右には遮末羅、筏羅遮末羅の二中洲がある。東の毗提訶洲（弗于逮（プールヴァヴィデハ） Pūrvavideha. 東勝身洲）は其の形東は狹く西は廣く三邊は其の量相等しくて、恰も半月のやうである。東は三百五十由旬しかないが他の三邊は各二千由旬ある。洲邊の左右には、更に提訶、毗提訶の二中洲がある。西の瞿陀尼洲（俱耶尼（アヴァラゴーダニーヤ） Avaragodānīya. 西牛貨洲）は、其の形圓なること滿月の如く、

徑二千五百由旬ある。且つ洲邊の左右には舍攄、嗢怛羅漫怛里拏の二中洲がある。北の俱盧洲（鬱單越 Uttarakuru. 北鳩留洲）は、其の形方形の如くにして、四邊量等しく各二千由旬ある。且つ洲邊の左右には矩拉婆、憍拉婆の二中洲があるのである。而して是れ等四洲の中間大海中には龍及び阿修羅の住處があり、又その洲邊には迦樓羅鳥の住處もある。

次に日月衆星は、四洲の上方四萬由旬の空中に在り、五風の漂はす所となつて常に須彌山を回りて一定の路を旋還運行する。其の中で日（阿爾底也 Aditya. 又は須利耶 Sūrya. 大陽、日宮）は、其の廣さ五十一由旬、厚さ五十一由旬、周廻百五十三由旬あつて、下面の頗胝迦（Sphaṭikam）寶は火珠より成り、能く熱し能く照すといはれ、又月（戰捺羅 Candra. 蘇摩 Soma. 大陰、月宮）は、其の廣さ五十由旬、厚さ五十由旬、周廻百五十由旬あつて、下面の頗胝迦寶は水珠より成り、能く冷し能く照すといふことである。

次に須彌山の上空に夜摩天（焰摩、炎、焰 Yama. 時分、善時）、兜率天（兜率陀、兜術、覩史多 Tuṣita. 知足、妙足、第四天）、化樂天（尼摩羅 Nirmāṇaratayа. 樂變化、無憍樂、化自在）、他化自在天（波羅尼蜜和耶跋致 Paranirmitavaśavartina. 化應聲、第六天、摩天）の四天があり、その

他化自在天上には特に魔王波旬の宮殿がある。已上四天に前の四天王、忉利の二天を加へて六欲天と稱するのである。

それから他化自在天の上方空中に、更に梵衆天（梵波利沙 Brahmapāriṣadya. 淨眷屬）、梵輔天（梵富樓 Brahmapurohita）大梵天（摩訶梵 Mahābrahmāṇa）、已上三天を總じて初禪天とも云ふ。少光天（波利陀 Parittābha. 水微）、無量光天（阿波摩那阿婆 Apramāṇābha. 無量水）、光音天（阿會亙修 Ābhāsvara. 光曜、極光淨、水音、晃昱、遍勝光）、已上三天を總じて二禪天とも云ふ。少淨天（波利陀首訶 Parittaśubha）、無量淨天（阿波羅摩那 Apramāṇaśubha）、遍淨天（首波訖栗那 Śubhakṛtsna）、已上三天を總じて三禪天とも云ふ。無雲天（阿那婆伽 Anabhraka）、福生天（比呼波 Puṇyaprasava）、廣果天（鞞隷呵波羅 Bṛhatphala. 果實）、無想天、無煩天（阿和 Avṛha）、無熱天（阿答波 Atapa）、善現天（修提舍 Sudṛśa）善見天（須提舍那 Sudarśana. 快見、妙見、大善見）、色究竟天（阿迦膩瑟㩦、阿迦尼吒 Akaniṣṭha. 一善、無結愛）、已上九天を總じて四禪天ともいひ、又此の中無煩、無熱、善現、善見、色究竟の五天を五淨居天、又は略して淨居天ともいふ。そして色究竟天上には、魔醯首羅の住處（Maḥāmaheśvarāyatana. 大自在天宮）があり、上

記梵衆天已下四禪十八天を色界十八梵天とも云ふ。

又色究竟天の上空に、更に空無邊處天（Ākāśānantyāyatana.）、識無邊處天（Vijñānānantyāyatana）無所有處天（Ākiñcanyāyatana）、非想非々想處天（Nāivasaṃjñānāsaṃjñāyatana）の四天がある。之を無色界の四天といふ。今要覽のために諸天の名稱及び身長、壽量を表示すれば左の通りである。（便宜上佛祖統紀の說に依る）。

- 六欲天界
  - 地居
    - 四天王天　身長半里　壽五百歲　人間五十年爲一日
    - 忉利天　身長一里　壽一千歲　人間百年爲一日
  - 空居
    - 兜率陀天　身長一里半　壽二千歲　人間二百年爲一日
    - 須燄摩天　身長二里　壽四千歲　人間四百年爲一日
    - 樂變化天　身長二里半　壽八千歲　人間八百年爲一日
    - 他化自在天　身長三里　壽一萬六千歲　人間千六百年爲一日
- 初禪
  - 梵衆天　身長半由旬　壽二十小劫
  - 梵輔天　身長一由旬　壽四十小劫
  - 大梵天　身長二由旬　壽六十小劫

- 三界
  - 色界十八天
    - 二禪
      - 少光天　身長二由旬　壽二大劫
      - 無量淨天　身長四由旬　壽四大劫
      - 光音天　身長八由旬　壽八大劫
    - 三禪
      - 少淨天　身長十六由旬　壽十六大劫
      - 無量光天　身長三十二由旬　壽三十二大劫
      - 遍淨天　身長六十四由旬　壽六十四大劫
    - 四禪
      - 福愛天　身長百二十五由旬　壽百二十五大劫
      - 福生天　身長三百五十由旬　壽二百五十大劫
      - 廣果天　身長五百由旬　壽五百大劫
      - 無想天　身天五百由旬　壽五百大劫
      - 無煩天　身長一千由旬　壽一千大劫
      - 無熱天　身長二千由旬　壽二千大劫
      - 善現天　身長四千由旬　壽四千大劫
      - 善見天　身長八千由旬　壽八千大劫
      - 色究竟天　身長一萬六千由旬　壽一萬六千大劫
  - 無色界四天
    - 空無邊處天　——　壽二萬大劫
    - 識無邊處天　——　壽四萬大劫
    - 無所有處天　——　壽六萬大劫
    - 非想非非想處天　——　壽八萬大劫